

中国語の「動相形式」“着”に関する研究  
－「線状視点」からの検討を中心に－

2020 年 9 月  
新潟大学大学院  
現代社会文化研究科  
氏名 ZHENG Qiong hua

## 目次

凡例 .....	IV
表の目録.....	VI
第1章 序論 .....	1
1.1 研究対象 .....	1
1.2 “着”の文法化の過程 .....	1
1.3 研究目的 .....	3
1.4 中国語の「動相」と「動相形式」 .....	3
1.4.1 中国語の「動相」に関する先行研究の概観 .....	3
1.4.2 本論文における中国語の「動相」と「動相形式」の定義 .....	5
1.5 論文の構成と概要 .....	10
第2章 “着”の本質に関する本論文の捉え方 .....	13
2.1 はじめに .....	13
2.2 先行研究 .....	14
2.2.1 進行を表すという主張 .....	14
2.2.2 進行ではなく持続を表すという主張 .....	15
2.2.3 進行と持続の両方を表すという主張 .....	15
2.3 本論文における進行と持続の定義 .....	17
2.4 スキャニングの認知プロセスから見る“着”と“V着” .....	19
2.5 “着”の「線状視点」から捉えた“V着”の「線状過程」の意味特徴 .....	29
2.5.1 不完結性 .....	30
2.5.2 持続性 .....	33

2.5.3	動静二重性.....	36
2.5.4	均質性 .....	37
2.6	まとめ.....	38
第3章	動詞と“着”の共起関係から見る“着”の「線状視点」.....	40
3.1	はじめに .....	40
3.2	先行研究 .....	41
3.2.1	“着”と共起できる動詞だけを考察する研究 .....	42
3.2.2	“着”との共起関係を基準として動詞分類を考察する研究.....	44
3.2.3	動詞を分類してから“着”との共起関係を考察する研究.....	48
3.3	各種の動詞と“着”との共起関係 .....	52
3.3.1	状態動詞と“着”との共起関係 .....	52
3.3.2	活動動詞と“着”との共起関係 .....	65
3.3.3	結果動詞と“着”との共起関係 .....	71
3.3.4	完成動詞と“着”との共起関係 .....	74
3.3.5	動詞と“着”との共起関係から見る“着”と“V着”の本質 .....	77
3.4	まとめ.....	79
第4章	“V着”と“V了”の違いから見る“着”の「線状視点」.....	80
4.1	はじめに .....	80
4.2	本章で取り上げる存在構文 .....	82
4.3	“L+V着/了+NP”における“着”と“了”の違いに関する先行研究.....	85
4.4	“L+V着/了+NP”における“着”/“了”と共起する動詞.....	86
4.4.1	“L+V着/了+NP”における“着”としか共起できない動詞 .....	88
4.4.2	“L+V着/了+NP”における“了”としか共起できない動詞.....	91

4.4.3 “L+V 着/了+NP”における“着”“了”の両方と共起できる動詞	98
4.4.4 “着”/“了”と共起する動詞から見る“V 着”“V 了”の役割	
.....	104
4.5 “V 着”と“V 了”の構文環境	105
4.6 まとめ	112
第5章 “着”と“在”の違いから見る“着”の「線状視点」	114
5.1 はじめに	114
5.2 先行研究	115
5.3 “着”、“在”と時間との関係	118
5.4 「録画」と「写真」のイメージから見る“着”と“在”の違い	123
5.5 共起する様態描写から見る“着”と“在”の違い	125
5.6 まとめ	128
第6章 “V 着”の“完句成分”から見る“着”の「線状視点」	130
6.1 はじめに	130
6.2 文と“完句成分”	131
6.3 “着”と“完句成分”	134
6.4 “V 着”を伴うフレーズを独立文として完結させる“完句成分”	138
6.5 まとめ	144
第7章 終章	146
参考文献	151
謝辞	158

## 凡例

本論文において使用されている例文のうち、出典が明示されていない例文は筆者の作例である。また本論文の作例の容認度については、内省の上で、標準語を話す 21 人のインフォーマントによるチェックを受けている。また、下記のコーパス資料、検索エンジンを使って例文を検索した。

① 次の 2 つのコーパス資料を用いた。

北京大学中国語言語研究センター(略称CCL:<http://ccl.pku.edu.cn>)

北京言語大学大データ与言語教育研究所(略称BCC:<http://bcc.blcu.edu.cn>)

② 次の検索エンジンを用いた。

“V 着”に関しては、日常記事においてもよく使われる表現であるため、《微博》(ウェイボー:[www.weibo.com](http://www.weibo.com))の検索エンジンも用例収集に活用した。

以下は本論文における記号と略語に関する説明である。

=====	“V 着”
~~~~~	連用修飾語
?	不自然な例文
*	非文
×	指摘した内容に一致しない
◎	指摘した内容に一致する(図における○と区別する)
Δ	指摘した内容に一致する条件がある

表 1 本論文における略語

ADJ	形容詞
ADV	副詞
CAUS	使役
Guo	完了の“过”
INFR	推測
L	場所名詞
Le	「動相形式」“了”
LE	句末の“了”
Ne	語気助詞の“呢”
NEG	否定
Neng	可能表現の“能”
NP	名詞フレーズ
PASS	受身
PL	複数
PSN	人名
V	動詞
Wan	完了の“完”
Zai	時間副詞の“在”
Zhe	「動相形式」“着”

## 表の目録

表 1	本論文における略語 .....	V
表 2	“着”の文法化の過程 .....	2
表 3	張文青(2013)による動詞分類 .....	46
表 4	郭锐(1993)による動詞分類 .....	50
表 5	孙英杰(2006)による動詞分類 .....	51
表 6	本論文における状態動詞の各種類の内部過程と“着”との共起関係 ....	64
表 7	本論文における活動動詞の各種類の内部過程と“着”との共起関係 ....	70
表 8	本論文における結果動詞の各種類の内部過程と“着”との共起関係 ....	74
表 9	本論文における完成動詞の各種類の内部過程と“着”との共起関係 ....	76
表 10	本論文による動詞の各種類の内部過程と“着”との共起関係 .....	76
表 11	宋玉柱(1995)における存在文の分類 .....	83
表 12	尹美蓮(2013)における存在文の分類 .....	84
表 13	朱(2000)、劉(2007)、尹(2013)における“着”/“了”と共起する動詞	88
表 14	“V 着”を伴うフレーズを独立文として完結させる“完句成分” ....	144

## 第 1 章 序論

### 1.1 研究対象

現代中国語においては、“着”という漢字には“着・zhē”、“着・zhe”、“着・zháo”、“着・zhuó”という 4 つの発音がある。本論文はその中の“着・zhe”を対象として研究する。以下、“着・zhe”を“着”と略記する。“着”は、もともと具体的な語彙的意味を持つ動詞であったが、現在では、具体的な語彙的意味が失われ、機能語になっている。次節では、“着”の文法化の過程を見ていく。

### 1.2 “着”の文法化の過程

本節では、先行研究に従って、“着”の文法化の過程についてまとめる。

龔千炎(1995:53)は“着”の文法化の過程を以下のようにまとめている。“着”は先秦時代から動詞として使われ、“著衣(着る)”、“附着(附着する)”の意味を表した。“着”の「動相形式」の機能は動詞から変化してきた。南北朝時代から唐時代まで、“着”が動詞(動詞＋目的語)に後続し、結果を表す補語の役割を果たした。“在(いる)”、“到(着く)”の意味に相当した。唐時代から、“着”は徐々に虚詞化してきて、動詞に後続し、抽象的な文法的意味、すなわち状態の持続を表す「動相形式」になってきた。“着”は北宋時代から動作の持続を表し始め、宋元時代に動作の持続と状態の持続を表す「動相形式」としてしばしば使われてきた、と龔千炎(1995:53)は説明する。

王力(1944)によれば、“着”はもともと「附着」の意味を表す動詞であり、“著”と書かれ、その後“着”に変わった。後漢時代から“着”が虚詞になり、後の動詞と組み合わせ、使役構造になった。また、その構造の後に場所を表す名詞が出てきた。しかし、虚詞化したのは南北朝時代であった。

梅祖麟(1988:198)は「隋唐時代から“V 着”が非常に発展した。①“着”の前にある動詞は空間的な運動を表すだけではない。②動作を表す“V 着”の後には場所を表す語だけではなく、動作行為の目的語も後続できる。以上の変化から見れば、“着”の「附着」の意味が次第になくなり、徐々に「動相形式」になってきたのである」と説明した。

龔千炎(1995:53)、王力(1944)、梅祖麟(1988:198)の指摘を踏まえ、“着”の文法化過程を以下の表にまとめる。

表 2 “着”の文法化の過程

時期	機能	意味
先秦—後漢	動詞	この時期の“着”は「附着」の意味を表した。
南北朝	動詞 ↓ 補語	この時期の“着”は虚詞化し始め、“V 着”の形で出現し、後に場所を表す名詞が後続されるようになった。“在(いる)”、“到(着く)”の意味を表した。
隋唐	補語 ↓ 「動相形式」	この時期の“着”は“在(いる)”、“到(着く)”の意味を表すとともに、状態の持続を表し始めた。“V 着”の“V”のカテゴリーは広がった。
宋	「動相形式」	この時期の“着”は主に状態の持続を表した。存在文によく出てきた。動作の持続を表し始めた。虚詞化が大きく発展した。
元	「動相形式」	この時期の“着”は完全に「動相形式」になり、動作の持続と状態の持続を表すようになった。

上記の表が示したように、龔千炎(1995:53)、王力(1944)、梅祖麟(1988:198)によれば、中国語の“着”は元時代から完全に内容語から機能語になった。本論文の研究対象は現代中国語において機能語としての「動相形式」“着”である。

### 1.3 研究目的

本論文は、中国語の「動相形式」“着”を研究対象とし、“着”の本質を解明することを目的とする。具体的には、まず、“着”の本質が「線状視点」であるという仮説を提案する。次に、“着”と動詞との共起関係、“了”や“在”との比較から、中国語の「動相形式」“着”の本質に関する仮説の妥当性を検証する。“着”の本質を明らかにするとともに、“着”と“了”や“在”との使い分けも明らかにすること。また、“V 着”を伴うフレーズは独立文として安定せず、文末助詞のような要素を要求するという特徴がある。“V 着”を伴うフレーズを独立文として安定させる要素との関係から“着”の「線状視点」の特徴を明らかにする。

### 1.4 中国語の「動相」と「動相形式」

“着”は「動相形式」として使われている。では、「動相形式」とは何であろう。「動相形式」を考察するために、まず「動相」の概念を明らかにすべきである。本節では、まず中国語の「動相」の定義に関する先行研究を概観した上で、本論文における中国語の「動相」と「動相形式」を位置づけする。

#### 1.4.1 中国語の「動相」に関する先行研究の概観

李臨定(1990)では、“体(動相)”は動詞によって表される重要な文法的カテゴリーであり、それは通常ことばの流れにおいて、動詞が表す動作行為が進められていく過程の中におけるさまざまな段階の状態を指すと述べている。

房玉清(1992)によれば、“动态(動相)”は時間と関係があるが、“时(時制)”のカテゴリーに従属しているものではなく、独立した文法的カテゴリーである。それは主に動作の進行過程と状態の変化を表し、動作と状態が時間の流れによって表すさまざまな状況を示している。

龔千炎(1995:3-5)は文のフェーズ(時相)、テンス(時制)とアスペクト(動相)を以下のように説明している。「文のフェーズ(時相)一文の命題の意味における内在

的な時間的特徴を表す。これは述語動詞の語彙的意味によって決定される。文のテンズ(時制)―事態が発生する時間を示す。その時間、発話時点ともう一つの参照時間の時間軸上の位置関係を指す。文のアスペクト(動相)―事態が異なる時間的な段階によって表す異なる状態を表す。事態発展の過程を事態内部から観察した結果である。時間システムの 3 つの部分はそれぞれ独自の特徴を持つと同時に、相互に関連し合っている」。

朱繼征(2000:20)は「動相」を、動詞の表す時間的動きの全過程のどの局面に焦点をあてて、その時間的動きを捉え、表現するのかを表し分ける形式と定義し、また、時間軸に沿って展開されている動作・作用の進み具合と状態を示し、その時間的動きを捉えて表現する文法的カテゴリーと定義している。さらに、朱繼征(2000:21-24)は中国語の「動相」を將然相、起動相、進行相、完了相、結果相、残存相、持続相、経験相に分けている。

王学群(2007:9)によれば、テンズ(時制)は話し手の「はなす」のモーメントを基準にして「はなす」のモーメントより以前か以後か同時かを表すのに対して、アスペクト(動相)は動作(変化・状態)の内的な時間構造の相違を表す。

以上のように、中国語の「動相」に関する研究は数多くあるが、統一的な説明はなされていない。まず中国語学において、「動相」に関する呼称の種類も多い。本論文では、便宜上、朱繼征(2000)に従い、“动态(動相)”、“体(動相)”、アスペクト(動相)、「動相」を全て「動相」という呼称に統一する<sup>1</sup>。

中国語の「動相形式」「着」についての呼称も統一されていないようである。呂叔湘(1980)、刘月华(1983)、陆俭明(1999)は“着”を“动态助词(動相助詞)”と呼ぶ。朱德熙(1982)は“着”が動詞の“后缀(接尾辞)”であると指摘している。木村英树(1983)は“着”を「補語性接尾辞」としている。戴耀晶(1991)は“着”が“体(動相)”の形式であると指摘している。戴耀晶(1991)の見解と同じく、尚新(2009)、下地早智子(2011)は“着”を“体(動相)”の形式と見なしている。朱繼征(2000)、

---

<sup>1</sup> 劉綺紋(2006:11)はアスペクトを「文法アスペクト」と「事態アスペクト」に分け、前者を「視点アスペクト」、後者を「語彙アスペクト」とも呼んでいる。王学群(2007:9)におけるアスペクトは劉綺紋(2006:11)が指摘した「文法アスペクト」のみを示す。概念を混乱しないようにするため、本論文はアスペクトという呼称を避け、“动态(動相)”、“体(動相)”、アスペクト(動相)を全て「動相」という呼称に統一する。

王学群(2007)は“着”を動相助詞、動態助詞と呼んでいる。本論文は朱繼征(2000)に従い、“动态(アスペクト)”、“体(アスペクト)”、「動相」、「アスペクト(動相)」を全て「動相」という呼称に統一した上で、“着”を「動相形式」と呼ぶことにする。次節では、「動相」と「動相形式」の概念を考察し、本論文における中国語の「動相」と「動相形式」を定義する。

#### 1.4.2 本論文における中国語の「動相」と「動相形式」の定義

本節では、本論文における中国語の「動相」と「動相形式」を定義する。例文(1-1)を見てみよう。

(1-1) a.他 昨天 走 的。(龚千炎 1995:32)

(彼 昨日 行く のだ)

(彼は昨日帰った。)

b.我 现在 休息。(龚千炎 1995:32)

(私 現在 休憩する)

(今休憩だ。)

c.他 明天 才 走。(龚千炎 1995:32)

(彼 明日 こそ 行く)

(彼は明日行く。)

d.昨天 我 到 他家 时, 他 离开 家 好 几天 了。(龚千炎 1995:32)

(昨日 私 着く 彼の家 時 彼 離れる 家 ADV 何日間 Le)

(昨日彼の家に着いたとき、彼は数日前家を留守にしたことに気付いた。)

e.明天 你 来 我家 时,我 应该 还 没 出发。

(明日 あなた 来る 私の家 時 私 INFR まだ NEG 出発する)

(明日あなたが来た時、私はまだ出発していないかもしれない。)

中国語の「動相」とよく紛らわしい概念は時制である。中国語には時制がないという主張は一般的である。確かに、形態上の標準から見れば、中国語は時制を持たない言語である。一方、龚千炎(1995:34)によれば、欧米の言語と異なり、中国語における時制は形態によって表されるのではなく、一般的に時間詞によっ

て表される。例文(1-1)のように認知主体が発話時点を基点として、外部から事態全体を観察するため、“昨天”、“現在”、“明天”という時間表現が参照時間として現われる。発話時点を A、事態が発生する時間を C、参照時間を B と記す。例文(1-1a)～(1-1e)の時間関係は図 1-1 のように表される。

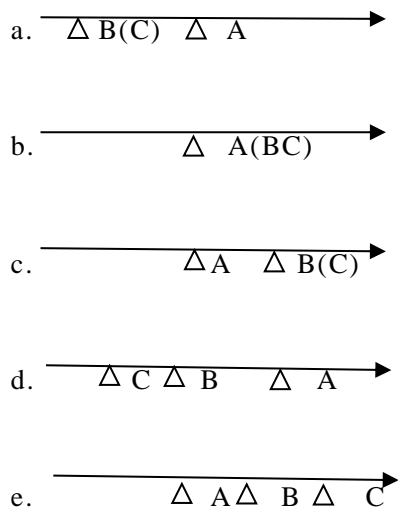


図 1-1 (1-1a)～(1-1e)が表す事態の時間関係

では、次の例文を見よう。

- (1-2) a. 我 马上 过去 吃饭。  
 (私 すぐ 行く ご飯を食べる)  
 (私はすぐ食事に行く。)
- b. 我 开始 吃饭 了。  
 (私 始める ご飯を食べる Le)  
 (私はご飯を食べ始めた。)
- c. 我 正 吃着 饭 呢。  
 (私 正に 食べる+Zhe ご飯 語気助詞 )  
 (私は今ご飯を食べている。)
- d. 我 吃 了 饭 了。  
 (私 食べる Le ご飯 LE)  
 (ご飯を食べた。)

e. 桌上                      摆着                      一                      碗                      饭。  
 (テーブルの上    並べる+Zhe    一    量詞    ご飯    )  
 (テーブルの上にはご飯が置いてある。)

(1-2a)～(1-2e)はそれぞれ「動相形式」を用い、事態の各段階を観察する文である。ではそれぞれの段階はどのように認識されるのか。それぞれの「動相形式」は「動相」とどのように関連しているのか。本節は 1.4.1 節の先行研究を参考にして、山梨正明(2000:57)のスキニングの認知プロセスの理論を用い、中国語の「動相」と「動相形式」を解釈する。

外部世界の対象や事態は、認知主体としてのわれわれから独立して解釈されるのではなく、認知主体の投じる視点との関連でさまざまな意味づけがなされる。われわれが外部世界に投じる視線、目の動き、スタンスのとり方はさまざまな形で反映されている。山梨正明(2000:57)は外部世界に視線を投げかけ目を移動していく行為(あるいは、視線を移動していく行為)を「スキニングの認知プロセス」と定義している。

山梨正明(2000:57)は図 1-2 を通して場所・空間認知にかかわるスキニングのプロセスを説明した。図 1-2 は認知主体による<視線の投影>のプロセスと、<視線の移動>のプロセスの統合された複合的な認知プロセスである。

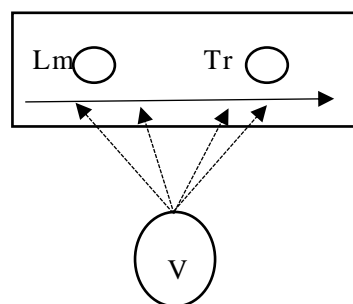


図 1-2 「～の右」のスキニングの認知プロセス (山梨正明 2000:59)

サークルで囲まれた⑤は認知主体(viewer)、破線の矢印は視線、実線の矢印はスキヤニングの方向を示す。

図 1-2 は認知主体が場所・空間の位置関係に関わる言語表現「～の右」を認知する動的な認知プロセスを表す。認知主体はまず参照対象としてのランドマーク(Lm)に相当する対象へ視線を投影し、次にその視線をトラジェクター(Tr)の方向に移動していく<sup>2</sup>。

外部世界の対象は図 1-2 が示す不動な対象だけではなく、逆に、多くの知覚対象そのものが移動している対象が多い。つまり、状況によって、視線だけでなく、知覚対象そのものの移動も考える必要がある。例えば、(1-2a)～(1-2e)のような複雑な動作・変化を伴う事態である場合もある。本論文の研究対象はこれらの複雑な動作・変化を伴う事態である。

これらの事態は動作・変化が発生する前、発生中、発生したばかりの時点に、発生した後に、それぞれ違う現象として現れる。税昌錫(2014:109)によれば、一つの完全無欠な事態の過程は活動開始、活動持続、活動終結、残存状態開始と残存状態持続より構成される。認知主体のわれわれは異なる認知視点で事態を知覚すれば、異なる局面を捉えることができる。また、異なる認知視点でこれらの現象を動的に捉え、言葉で他人に伝えようとする時、異なる「動相形式」を使って異なる局面(事態が発生する前、発生中、発生したばかり、発生した後の局面)を相手に伝える。

次にスキヤニングの認知プロセスで(1-2a)～(1-2e)のような複雑な知覚対象の認知プロセスを説明し、「動相」と「動相形式」を定義する。

---

<sup>2</sup> 山梨正明(2000:23)によれば、認知のドメインにおいてプロファイルされる存在のうち、相対的により際立って認知される対象はトラジェクター(Tr)、これを背景的に位置づける対象はランドマーク(Lm)として区別する。

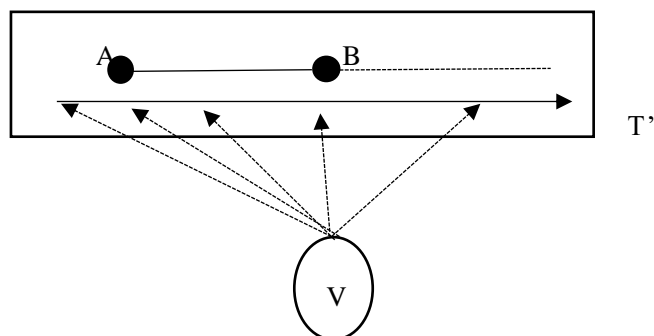


図 1-3 事態を認知するスキニングの認知プロセス

⑤は認知主体(viewer)、破線の矢印は視線を示す。四角の枠内の内容は動作・変化という事態を表す。Aは事態の始点、Bは事態の終点を表す。実線の矢印T'は仮定される時間軸を示す。

邓宇阳(2019:44)によると、朱繼征(1997)が述べている“体内時間軸(動相時間軸)”は仮定された時間軸である。裸形動詞が指示する事象はある仮定の時間軸に沿って展開してから、起動的段階、進行的段階、完了的段階、結果的段階、持続的段階などの異なる動的段階を表す。認知主体は事象を知覚する際に、この時間軸を想定して事態を捉える。仮定される時間軸と区別しているのは現実的な時間軸である。それは発話時点や明確な参照時間を表示するのである。本論文はこの仮定される時間軸をT'で表示する。図1-3が示すように、事態は仮定される時間軸T'に従い展開される。認知主体はスキニングの動的な認知プロセスで事態を知覚する。視線投影の場所が異なると、注目する事態の局面も異なる。

(1-2a)～(1-2e)を図1-3とつなげて考えれば、認知主体が事態の始点Aの前の局面を観察する(1-2a)、事態の始点Aに注目する(1-2b)、事態の始点AからBまでの局面を観察する(1-2c)、事態の終点Bに注目する(1-2d)、事態の終点Bの後の局面を観察する(1-2e)は、異なる「動相形式」によって事態の違う段階を表す。

劉綺紋(2006:11)はアスペクトを「文法アスペクト」と「事態アスペクト」に分け、前者を「視点アスペクト」とも呼んでいる。「文法アスペクト」は動詞の屈折語尾、助動詞などといった文法的形式によって表される。中国語においては助詞と副詞などによって表される。後者の「事態アスペクト」は一般的には動詞句に内在するアスペクト的意味を指す。「語彙アスペクト」とも呼ばれている。中国語にお

いては、形容詞句は動詞句の特徴をもつため、「事態アスペクト」は通常、動詞句や形容詞句に内在するアスペクト的意味を指す。本論文で述べる中国語の「動相」は劉綺紋(2006:11)による「文法アスペクト」あるいは「視点アスペクト」である。“着”、“了”のような「動相形式」は認知主体がスキニングの動的な認知プロセスを行う際、何らかの窓口のような認知視点を与える機能を果たすと考えられる。以上の分析を踏まえ、中国語の「動相」と「動相形式」を以下のように定義する。

[本論文での「動相」と「動相形式」の定義]

「動相」とは事態の内部的な時間構造の捉え方(事態がどの段階に注目するか)に関わる文法カテゴリーである。つまり、認知主体がスキニングの動的な認知プロセスで事態の異なる局面を観察することである。

「動相形式」とは認知主体がスキニングの動的な認知プロセスを行う窓口のような認知視点である。

## 1.5 論文の構成と概要

本論文は、全7章より構成される。

第1章では、まず、研究対象、研究目的、本論文の構成と概要および“着”の文法化の過程を述べる。次に、本論文における中国語の「動相」と「動相形式」の定義を明らかにした上で、“着”や“了”のような「動相形式」は認知主体が事態を認知する窓口のような認知視点であるという考え方を提案する。

第2章では、まず“着”の意味に関する先行研究を整理し、「進行」と「持続」の定義を明らかにした上で、“着”は進行を表さないことを説明する。次に、朱継征(2000)における進行相、持続相、残存相の形式の“着”の本質が「線状視点」であるという仮説を提案する。最後に、戴耀晶(1991)の成果を踏まえ、“V着”が表す「線状過程」の特徴を明らかにする。

第3章では、孫英杰(2006)の動詞分類を検討しながら動詞を具体的に再分類する。その上で、各種類の動詞と“着”との共起関係から、中国語の「動相形式」“着”の本質が「線状視点」であるという考え方の妥当性を検証する。

第4章では、まず存在構文“L+V 着/了+NP”における動詞の語彙的意味と存在構文“L+V 着/了+NP”の「存在義」の関係から、存在構文“L+V 着/了+NP”における動詞と“着”、“了”との共起関係を制約する要因を考察するほか、存在構文“L+V 着/了+NP”における“V 着”と“V 了”のそれぞれの役割を考察する。また、連用修飾語を代表とする構文環境の違いから存在構文“L+V 着/了+NP”における“着”と“了”の違いを明らかにする。その上で、中国語の「動相形式」“着”の本質が「線状視点」であるという考え方の妥当性を検証する。

第5章では、進行の形式の“在”と、「線状視点」である“着”の違いを明らかにした上で、中国語の「動相形式」“着”の本質が「線状視点」であるという考え方の妥当性を検証する。

第6章では、まず、先行研究を踏まえ、“V 着”を一部のフレーズを完結させるために必要な要素“完句成分”を再定義する。次に、“完句成分”が存在する理由、言い換えれば“V 着”を一部のフレーズを完結させる理由を検討する。最後に、会話文の平叙文と地の文という2つの面から“V 着”を伴うフレーズの“完句成分”を考察する。

第7章では、本論文で明らかになった結論を総合的にまとめる。

なお、本論文の第2章～第6章は下記に掲載する発表済みの各論文に大幅な加筆修正を加えたものである。

第2章：鄭瓊花(2017a)「“着”の基本的な文法的意味と意味特徴」、『現代社会文化研究科紀要』(新潟大学大学院現代社会文化研究科)第64号, 183-198頁。

鄭瓊花(2020b)「中国語のアスペクトマーカ―“着”の本質について」、『言語研究』(新潟大学大学院現代社会文化研究科)第5号, 11-26頁。

第3章：鄭瓊花(2020a)「“着”の「線状視点」に関する検証―動詞との共起関係からの分析―」、『言語の普遍性と個別性』(新潟大学大学院現代社会文化研究科)第11号, 33-62頁。

第 4 章: 鄭瓊花(2015)「存在文における“V 着”と“V 了”構文について」, 日本中国語学会関西支部 2015 年度第 1 回例会(口頭発表), 2015 年 6 月 27 日, 関西学院大学梅田キャンパス。

第 5 章: 鄭瓊花(2016)「進行相を表す時間副詞の“在”と助動詞の“着”の比較研究」, 『言語研究』(新潟大学大学院現代社会文化研究科)第 1 号, 71-85 頁。

鄭瓊花(2017c)「“NP+V-着+AP”構文と“NP+V-起来+AP”構文の比較研究」, 日本中国語学会第 67 回全国大会(口頭発表), 2017 年 11 月 12 日, 中央大学多摩キャンパス。

鄭瓊花(2018a)「“(NP)+V-着+AP”構文に関する研究」, 『言語研究』(新潟大学大学院現代社会文化研究科)第 3 号, 38-46 頁。

鄭瓊花(2018b)「“着”と共起する様態描写に関する研究－“起来”の場合と比較しながら」, 日本中国語学会第 68 回全国大会(ポスター発表), 2018 年 11 月 4 日, 神戸市外国語大学。

第 6 章: 鄭瓊花(2017b)「“着”構文を完結させる要素に関する研究」, 『言語研究』(新潟大学大学院現代社会文化研究科)第 2 号, 67-81 頁。

鄭瓊花(2019)「“V<sub>1</sub> 着, V<sub>2</sub>”に関する研究」, 『言語研究』(新潟大学大学院現代社会文化研究科)第 4 号, 33-41 頁。

## 第2章 “着”の本質に関する本論文の捉え方

朱繼征(2000)によれば、「動相形式」として、“着”は進行相、持続相、残存相を表す。本章では、進行相、持続相、残存相を表す“着”をそれぞれ考察した上で、中国語の「動相形式」“着”の本質を「線状視点」と捉える見方を提起する。

### 2.1 はじめに

1.4.2 節で示したように、中国語における「動相」は一般的に、劉綺紋(2006:11)による「文法アスペクト」あるいは「視点アスペクト」を指し、認知主体がスキミングの動的な認知プロセスで事態の異なる局面を観察することである。「動相形式」はそれらの認知プロセスを行う窓口のような認知視点であると考えられる。「動相形式」において、“着”は重要な「動相形式」として機能している。では、“着”という窓口はどのような窓口であろうか。次の例文を見てみよう。

(2-1) 山本 在 镜子前 不停地 穿着 刚 买回来 的 衣服。

(PSN 介詞 鏡の前 止まらずに 着る+zhe 先 買ってくる の 服  
(山本さんは鏡の前で買ってきたばかりの服を次々と着てみている。))

(2-2) 山本 穿着 刚 买回来 的 衣服。

(PSN 着る+zhe 先 買ってくる の 服)  
(山本さんは買ってきたばかりの服を着ている。))

(2-3) 山本 的 身上 穿着 刚 买回来 的 衣服。

(PSN の 体に 着る+zhe 先 買ってくる の 服)  
(山本さんの体には買ってきたばかりの服が纏われている。))

王学群(2007)は“V 着”によるいくつかのアスペクト(動相)の意味は動詞の語彙的意味に深く関わりと論述している。しかしながら、同じ動詞の“穿(着る)”であっても、例文(2-1)の場合、“穿着”は「着る」という動作の反復と進行中を

示し、例文(2-2)の場合、“穿着”は動作主の山本さんが服を着た後の状態を示し、例文(2-3)の場合、“穿着”の前に“身上(体に)”という場所があるので、「着る」という動作が済んだ後、“身上(体に)”という場所に服が残存されていることを示している。朱継征(2000)によれば、例文(2-1)～(2-3)はそれぞれ進行相、持続相、残存相を表す。

ではなぜ同じ“穿着”が、異なる意味を表すのであろうか。また、この違いはどのようにスキニングの動的な認知プロセスで捉えられるのであろうか。本章はスキニングの動的な認知プロセスの立場から“着”の本質を考察する。

## 2.2 先行研究

これまでの研究では、“着”の意味をめぐり、さまざまな観点から論じられてきた。それぞれの研究者により“着”が進行と持続を表せるか否かという議論をめぐり意見が異なる。こうした議論は大まかに下記の 3 つの主張にまとめられる。①“着”が進行を表すという主張。②“着”が進行ではなく、持続を表す主張。③“着”が進行と持続の両方を表す主張。次にこの 3 つの主張をそれぞれ概観する。

### 2.2.1 進行を表すという主張

王力(1943:151-159)は“着”が進行相を表すと主張している。

“着”表示“进行貌”，并认为“进行貌”分两种，一种是一个独立的动作正在进行，例：我正在写着字；另一种表示一种动作在进行时恰与另一动作相遇，例：他进来的时候，我在写着字。

(“着”は進行相を表す。進行相は 2 種類に分かれる。一つはある独立した動作が進行していることを表す。例えば“我正在写着字。(私は字を書いている)”である。もう一つはまさにある動作が進行している際に別の動作も進行していることを表す。例えば“他进来的时候，我在写着字。(彼が来たとき、私は字を書いているところだった)”である)

木村英樹(1986)は“着”を二分し、動作後の状態持続を表すものを“着 d”、進

行中の動作を表すものを“着 p”とし、この 2 種類の“着”は異なる文法的意味を持つと説明している。そして、それぞれの否定文の違いからこの 2 種類の“着”の違いを説明している。さらに、状態持続を表す“着 d”は「動相形式」ではなく、結果補語に近いものであると主張している。

朱繼征(2000)は、進行相とは動作や作用が正に実行・展開しているプロセスを指すと述べている。言い換えれば、動作が進行している段階を表す。そして“(正)在～”、“～着”、“～(着)呢”などをこの進行相を表す文法形式としている。

### 2.2.2 進行ではなく持続を表すという主張

陈刚(1980:23)は次のように述べている。

汉语能表示进行意义，但是不用“着”来表示，这说明“着”不是表示进行意义的。有些句子里的“着”都不是非用不可的。把它们去掉，进行意义并未消失。因为句子里的“在”和“呢”已经把进行意义表示出来了。

(中国語において、進行の意味は“着”によって表されるのではない。これは“着”が進行義を表さないことを意味している。一部の文において、その中の“着”を削除しても進行義が消えない。なぜなら“在”と“呢”が既に進行の意味を表しているからである)

费春元(1992)は中国語には進行相は存在しておらず、“着”が進行を表しているように見えるが、実はその進行の意味は常にコンテキストに含まれる「現在」という時間要素によって表されるためであると指摘している。

钱乃荣(2000)は“着”は動詞に後続し、事態の持続状態を表すが、進行は表さないと結論付けている。また、“着”は進行相を表す“正在”、“正”、“在”、“呢”と共起できるが、進行相の意味は“着”ではなく、“正在”、“正”、“在”、“呢”によって表されると指摘している。

### 2.2.3 進行と持続の両方を表すという主張

刘月华(1983)は“着”の文法的意味を次の 5 点にまとめている。1)動作がずっと持続する。2)動作が行われた後、物体がある場所に置かれている、もしくは状

態がある場所に残存している。3)持続的動作を表すが、実際にはその動作も一種の状態としてみなすことができる。4)一部の非動作動詞の後に“着”を付けることで一種の状態を表す。5)一部の形容詞の後に“着”を付けて状態の持続を表す。

郭锐(1993)は“着”の文法的意味を3点に分けている。

着<sub>1</sub>表示动态动作的持续,着<sub>2</sub>表示动词词义本身指明的静态状态的固定,着<sub>3</sub>表示动作结束后留下的状态的固定。动态的持续包括两种情况:一是指从开始到结束的过程极短的行为动作反复进行,如“他大口大口地吃着”、“他不停地唱着”;一是指处于行为动作从开始到结束的过程中,如“你在这儿待着”。状态的持续也包括两种情况:一是指在某种行为动作下,事物始终呈现某种状态,一是指人或者动物一直保持由某种行为动作所造成的状态。

(“着<sub>1</sub>”は動態動作の持続を表す。“着<sub>2</sub>”は静態動詞が示す状態を示す。“着<sub>3</sub>”は動作が終わった後に残存する状態を表す。動態の持続は2つに分かれる。一つは、“他大口大口地吃着。”(彼は大きな口を開けて食べている)、“他不停地唱着。”(彼はずっと歌っている)のように、動作の開始から終了までのプロセスにおいて、きわめて短い行為動作が反復して行われることである。もう一つは、“你在这儿待着。”(ここで待ってください)のように、ある始点から終点までのプロセスにおいて、具体的な動きや姿を見せない動作行為が連続的に行われることである。状態の持続も2種類に分かれる。一つはある動作行為の作用を受けた上で、事物がある状態を呈しているということである。もう一つは人や動物が、ある動作行為の発生によってもたらされる状態を呈しているということである)

陆俭明(1999)は、“着”は動作と状態の持続という文法的意味を表し、動作の持続は動的な持続であり、状態の持続は静的な持続であると主張している。

以上の先行研究から明らかなように、“着”の意味に関する主張は食い違ふところが多い。これらの出張を要約すれば、“着”は進行を表すという主張、持続を表すという主張、進行と持続の両方を表すという主張に分かれており、統一的

な説明はなされてきてはいない。特に、下記のような例文における“着”が進行を表すかどうかに関して意見は統一していない。

(2-4) 大魚 自顾自 喝着 啤酒， 并 不 看 他 一 眼。(CCL)

(PSN ADV 飲む+Zhe ビール ADV NEG 見る 彼 一 目 )

(大魚さんは一人でビールを飲んでおり、彼には目もくれなかった。)

(2-5) 甲： 小明， 外边 下 没 下 雨 呀?(朱繼征 2000:55)

(PSN 外 降る NEG 降る 雨 語気助詞)

(明ちゃん、外は雨が降ってる?)

乙： 下着 呢。

(降る+Zhe Ne)

(降ってるよ。)

例文(2-4)、(2-5)は動作・作用が現在行われていることを表す。2.2.1 節と 2.2.3 節が提示した主張に従えば、これらの例文における“着”は進行を表すと考えられる。2.2.2 が提示した主張に従えば、これらの例文における“着”が事態の持続状態を表す。主張によって、“着”に関する解釈が違ってくる。では、“着”の意味に関する理解にはなぜそれほど大きな違いが生じているのか。また、研究者が述べている進行と持続の定義は何であろう。いわゆる進行と持続の意味は“着”によって表されるのか、それとも“V 着”によって表されるのか。次節ではまず進行と持続を定義した上で、山梨正明(2000)におけるスキニングの動的な認知プロセスの理論で“V 着”の例文を分析し、“着”と“V 着”の本質を解明してみる。

## 2.3 本論文における進行と持続の定義

これまでの研究では、「進行」と「持続」の定義について定説がない。本節は本論文における「進行」と「持続」という二つの概念を再定義する。

中国語の「進行」と「持続」に関して、陈刚(1980)は、進行は正に進行中の状況を指すものであり、一瞬で終わるものでもなければ、一貫して継続するもので

もないと説明している。張黎(1996)は、進行は外力の作用によって動作がある時点において変化していることを指し、持続は外力の作用によって動作がある時点から他の時点へ移動することを指すと主張している。その上で、“進行貌(進行相)”は動作が始まってから終わるまでの全体のプロセスを指すと説明している。陳剛(1980)、張黎(1996)の説明によると、進行は主に、現実的な時間軸上の参照時間に、動作や変化の関係で、ある事態が存在しているかどうかということを際立たせる。持続は仮定される時間軸上において、ある時点からほかの時点までという時間の幅を持つかどうかということを際立たせる。この点に関して、木村英樹(1982)によると、「正にそのとき現在の…行為を知りたい」時、“着”ではなく、“在”<sup>3</sup>を使う。つまり、進行は現実的な時間軸上の参照時間と事態の関連性を際立たせる。その一方、持続は仮定される時間軸上の幅を際立たせる。筆者は陳剛(1980)、張黎(1996)、木村英樹(1982)の成果を踏まえ、本論文における進行と持続を以下のように定義する。

#### (2-6) [本論文での進行と持続の定義]

進行とは時間軸上<sup>4</sup>の参照時間において、事態が正に発生していることである。

持続とは時間軸上<sup>5</sup>における幅を持つ状態が保持されることである。

進行と持続は 2 つのレベルでの概念である。進行は現実的な時間軸上の参照時間において、ある事態が正に起きていることを表し、正にそのとき現在の行為が存在していることに焦点を当てる。それに対して、持続はある状態が保持されることであり、事態が仮定される時間軸上における幅を持っていることに焦点を当てる。では、“着”は進行と持続とどのように関係しているのだろうか。

---

<sup>3</sup> “在”は進行を表す形式である(劉月華(1983)、金奉民(1991)、朱繼征(2000))。

<sup>4</sup> ここの時間軸は現実的な時間軸を示す。

<sup>5</sup> ここの時間軸は仮定される時間軸を示す。

## 2.4 スキャニングの認知プロセスから見る“着”と“V 着”

前節では、進行と持続の定義を明らかにした。朱継征(2000)によれば、“着”は、進行相における“着”、持続相における“着”および残存相における“着”に分類される<sup>6</sup>。本節では、この3種類の“着”と進行、持続との関係について考察することで、“着”の認知視点としての特徴を明らかにしていく。例文(2-1')を見よう。

(2-1') 山本 在 鏡子前 不停地 穿着 刚 买回来 的 衣服。  
(PSN 介詞 鏡の前 とどまらず 着る+zhe 先 買ってくる の 服  
(山本さんは鏡の前で買ってきたばかりの服を次々と着てみている。))

荒川清秀(2015)は例(2-1')の動詞“穿(着る)”の語彙的な意味の2つの局面(動詞の変化にいたる過程の局面と着テイル状態を維持する動作の局面)の違いに基づいて、“穿着”を「着つつある」の“穿<sub>1</sub>”と「着テイル」の“穿<sub>2</sub>”に分けている。しかしながら、“着”、“了”のような「動相形式」がない場合、“他穿衣服”に関しては、「彼は服を着る」という意味にしか解釈できない。つまり、「着テイル状態を維持する動作の局面」が“穿(着る)”だけでは捉えられない。本論文は“穿(着る)”を“穿<sub>1</sub>”、“穿<sub>2</sub>”に分けず、一つの“穿(着る)”と考え、その語彙的な意味を「衣服や靴などを体に着用する」という動詞の変化にいたる過程のみと仮定する。「着テイル状態を維持する動作の局面」は“穿(着る)”が表す動作が終わる結果と解釈される。この結果は“穿”だけで捉えられなく、「動相形式」“着”と共起して捉えられる結果であると考えられる。スキャニングの認知プロセスから見ると、“着”の認知視点で捉える部分は“穿(着る)”の動作が終わった後の結果の状態であり、荒川清秀(2015)が指摘した「着テイル状態を維持する動作の局面」でもある。

---

<sup>6</sup> 朱継征(2000:22)は進行相とは動作や作用が正に実行・展開しているプロセスを指すと述べている。朱継征(2000: 22)は持続相とは動作・作用が終了した後、動作主の姿勢あるいは動作の被動者の静止状態が持続するプロセスを指すと述べている。朱継征(2000: 22)は持続相とは動作・作用が終了した後、動作主の姿勢あるいは動作の被動者の静止状態が持続するプロセスを指すと述べている。

例文(2-1')では、動作を行う場所を表す“在鏡子前(鏡の前に)”と“不停的(とまらずに)”のような修飾語があるので、この例文の“穿(着る)”が表すのは動的な動作で、また仮定される時間軸上に必ず時間の幅がある。荒川清秀(2015)に従えば、例文(2-1')の“穿(着る)”は「動作の変化にいたる過程の局面」を表す“穿<sub>1</sub>”であると考えられる。

また、例文(2-1')は「山本さんは鏡の前で服を着つつある」のような場面で発話される。



図 2-1 例文(2-1')の発話場面

例文(2-1')の発話場面は鏡の前で動作主の山本さんが買ってきたばかりの服を着つつある場面である。この発話場面は図 2-1 で示す。

1.4 節で提示した山梨正明(2000:59)の図を参考にし、例文(2-1')をスキニングの認知プロセスで分析すれば、下記の図 2-2 のように表示できる。

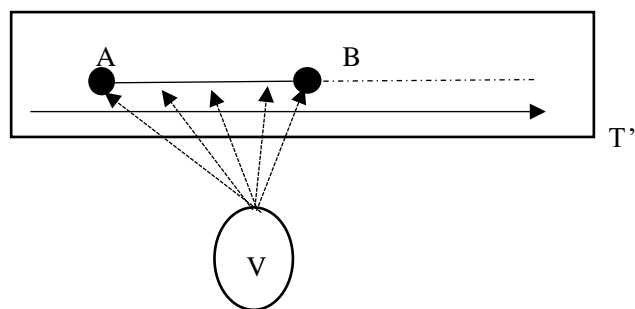


図 2-2 (2-1')の図式

⑤は認知主体(viewer)、破線の矢印は視線、実線の矢印 T'は仮定される時間軸を示す。四角の枠の中は動詞に関わる全体の事態(動作・作用が始まる前の状態から終わった後の状態まで)を表す。Aは動作の始点、Bは動作の終点を表す。

図 2-2 が示すように、認知主体の目に映ったのは“穿(着る)”の動作の始点 A から終点 B までの区間の局面である。この動作がいつ始まったか、いつ終わるかに関しては関心を持っておらず、“穿(着る)”の動作が持続しているのを焦点として捉えられる。

この場合、認知主体が“着”という認知視点から“穿(着る)”の動作を捉えるという動的な認知プロセスは“穿(着る)”自体が表す動的な局面と重なっているということがわかる。

また、例文(2-1')が表す場面では、認知主体の知覚するプロセスは、動作始点に近いところのプロセス(図 2-3 の C)であるか、それとも動作終点に近いところのプロセス(図 2-4 の D)であるかということに注目しておらず、ただ単に仮定される時間軸上における始点 A から終点 B までの幅のプロセスに注目している。

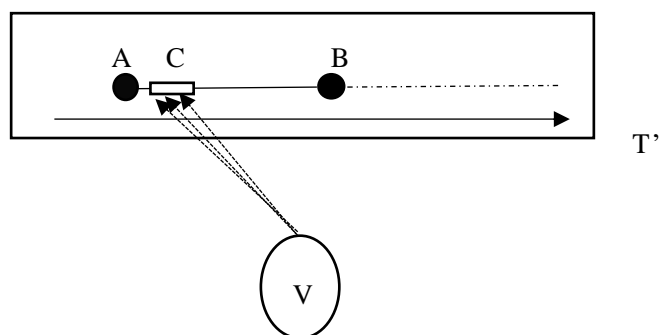


図 2-3 動作始点に近いところのプロセス

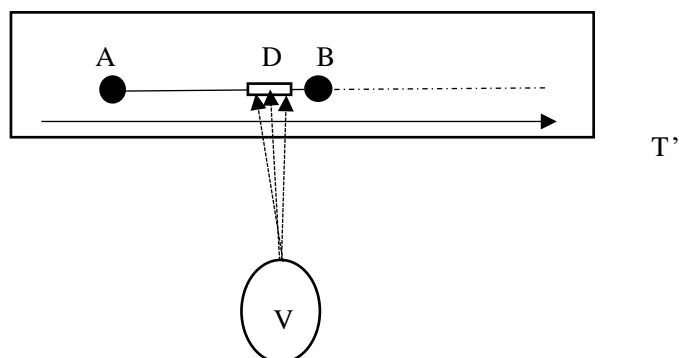


図 2-4 動作終点に近いところのプロセス

⑤、破線の矢印、実線の矢印 T'、四角の枠、点 A、点 B などの内容は図 2-2 と同じである。C は動作の始点に近いプロセス、D は動作の終点に近いプロセスを示す。

以上の分析からわかるように、認知主体は“着”という認知視点からスキミングの動的認知プロセスで動詞が表す動作が行われている最中に注目する。要するに、図 2-3 の C と図 2-4 の D が表すプロセスは動詞の“穿(着る)”と“着”を組み合わせる表すものであると考えられる。つまり、その場合の“V 着”は認知主体が“着”という認知視点から“V”が表す動的なプロセスを観察し、知覚した結果である。

“穿衣服(服を着る)”より、例文(2-7)、(2-8)の“喝啤酒(ビールを飲む)”、“下雨(雨が降る)”のような述語フレーズが表す動作を仮定される時間軸上に持続している時間が長いと捉えやすいため、動的なプロセスを捉えやすいと考えられる。

(2-7) 大魚 自顾自 喝着 啤酒， 并不 看他一眼。(=(2-4))

(PSN ADV 飲む+Zhe ビール ADV NEG 見る 彼 一目)

(大魚さんは一人でビールを飲んでおり、彼には目もくれなかった。)

(2-8) 甲：小明，外边 下 没 下 雨 呀?(=(2-5))

(PSN 外 降る NEG 降る 雨 語気助詞)

(明ちゃん、外は雨が降ってる?)

乙：下着 呢。

(降る+Zhe 語気助詞)

(降ってるよ。)

例文(2-7)と(2-8)はそれぞれ「大魚さんはビールを飲んでいる」場面と、「雨が降っている」場面で発話される。読者や聞き手の頭の中において、大魚さんはビールを飲んでいる(2-7)プロセスと、雨が降っている(2-8)のプロセスが録画のようにスキミングされている。つまり、例文(2-7)、(2-8)の認知主体が“着”という認知視点から捉えたのは録画のような動的なプロセスである。これらの動的

なプロセスは動詞の“喝(飲む)”、“下(降る)”と“着”と共起することによって表される。この意味では、認知主体が“着”という認知視点から動詞が表す動的プロセスを知覚した部分“V 着”は仮定される時間軸上の時間の幅がある。前節で説明した進行と持続の定義を振り返ると、例文(2-7)と(2-8)の“V 着”は持続を表すことがわかる。

では、“着”は進行とどのような関連しているのでしょうか。例文(2-9)を見てみよう。

(2-9) 甲：电影 都 演 完 了 吧?(朱繼征 2000: 56)

(映画 もう 上映する Wan LE 語気助詞)

(映画はもう終わった?)

乙：还 演着 呢，现在 去，还 能 看 上 个 尾巴。

(まだ 上映する+Zhe Ne 今 行く まだ Neng 見る 補語 量詞 最後)

(まだやっているよ。今行けば最後のところを見られるよ。)

例文(2-9)は会話文である。例文(2-9)では、甲は今映画が終わったかどうかを質問し、乙は映画がまだ終わっておらず、上映中であると答えている。

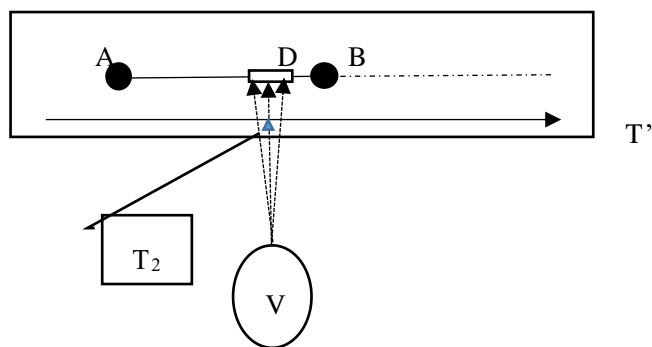


図 2-5 (2-9)の図式

㉖、破線の矢印は、実線の矢印 T'、D、四角の枠、点 A、点 B が表す内容は図 2-4 と同じである。T<sub>2</sub> は発話時点を示す。

例文(2-9)では、まずその会話から具体的な時間(発話時点)および映画が今現在

上映中であることがわかる。映画が上映されるのは一瞬ではなく、仮定される時間軸上における幅を持つ事態として持続している。コンテキストからわかるように、会話の2人は、映画がもう始まったという情報を知っているのである。また、例文(2-9)でのコンテキストから、話者は発話時点  $T_2$  に捉えた事態が今正に行われているかどうか、もう終わっているかどうかについて関心を持っていると判断できる。前節で説明したように、本論文における進行はある時点において、ある事態が正に起きていることを表す。例文(2-9)が表す進行を進行の定義と図 2-5 と関連づいて説明すれば、参照時間である発話時点  $T_2$  に捉えた事態の局面が点 A と点 B の間に存在することである。図 2-5 が示したように、発話時点  $T_2$  に捉えた事態の局面は認知主体が“着”という認知視点から“演(上映する)”の動的なプロセスを知覚するプロセス(D)にもある。そのため、この場合の“着”は動作の進行を表すという誤解が出てくる。次に、会話文だけではなく、地の文<sup>7</sup>からの例文も考察する。

- (2-10) 上午 表姐 来 我家 的时候 我正 吃着 早饭 呢。(CCL)  
(午前 いとこ 来る うち の時 私 正に 食べる+Zhe 朝ごはん Ne)  
(午前いところが家に来た時、私は朝ごはんを食べているところだった。)

会話文における発話時点の時点解釈の基点とする例文(2-9)とは異なり、例文(2-10)には明確的な時間の基点である「午前中いところが家に来た時」という表現が与えられている。

---

<sup>7</sup> 王学群(2007:45)は「文学作品(=ここでは主に 3 人称で書かれた小説のことを指す)は基本的に語り手(書き手)の観察、判断、説明などを表す部分(=地の文)と登場人物の会話を表す部分(=会話文)からなる」と指摘している。

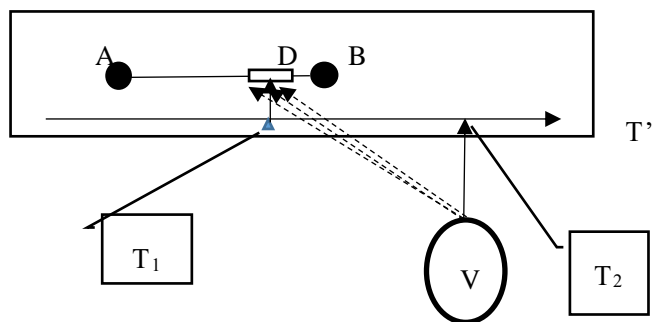


図 2-6 例文(2-10)の図式

⑤、破線の矢印は、実線の矢印  $T'$ 、四角の枠、D、点 A、点 B などの内容は図 2-5 と同じである。  $T_1$ 、 $T_2$  をそれぞれ参照時間、発話時点を示す。

例文(2-10)は例文(2-9)と同じように進行を表している。例(2-10)には、具体的な参照時間と事態の発生場所のほか、“正(正に)”という「ある時点で動作が今現在行われている」ことを表す時間副詞もある。この場合、認知主体は発話時点  $T_2$  において、“着”という認知視点から事態をスキヤニング認知プロセスの操作をする。図 2-6 が示すように、発話時点  $T_2$  に捉えた事態の局面は認知主体が“着”という認知視点から“吃(食べる)”の動的なプロセスを知覚するプロセス(D)にある。

ところが、例文(2-11)を見てみると、例文(2-10)の“着”を省略しても進行の意味は問題なく表される。つまり、“着”より、むしろほかの要素“正在”、“呢”などの要素こそが進行の意味を表すと考えられる。

(2-11) 上午 表姐 来 我家 的时候我 正 (在) 吃 早饭。  
 (午前 いとこ 来る うち の時 私 正に (Zai) 食べる 朝ごはん)  
 (午前いところが家に来た時、私はちょうど朝ごはんを食べているところだった。)

次に朱継征(2000)が指摘している持続相と残存相を表す“着”を考えよう。ここで例文(2-2)と(2-3)を再掲する。

(2-2') 山本 穿着 刚 买回来 的 衣服。

(PSN 着る+zhe 先 買ってくる の 服)

(山本さんは買ってきたばかりの服を着ている。)

(2-3') 山本 的 身上 穿着 刚 买回来 的 衣服。

(PSN の 体に 着る+zhe 先 買ってくる の 服)

(山本さんの体には買ってきたばかりの服が纏われている。)

(2-1')と異なり、(2-2')と(2-3')は“穿(着る)”の動的なプロセスが終わった結果、服が体に纏われている状態が続いていることを表す。宋玉柱(1988)は、例文(2-3')のような例文を静態存在文と定義している。(2-2')には典型的な場所がないので、持続相の特徴を示す一方、(2-3')には“身上(体に)”という場所があるので、残存相の特徴を示す。そのため、朱継征(2000)は例文(2-2')と(2-3')の“着”をそれぞれ持続相と残存相を表すと主張している。しかし、荒川清秀(2015)の観点からわかるように、(2-2')の持続相と(2-3')の残存相は本質的に共通している。なぜかといえば、(2-2')の“山本穿着刚买回来的衣服”という文は“山本的身上穿着刚买回来的衣服”という文における“身上”という場所が省略された結果であり、“山本的身上穿着刚买回来的衣服”という文は“山本穿着刚买回来的衣服”という文の場所を具体化した結果であるからである。このように、朱継征(2000)が述べる持続相と残存相は本質的同一性を示す。

荒川清秀(2015)は“穿”などはその動作の及ぶ先がシテ自身(再帰的)ということもあり、全体として自動詞になる結果、“他拿着一枝钢笔。(彼はペンを持っている)→他手里拿着一枝钢笔。(彼の手にはペンを持っている)”のように、シテ自身を場所に広げられ、存現文に近くなると説明している。

辻幸夫(2013:318)はフィルモア(Fillmore1982)が提唱したフレーム意味論の立場から、語をはじめとする言語表現はフレームを喚起し、その意味はフレームを背景にして初めて理解されると指摘している。われわれ認知主体は“穿(着る)”を理解するとき、「服、体」というフレームを背景にして理解していると考えられる。そのため、本論文は荒川清秀(2015)に従い、例文(2-3')は(2-2')の場所を具体化し、シテ自身を場所に広げた文として理解する。

例文(2-2')と(2-3')をスキニングの認知プロセスで分析すれば、下記の図 10 のように表示できる。

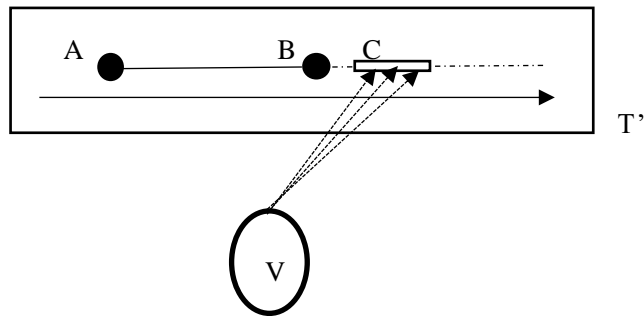


図 2-7 (2-2')と(2-3')の図式

⑤、破線の矢印、実線の矢印 T'、四角の枠、T'、点 A、点 B などの内容は図 2-6 と同じである。C は認知主体が“着”という窓口(認知視点)から捉えた事態のプロセスとする。

図 2-7 が示すように、認知主体の目に映ったのは、“穿(着る)”の動的なプロセスが終わった後の部分(点 B 以降の部分)である。認知主体は“穿(着る)”という動的なプロセスがいつ終わったか、“穿<sub>2</sub>”が表す状態がいつ変わるかについても関心を持っておらず、ただ今服がきちんと体に纏われていることを知覚する。つまり、認知主体は“着”という認知視点から“穿(着る)”が表す動的なプロセスが終わってからの結果が存続しているというプロセスを知覚し、観察する。

荒川清秀(2015)は(2-2')と(2-3')の“穿”は「着テイル状態を維持する動作の局面」を表す“穿<sub>2</sub>”であると主張する。(2-1')を説明したように、本論文は「動作の変化にいたる過程の局面」を表す“穿<sub>1</sub>”と「着テイル状態を維持する動作の局面」を表す“穿<sub>2</sub>”を同一な“穿”と認め、それらの語彙的な意味を「衣服や靴などを体に着用するという動詞の変化にいたる過程」のみと考えている。「着テイル状態を維持する動作の局面」の意味は“穿着”の意味であると考えられる。つまり、認知主体が“着”という認知視点から“穿(着る)”が表す動的なプロセスが終わってからの結果が存続している状態を捉えた意味である。また、この状態を維持する動作の局面は一瞬のことではなく、仮定される時間軸上における時

間の幅を持つのが常識的である。認知主体がこの相対的に静止な局面を知覚することも時間の幅を持つと考えられる。また、認知主体が“着”という認知視点からこの相対的に静止な局面を知覚するというプロセスを表す“V 着”も仮定される時間軸における幅を持つということがわかる。

(2-1')～(2-3')において、認知主体が“着”という認知視点を通して捉えた「動作の変化にいたる過程」と、「動作が終わってからの結果の状態」はいずれも仮定される時間軸上における幅を持つプロセスである。

朱継征(2000)が述べている進行相の“着”、持続相の“着”、残存相の“着”のいずれも本論文で述べている窓口のような認知視点の役割を果たすと考ええる。認知主体は動作・作用の始点から終点までの段階のプロセスを捉えるのか、あるいは終点の後の段階のプロセスを捉えるのかを文のほかの要素やコンテキスト<sup>8</sup>から判断して知覚する。王力(1980)は“了”は時点を表し、“着”は時線を表すと指摘している。朱継征(2000)も“動相”を「点」または「線」の形で捉え直すことが可能であり、進行相、持続相、残存相を「線」の形で表すことができると指摘している。

本論文は上記の(2-1')～(2-3')に関する分析を踏まえ、王力(1980)、朱継征(2000)を参考にして、“着”と“V 着”の本質について以下の仮説を提起する。

#### (2-12) [本論文における「動相形式」“着”と“V 着”の本質]

本論文では、中国語の「動相形式」“着”の本質が「線状視点」である。

“V 着”はこの「線状視点」から捉えた「線状過程」を表す。

「線状視点」とは仮定される時間軸上における幅を持ち、「線」の形で表す認知視点である。「線状視点」に関する操作というのは、認知主体が動作・変化のような事態を捉える際に、「線」のような形の認知視点から事態を捉えるということである。あるいは、認知主体は各種類の事態における被写体を追跡する録画撮影のような方式で事態を捉えるということである。また、認知主体が“着”の「線

---

<sup>8</sup> この文のほかの要素やコンテキストは第 6 章で説明する。

状視点」から捉えた部分は仮定される時間軸上において幅を持つということを論じた上で、その幅をもつ部分は「線状過程」として、“V 着”の本質とする。

ところで、もし(2-1')～(2-3')の中の別の文脈的な要素を無視した上で、単に“穿着刚买回来的衣服”だけを知覚すれば、一般的に、認知主体が捉えるのは「誰かが服を着つつある」ではなく、「服がもう誰かの体に纏われている」という意味である。常識的に、着物である場合や服の枚数が多い場合でなければ、服を着るのにそれほど時間はかからない。“穿着刚买回来的衣服”を「服がもう誰かの体に纏われている」という意味と解釈しやすい。

## 2.5 “着”の「線状視点」から捉えた“V 着”の「線状過程」の意味特徴

前節では、本論文の立場として中国語の「動相形式」“着”の本質は「線状視点」であり、“V 着”は「線状過程」を表すと考えることを確認した。しかし、次に挙げる例文(2-13a)のように、「線状過程」を表す文において“V 着”を使うときわめて不自然になる場合もある。その理由について、“V 着”は基本的に「線状過程」を表すものの、その「線状過程」が何らかの意味特徴によって意味的齟齬が生じているからであると考えられる。このことから、本節では「線状過程」が持つ意味特徴について考察する。

(2-13) a.\*我在那儿一声不吭地站着很久。

b.我 在 那儿 一声不吭地 站 了 很 久。

(私 介詞 あそこ ADV 立つ Le 程度副詞 長い時間 )

(私はあそこで何も言わずに長い時間立っていた。)

戴耀晶(1991)は“着”が不完結性、持続性、動態/静態の二重性という3つの特性を持つことを指摘している。本論文は“着”を認知主体が事態を知覚する「線状視点」と考え、この3つの特徴を「線状視点」である“着”の特徴とせず、「線状過程」である“V 着”の特徴と考える。

本節では戴耀晶(1991)の指摘を踏まえ、“V 着”が表す「線状過程」の特性を明らかにする。

### 2.5.1 不完結性

戴耀晶(1991)によれば、不完結性は完結性に対する概念である。完結性とは、文が、それが指示する事態全体の性質を表すということであり、事態について言語使用者による外部からの観察を表す。不完結性とは、文が、事態の局部的性質のみを表すということであり、事態に対して言語使用者による内部からの観察を表す。“V 着”の不完結性は、持続中の事態の始点と終点が明示されていないという特徴からうかがえる。以下の例文を見てみよう。

(2-14) 几杯 酒 过 后，宋庆龄 脸色 发红。她 无限深情地 注视着

身边 自己的 这些 同胞 姐妹们。(CCL)

(何杯 お酒 Guo 後 PSN 顔色 赤くなる 彼女 ADV 見つめる+Zhe

周り 自分の これら 同胞 姉妹たち)

(何杯か飲んだ後、宋慶齡は顔が赤くなった。彼女は限りない愛情をこめてまわりの姉妹たちを見つめている。)

例文(2-14)では、“注视着(見つめている)”は話し手が「見つめる」行為の持続部分に関心を持つ、また、事態の始点と終点には無関心であることを示す。これは“V 着”の「不完結性」を示す。

また“V 着”文では、(2-15)～(2-17)のように、“V 着”が時間量や動作量を表す語句と共起できない。これも“V 着”の「不完結性」を示す。

(2-15) a.\*犯人掉进了河里，挣扎着十来分钟，被警察救起来了。

b.犯人 掉 进 了 河里，挣扎 了 十来分钟， 被 警察 救 起来 了。(CCL)

(犯人落ちる 入れる Le 河の中 もがく Le 10 分ほど PASS 警察 救う 補語 LE)

(犯人は川に落ちて、10 分間ほどもがいた後に、警察に救われた。)

(2-16) a.\*整个上午都在写论文，可我就写着500字。

b.整个 上午 都 在 写论文， 可 我 就 写  
了 500 字。

(すべて 午前 ずっと Zai 論文を書く しかし 私 だけ 書く  
Le 500 文字)

(午前中ずっと論文を書いているけど、500字程度の文字を書いただけ  
だ。)

(2-17) a.\*办护照跑着5次派出所，现在的政府的办事效率真是让人不满意。

b.办护照 跑 了 5 次 派出所，现在 的 政府 的 办事效率  
真 让 人 不满意。

(パスポートを作る 走る Le 5回 警察署 現在 の 政府 の 効率  
本当に CAUS 人 不満)

(パスポートの手続きのためにもう5回も警察署へ行った。今の政府機  
関の仕事の効率には不満を抱いている。)

(2-15)、(2-16)、(2-17)の“十来分钟(10分間ぐらい)”、“500字(500文字)”、“5次(5回)”のような時間量・動作量表現は、その動作が示す事態全体の時間の幅を限定する。例文(2-15a)、(2-16a)、(2-17a)は、時間量・動作量表現が“V着”と共起すると極めて不自然になるが、“V着”を完了を表す“V了”に変えれば自然になる。これは“V着”が持つ不完結性という意味特徴の影響による。また、“V着”が結果性を示す動補式に現れないことも“V着”が不完結性を示す。

(2-18) a.\*在电话里宋子文听懂着杜月笙的弦外之音，是为缴纳“保险费”的事。

b.在 电话里，宋子文 听懂 了 杜月笙 的 弦外之音， 是  
为 缴纳 “保险费” 的 事。(CCL)

(介詞 電話 中 PSN 聞く わかる Le PSN の 話しの含み それは  
ため 支払い 保険料 の こと )

(電話の際に宋子文は杜月笙の話の含みが分かった。「保険料」の支払い  
の件だったのだ。)

例文(2-18)では、“听懂(聞いてわかる)”のような「動詞＋結果補語」の構造は、動作の結果を表し、動作が完結した意味が含意されている。そのため、不完結性を示す“着”を付加すると不自然になる。

また、“V 着”の不完結性は“V 着”を伴うフレーズが文として成立する条件にも影響を与えている。次の例文を見てみよう。

(2-19) a.?他们 开着会。

b.他们 开着会，外面下起雪来了。(章婧 2007:124)

(彼ら 会議をする+Zhe 外 雪が降る 始まる LE)

(彼らが会議をしていると、雪が降り出した。)

c.他们 正 开着会呢。

(彼ら 正に 会議をする+Zhe Ne)

(彼らは会議をしているところだ。)

(2-20) a.?他 吃着晚饭。

b.他 狼吞虎咽地 吃着晚饭。

(彼ら ADV 食べる+Zhe 晩ご飯)

(彼はガツガツと夕飯を食べている。)

(2-21) a.\*他 养着狗。

b.他 养着 50 只 狗。

(彼 飼う+Zhe 50 量詞 犬)

(彼は犬を 50 匹飼っている。)

(2-22) a.\*一大群人 吃着。

b.一大群人 吃着，跳着，拥挤着，叫嚷着。

(大勢の人 食べる+Zhe 踊る+Zhe 押し合う+Zhe 叫ぶ+Zhe)

(大勢の人が食べたり、踊ったり、押し合ったり、叫んだりしている。)

賀陽(1994:37)は文とフレーズの性質を分析し、その違いについて以下の見解を提示している。

句子必须能够作为言语交际的基本单位使用，必须可以独立担负交际功能，因此它必须具有表述性，即必须能够同特定的现实情景发生联系，只有当一个语言表达式具备了表述性后，它才有资格成为句子。

(文は必ずコミュニケーションの基本単位として使われ、コミュニケーション機能を担わなければならない。そのため、文は情報伝達性を備えていなければならない。つまり、特定の現実場面と関連していなければならないのである。あるフレーズが情報伝達性を備えていなければ、文にはならない。)

(2-19a)、(2-20a)、(2-21a)、(2-22a)は文にならないが、(2-19b)、(2-20b)、(2-21b)、(2-22b)のように、動詞フレーズ、連用修飾語、数量詞といった要素を加えれば、“V 着”を伴うフレーズは文として成立する。

“V 着”は事態の持続的プロセスという事態内の一局面のみを伝え、その持続的プロセス以外の現実的な場所、時間などの要素を伝えない。そのため“V 着”は賀陽(1994:37)が述べている現実場面との関連性を伝えない。つまり、情報伝達性は持たない。一方、動詞フレーズ、連用修飾語、数量詞のような要素を加えることにより、現実場面との関連性を伝え、情報伝達性を備えた独立文として成立する。この点について、第 6 章では詳しく説明する。このように、“V 着”を伴うフレーズが独立文として成立する条件から“V 着”の不完結性という意味特徴がうかがえる。

### 2.5.2 持続性

戴耀晶(1991)によれば、持続性とは事態の過程が連続することである。“V 着”が表す過程は絶え間なく連続するプロセスを表すため、持続性という特徴を持つと言える。

また戴耀晶(1991)は“着”の持続性を瞬間動詞と“着”の共起関係から説明し

ている。実は、これは“着”の持続性ではなく、“V 着”の持続性を示す。瞬間動詞は非持続性という特徴を持ち、仮定される時間軸上の「点」として表される。一方、前述した通り、“V 着”は仮定される時間軸上の「線状過程」のみを表す。そのため、瞬間動詞は“V 着”という構造に使わない。例えば、例文(2-23)はこの事実を示している。

(2-23) a.\*广州 来 的 列车 正 到着 上海站。(戴耀晶 1991:97)  
(広州 来る の 列車 正に 到着する+Zhe 上海駅)

しかしながら、例文(2-24)、(2-25)の動詞が瞬間動詞であるが、いずれも“着”と共起できる。実は、(2-23)と異なり、(2-24)、(2-25)における瞬間動詞が示す一瞬の動作は複数回反復されるのである。(2-24)では、動作主が瞬間的行為を反復して行う。(2-25)では、複数の主体または動作主が、それぞれ瞬間的な事態を発生させ、時間的に連続発生するイメージを示す。このように、(2-24)、(2-25)の瞬間動詞が示す事態は一つの持続的プロセスとして解釈できるので、“着”と共起するのである。

(2-24) 楼上 的 小朋友 在 不停地 敲着 地板。(CCL)  
(階上 の 子供 Zai ADV 叩く+Zhe 床。)  
(上に住んでいる子供はずっと床を叩きつづけている。)

(2-25) 手榴弹 一颗一颗地 爆炸着。(戴耀晶 1991:10)  
(手榴弹 一発また一発 爆発する+ Zhe )  
(手榴弾が一発また一発と爆発している。)

図 2-8 は例文(2-24)の“敲(叩く)”という瞬間的動作が反復されて、持続的プロセスの解釈が成立することを図式化したものである。

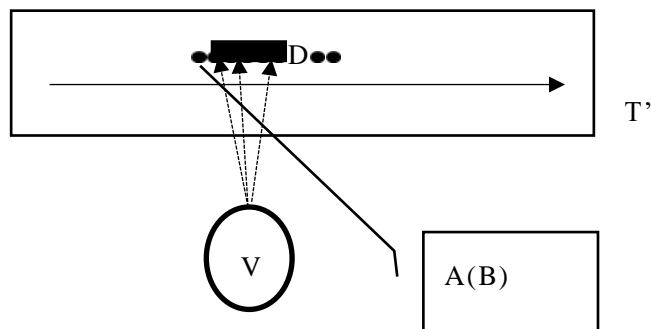


図 2-8 例文(2-24)の図式

⑤は認知主体(viewer)、破線の矢印は視線、実線の矢印 T'は仮定される時間軸を示す。四角の枠の中は動詞に関わる全体の事態(動作・作用が始まる前の状態から終わった後の状態まで)を表す。A は動作の始点、B は動作の終点を表す。D は認知主体が“着”という認知視点から捉えた“敲着”のプロセスを表す。

図 2-8 が示すように、“敲(たたく)”という動作は瞬間的に終わるので、始点 A と終点 B がほぼ重なると考えられる。よって、“敲(たたく)”という動作は仮定される時間軸上の「点」として捉えられる。認知主体が“着”の認知視点から“敲着”を観察する場合、捉えたのは動作主がその瞬間的動作を反復しているという持続的プロセス D である。“爆炸着”も同様である。一つの手榴弾が爆発することは仮定される時間軸上の「点」として捉えられるが、複数の手榴弾の爆発が相次いで発生するため、持続的プロセスを成し、仮定される時間軸上の「線」として捉えられるようになる。そのため、(2-25)は自然な文であるが、(2-26)は不自然な文である。

(2-26) \*一 顆 手榴弾 爆炸着。

(一 量詞 手榴弾 爆発する+Zhe )

2.3 節で本論文における持続を「時間軸上における幅を持つ状態が保持されること」と定義している。それは戴耀晶(1991)が提示した「持続性」と一致すると考えられる。本論文は「持続」と「持続性」を同じ概念として扱い、両者とも“V 着”が表す「線状過程」の特徴と考える。

### 2.5.3 動静二重性

戴耀晶(1991)は、動態と静態は事態の存在方式であり、動態は変化を反映するが、静態は変化を反映しないと指摘している。戴耀晶(1991)によれば、“着”は動態事態と静態事態の両方を表すことができる。本論文は“着”を認知主体が知覚操作を行うための認知視点として扱い、動態、静態という特徴が“着”の特徴ではなく、“着”から捉えた「線状過程」「V着」の特徴と考える。

例文(2-27)、(2-28)からわかるように、“唱(歌う)”のような動的な行為動詞も“死(死ぬ)”のような静的結果を示す動詞も「線状過程」を表す“V着”という構造に使われる。

(2-27) 他 在 KTV 一首接着一首地 唱着 情歌, 来发泄  
他 失恋 后 的 抑郁。(CCL)

(彼 介詞 カラオケ 一曲また一曲と 歌う+Zhe ラブソング ぶちまけ  
彼 失恋 後 の 悩み)

(彼はカラオケで一曲また一曲とラブソングを歌って、失恋の悩みをぶちまけている。)

(2-28) 桌子 底下 死着 一只 老鼠。

(机 下 死ぬ+Zhe 一匹 ネズミ)

(机の下で、ネズミが死んでいる。)

また、前節の(2-1')～(2-3')が示すように、(2-1')における“穿着”が「動作の変化にいたる過程」の持続という動態の局面を表す。(2-2')、(2-3')における“穿着”が「着テイル状態」の持続を表す静態の局面を表す。

“穿(着る)”のような動詞に内包される動態と静態の局面を“着”の「線状視点」から捉えられるので、“着”と共起する動詞例も数多く存在する。これも“V着”の動静二重性を示す。

#### 2.5.4 均質性

“V 着”が表す「線状過程」は上述の非完結性、持続性、動静二重性のほかに、もう一つ重要な特徴を持つと考えられる。それは均質性である。均質性とは、ある事態のプロセスにおいて質的なむらがなく、同一の性質が均等に現れることである。例文(2-29)～(2-31)を見てみよう。

(2-29) a.我 还 吃着 饭 呢，你 不要 说 那么 恶心的 话题。

(私 まだ 食べる+Zhe ご飯 Ne あなた しないで 言う 程度副詞 気持ち悪い 話題 )

(私はまだご飯を食べているんだ。そんな気持ち悪い話はやめてくれ。)

b.我 还 在 吃饭 呢，你 不要 说 那么 恶心的 话题。

(私 まだ Zai ご飯を食べる Ne あなた しないで 言う 程度副詞 気持ち悪い 話題 )

(私はまだご飯を食べているんだ。そんな気持ち悪い話はやめてくれ。)

(2-30) a.\*他还买着东西，你们等等他。

b.他 还 在 买东西， 你们 等等 他。

(彼 まだ Zai 買い物をする、あなたたち すこし待つ 彼。)

(彼はまだ買い物をしているから、少し待って。)

(2-31) a.\*他在邮局寄着包裹，大概需要 10 分钟。

b.他 在 邮局 寄包裹， 大概 需要 10 分钟。

(彼 介詞郵便局 小包を送る 大体 需要する 10 分間 )

(彼は今郵便局で小包を送る手続きをしていて、大体 10 分くらいかかる。)

“着”は例文(2-29)の“吃饭(ご飯を食べる)”と共起できるが、例文(2-30)の“买东西(買い物をする)”および(2-31)の“寄包裹(小包を送る)”と共起できない。こ

れは“V 着”の均質性が動詞の選択制約を課しているためであると考えられる。

“吃饭(ご飯を食べる)”という行為は比較的に単一的な連続体として考えられるが、“买东西(買い物をする)”と“寄包裹(小包を郵送する)”のプロセスは、具体的に質の異なるさまざまな局面から構成され、単一的な連続体として考えられにくい。例えば、買い物という事態は、商品を選ぶこと、値切ること、支払いをすることなど異なる局面から構成される。小包を郵送するプロセスも、宛先を書くこと、支払いを行うことなどの具体的に異なる局面から構成される。これらのことが“着”との共起制約につながっている。

## 2.6 まとめ

本章は“着”が進行、持続との関連性を説明した。また、朱繼征(2000)が指摘した進行相、持続相、残存相の3つを表すことの可能な“穿着”の例を、スキミングの認知プロセスから事態を考察し、“着”の本質に関する本論文の捉え方を述べた。

第一に、本章は“着”の意味に関する先行研究を整理し、“着”が進行あるいは持続を表せるかどうかという議論をめぐる研究者により意見が異なることを指摘した上で、本論文における進行と持続を再定義した。本論文における進行とは時間軸上の参照時間において、事態が正に発生していることであり、本論文における持続とは時間軸上における幅を持つ状態が保持されることである。また、“着”は進行を表さないことを説明した。発話時点において捉えられる事態の局面は認知主体が“着”という認知視点から知覚するプロセスにあるため、“着”は進行を表すという誤解が出ると説明した。

第二に、本論文における“着”の本質が「線状視点」であり、“V 着”は「線状過程」を表すという仮説を提起した。

「線状視点」に関する操作というのは、認知主体が動作・変化のような事態を捉える際に、「線」のような形の認知視点から事態を捉えるということである。あるいは、認知主体は各種類の事態における被写体を追跡する録画撮影のような方式で事態を捉えるということである。また、認知主体が“着”の「線状視点」から捉えた部分は仮定される時間軸上において幅を持つということを論じた上で、その幅をもつ部分は「線状過程」として、“V 着”の本質とする。

第三に、“V 着”が表す「線状過程」の特徴は、戴耀晶(1991)が指摘した非完結性、持続性、動静二重性のほか、「ある事態のプロセスにおいて質的なむらがなく、同一の性質が均等に現れること」という均質性の特徴も持つことを指摘した。また、本論文は「持続」と「持続性」を同じ概念として扱い、両方とも“V 着”が表す「線状過程」の特徴であることを明らかにした。

次章では、動詞と“着”の共起関係から“着”と“V 着”に関する仮説を検証する。

### 第3章 動詞と“着”の共起関係から見る“着”の「線状視点」

王学群(2007)によれば、“V 着”がさまざまな「動相」を表すことは動詞の語彙的意味と深く関わっている。本章では、孫英杰(2006)の動詞分類を参考にしながら動詞を具体的に分類する。その上で、各種類の動詞と“着”との共起関係から、中国語の「動相形式」“着”の本質が「線状視点」であるという考え方の妥当性を検証する。

#### 3.1 はじめに

前章では朱繼征(2000)が指摘した進行相、持続相、残存相を表す「動相形式」“着”は認知主体がスキニングの認知プロセスで事態を知覚した「線状視点」であると指摘した。認知主体が“着”の「線状視点」から知覚した部分である“V 着”は仮定される時間軸上における幅を持ち、「線」のような形で表示されるプロセスである「線状過程」と提案した。

陳平(1988)によれば、動詞は、その語彙的な意味が文の事象タイプを決めるとき、複数の可能性を与える。文のほかの成分は、動詞が提供する複数の事象タイプの可能性の中から選択し、文の事象タイプを具体的に決める役割を果たしている。また、王学群(2007)は“V 着”によるいくつかのアスペクト(動相)は“着”によって決められるものではなく、動詞の語彙的意味<sup>9</sup>に深く関わるものであると説明している。

つまり、動詞の語彙的意味は“V 着”に深く関わり、認知主体が“着”の「線状視点」からスキニングの認知プロセスで事態を捉える際に、複数の可能性を与える。“着”を研究する際には、その前に置かれている動詞を考察しなければならないと考えられる。

確かに、例文(1a)、(1b)が示すように、“穿(着る)”のような動詞が“着”と共起する場合、“穿(着る)”の語彙的意味は認知主体が“着”の「線状視点」からスキニングの認知プロセスで事態を捉えるには、複数の可能性を与えると考え

---

<sup>9</sup> 王学群(2007:8)によると、動詞の語彙的意味は動詞に内在するカテゴリーカルな意味である。

ることができる。しかしながら、例文(2)、(3)が示すように、すべての動詞が表す局面を“着”の「線状視点」から捉えられるわけではない。

(3-1) a. 山本 在 镜子前 不停地 穿着 刚 买回来 的 衣服。(=(2-1))

(PSN 介詞 鏡の前 とどまらず 着る+zhe 先 買ってくる の 服

(山本さんは鏡の前で買ってきたばかりの服を次々と着てみている。)

b. 山本 的 身上 穿着 刚 买回来 的 衣服。(=(2-3))

(PSN の 体に 着る+zhe 先 買ってくる の 服)

(山本さんの体には買ってきたばかりの服が纏われている。)

(3-2) a.\*你是属于着我的。

b. 你 是 属于 我 的。

(あなたは 属する 私 の)

(お前はぼくのものだ。)

(3-3) a.\*我找到着钱包了。

b. 我 找到 钱包 了。

(私 見つかる 財布 LE)

(財布が見つかった。)

例文(3-2)、(3-3)が示すように、動詞“属于(属する)”、“找到(見つける)”のような動詞は“着”と共起できない。では、“着”と共起できる動詞はどのような特徴を持つのであろうか。本章では動詞の語彙的意味を考察し、中国語の動詞分類を参照することによって、“着”と共起できる動詞の特徴から中国語の「動相形式」“着”の本質が「線状視点」であるという考え方の妥当性を検証する。

### 3.2 先行研究

動詞と“着”の共起関係について、主に次の3つの立場からこれまで研究されてきた。①“着”と共起できる動詞だけを考察する研究(平山久雄(1959)、荒川清秀(2015))である。②“着”と共起できるかどうかを基準として動詞分類を考察す

る研究である(马庆株(1981)、張文青(2013))。③動詞の内部過程で動詞を分類してから、“着”との共起関係を考察する研究である(郭锐(1993)、孙英杰(2006))。次はこの3つの立場の先行研究をそれぞれ概観する。

### 3.2.1 “着”と共起できる動詞だけを考察する研究

平山久雄(1959)は“着”と共起できる動詞をA類・B類・C類という3類に分けている。A類は、「その動詞の表す動作の継続進行だけが示される動詞」、B類は、「その動詞の表す動作の結果として生ずる状態だけが示される動詞」、C類は、「動作の継続進行、状態の持続のどちらも示される動詞」である。

A類: 谈(話す)、刮(削り取る)、脱(脱ぐ)、解(解く)、洗(洗う)

B類: 留(残す)、落(落ちる)、长(生える)、裂(裂ける)、破(敗れる)

C類: 贴(貼る)、挂(掛ける)、穿(着る)、系(結ぶ)、摆(並べる)、涂(塗る)

荒川清秀(2015)は“着”と動詞との結合度によって動作動詞を次のようにa類からe類までの5つに分類している。

a. 站(立つ)、坐(座る)、躺(横になる)、挂<sub>2</sub>(掛けてある)

b. 穿<sub>2</sub>(着ている)、拿<sub>2</sub>(もっている)、戴<sub>2</sub>(掛けてある)

c. 歇(一休みする)、待(とどまる)、跟(ついていく)

d. 等(待つ)、听(聞く)、躲(隠れる)

e. 干(する)、吃(食べる)、穿<sub>1</sub>(着る)、挂<sub>1</sub>(掛ける)

平山久雄(1959)と荒川清秀(2015)は動詞の種類と“着”の共起関係を分析しようと試みている。しかしながら、取り上げた動詞大部分は動作動詞である。また、荒川清秀(2015)はe類の“干”、“穿<sub>1</sub>”が“着”と共起して不自然な文になると指摘したが、CCLで調べてみると、下記の例文(3-4)のような“干着”の例文が493例見つかった。また、“穿<sub>1</sub>”に関して、例文(3-5)のように、“在镜子前(鏡の前で)”と“不停地(止まらずに)”のような要素がある場合、“穿<sub>1</sub>”は“着”

と共起できる。この場合、“穿<sub>1</sub>”が表す「動詞の変化にいたる過程の局面」が“着”という「認知視点」から捉えられると考えることができる。

(3-4) a. 他们 埋头 干着 自己的事情, 眼光 很少 投 向 别处。(CCL)

(彼ら 没頭 する+Zhe 自分のこと 視線 少ない 投げる に 別所)

(彼らは自分のことに夢中で、ほかのところをあまり見ていない。)

b. 我 一而再再而三地 干着 无耻的勾当。(CCL)

(私 ADV する+Zhe 恥知らずのよからぬこと )

(私は何度も恥知らずのよからぬことを繰り返している)

c. 只 有 不 到 15% 的 人 在 同时 干着 两份职业。(CCL)

(ただ いる NEG 至る 15% の 人 Zai 同時に する+Zhe 2つの仕事)

(同時に2つの仕事に携わっている人はただ15%に至っていない。)

(3-5) a. 山本 在 镜子前 不停地 穿着 刚 买回来 的 衣服。(=(3-1)

(PSN 介詞 鏡の前 とどまらず 着る+zhe 先 買ってくる の 服

(山本さんは鏡の前で買ってきたばかりの服を次々と着てみている。)

荒川清秀(2015)は“穿”を動詞の変化にいたる過程の局面を表す“穿<sub>1</sub>”と着テイル状態を維持する動作の局面を表す“穿<sub>2</sub>”に分けている。この点に関しては、2.4節で説明したように、本論文では“穿(着る)”を“穿<sub>1</sub>”、“穿<sub>2</sub>”に分けず、ただ一つの“穿(着る)”と考える。その“穿(着る)”の語彙的な意味は「衣服や靴などを体に着用する」という動詞の変化にいたる過程のみを表すと考えられる。また、着テイル状態を維持する動作の局面は“穿(着る)”が表す動作が終わった結果と解釈する。

また荒川清秀(2015)では、“穿<sub>1</sub>”、“干(やる)”に代表されるe類はどのような特徴を持っているのか。一般的な動作動詞と見なすなら、“吃(食べる)”のような動作動詞とどのような違いがあるのかについて説明されていない。つまり、荒川清秀(2015)のe類の動詞に関して再考する必要があると考えられる。

### 3.2.2 “着”との共起関係を基準として動詞分類を考察する研究

平山久雄(1959)と荒川清秀(2015)は“着”と共起できる動詞だけを考察対象として、これらが“着”との共起関係を考察したが、马庆株(1981)と張文青(2013)はすべての動詞を考察対象として、動詞が“着”と共起できるかどうかを基準としてすべての動詞を分類した。

马庆株(1981)は“着”との共起可能性により、中国語の動詞を「非継続動詞(Va)」と「継続動詞(Vb)」のまず2つに分類している。また、統語パターン(V+(了)+T<sup>10</sup>+了)<sup>11</sup>における後置時間詞(post-verbal time phrase)が、動作の継続時間のみを指すのか、それとも動作の継続時間に加え、動作完了後の経過時間も指すことができるのかによって、継続動詞を「強い継続動詞(Vb1)」と「弱い継続動詞(Vb2)」に分類している。さらに、統語パターン(V+T)<sup>12</sup>において、時間補語が動作の継続時間を指すのか、それとも、動作の継続時間と動作による結果状態の残留時間の両方を指すことができるかにより、「“看”タイプ(Vb21)」と「“挂”タイプ(Vb22)」に分けている。具体的には次の図のように分類される。

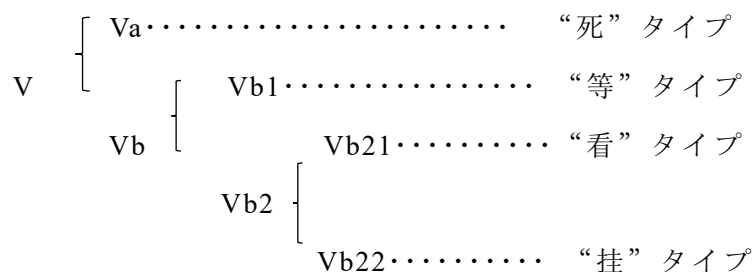


図 3-1 马庆株(1981)による動詞分類 (马庆株 1981:7)

また、马庆株(1981)は上の分類を[±持続](durative)、[±完了](telic)、[±状態](static)という3つの意味特徴を用いて次のように表現できると説明している。

<sup>10</sup> 马庆株(1981)に T は時間詞を示す。

<sup>11</sup> V+(了)+T+了の例：看(了)3天了(3日間見続けた(見てから3日経過した))。

<sup>12</sup> V+T の例：看3天(3日見続けた)。

Va [+完了]、[-継続]

Vb1 [-完了]、[+継続]

Vb21 [+完了]、[+継続]、[-状態]

Vb22 [+完了]、[+継続]、[+状態] (马庆株 1981:7)

马庆株(1981)は、“死”タイプ(“死(死ぬ)”、“熄(消える)”…)は“着”と共に起できないため、「非継続動詞(Va)」に分類している。しかし、実際の用例コーパス(CCL、BCC)には下記のような例文が確認できる。

(3-6) 在 老街 一社区办事处门口，死着 3 个人，一名 妇女，两名 男子。(BCC)  
(介詞 古い町 ある団地事務所の前 死ぬ+Zhe 3 人 1 人 女 2 人 男 )  
(古い町の団地事務所の前で、3 人が死んでいる。女 1 人、男 2 人。)

(3-7) 桌子 底下 死着 一只 老鼠。<sup>13</sup>  
(机 下 死ぬ+Zhe 1 匹 ネズミ)  
(机の下で 1 匹のネズミが死んでいる。)

(3-8) 可是 教室 里 静悄悄的，熄着 灯。(CCL)  
(しかし 教室 中 静か 消える+Zhe 電気)  
(しかし教室の中は静かで、電気も消えている。)

(3-9) 家家 都 黑糊糊地 熄着 灯，没有 一个人 来 迎接。(CCL)  
(家々 でも ADV 消える+Zhe 電気 いない 1 人 来る 迎える)  
(みんなの家は電気も消えていて、真っ暗で、迎えに来てくれる人もいない。)

---

<sup>13</sup> 中国のウェイボーでは例文(3-6)、(3-7)のような例文が 20 例見つかった。この文の容認度について、筆者は違う出身地の中国語母語話者の 21 人を調査対象として、アンケート調査した。その結果、21 人の中に、(3-6)、(3-7)それぞれが自然であると思っている人が 18 人、17 人である。容認度の確率は 75% 以上である。このため、本論文は(3-6)、(3-7)は自然な文であると認める。

馬慶株(1981)によれば、“死(死ぬ)”、“熄(消える)”は“着”と共起できない。しかしながら、例文(3-6)～(3-9)が示すように、実際には、“死(死ぬ)”、“熄(消える)”という動詞が“着”と共起できることが確認できる。

馬慶株(1981)と同様、張文青(2013)も動詞と“着”との相性を分析して、下記のように整理している。

表 3 張文青(2013)による動詞分類

第 1 類：瞬間動詞、非持続性動詞 (－持続)、“着”が用いられない	死(死ぬ) <sup>14</sup> 、倒(倒れる)、塌(崩れ落ちる)、 扔(投げつける)、断(切れる)、熄(消える)、 来(来る)、去(行く)、出发(出発する)、开 始(始まる)、结束(おわる)、出来(出てく る)、进去(入る)、毕业(卒業する)、结婚 (結婚する)
第 2 類：属性や関係を表す動詞 (＋持続)、“着”が用いられない	属于(属する)、等于(等しい)、是(である)、 姓(を姓とする)、适合(ふさわしい)、符合 (合う)、作为(とする)、服从(従う)
第 3 類：心理状態或いは生理状 態、認知を表す動詞 (＋持続)、“着”が用いられない	喜欢(好きだ)、讨厌(嫌いだ)、高兴(嬉し い)、知道(わかる)、明白(了解する)、懂 得(理解する)
第 4 類：瞬間動詞、持続性動詞 (±持続) <sup>15</sup> 、“着”が用いられる	看(見る)、听(聞く)、说(話す)、想(考え る)、走(歩く)、跑(走る)、吃(食べる)、喝 (飲む)、写(書く)、记(記す)、弹(弾く)、 学习(勉強する)、商量(相談する)、研究 (研究する)、讨论(議論する)、批判(批判 する)

<sup>14</sup> 表 1 の動詞の日本語訳は筆者によるものである。

<sup>15</sup> 張文青(2013:114)によれば、第 4 種類の動詞は瞬間的に終わる場合もあれば、一定時間持  
続する場合もあるため、(±持続)という特徴をもつ。

第 5 類：持続時間が比較的長い、 持続性が強い、 (+持続)、“着”がよく用いられる	坐(座る)、站(立つ)、躺(横になる)、蹲(しゃがみこむ)、趴(うつ伏せになる)、卧(横になる)、立(立つ)、顶(頭にのせる)、放(置く)、挂(かける)、钉(打ち込む)、捆(縛る)、搁(置く)、盖(かぶせる)、垫(敷く)、塞(ふさぐ)、插(挿す)
第 6 類：持続性がかなり強い、 (++持続)、常に“着”を用いる	向(向かう)、对(向かう)、朝(向く)、过(過 ごす)、随(につれて)、意味(意味する)、 标志(象徴する)

(張文青 2013:114)

張文青(2013)の分類については下記の問題点がある。まず、張文青(2013:114)には、瞬間動詞と持続性動詞を判断する基準が不明である。特に、第 4 類の動詞が「瞬間動詞、持続性動詞」に分類されているが、瞬間動詞と持続性動詞はもともと違う種類の動詞であり、“看(見る)”、“听(聞く)”、“说(話す)”のような動詞を瞬間動詞に分類することには再考の余地があると考えられる。また、“着”が用いられない第 1 類、第 2 類、第 3 類のうち、“死(死ぬ)”、“倒(倒れる)”、“符合(合う)”、“喜欢(好きだ)”、“扔(投げつける)”という動詞と“着”とが共起できる例文が(3-10)～(3-14)に示すように存在していることも事実である。

(3-10) 在 老街 一社区办事处门口 死着 3 个人 一名 妇女，两名 男子。(=3-6)

(介詞 古い町 ある団地事務所の前 死ぬ+Zhe 3 人 1 人 女 2 人 男 )

(古い町の団地事務所の前で、3 人が死んでいる。女 1 人、男 2 人。)

(3-11) 小侯 返身 回 营 时，看见 皑皑白雪堆里 倒着  
一位 年逾 8 旬的老人。(CCL)

(PSN 戻る キャンプ地 時 見える 真っ白な雪だまりの中 倒れる+Zhe  
一位 80 代の老人 )

(侯ちゃんがキャンプ地に戻った時、80 代の老人が真っ白な雪だまりの中  
に倒れているのが見えた。)

(3-12) 它 是 时代精神 的 折射 并且 符合着 时代历史 的 要求。(CCL)

(それは 時代的精神の 反映 そして 合う+Zhe 時代の歴史 の 要求)

(それは時代的精神を反映しており、時代と歴史の要求に合っている。)

(3-13) 叶雪清 学 的 是 西医, 却 深深地 喜欢着 中医。(CCL)

(PSN 習う の は 西洋医学 しかし ADV 好き+Zhe 漢方医学)

(葉雪清は西洋医学を習ったが、漢方医学のほうがけっこう好きだ。)

(3-14) 地 上 扔着 一 双 鞋。(郭锐 1993:412)

(床 上 捨てる+Zhe 一 量詞 靴)

(床に一足の靴が捨てられている。)

以上の分析からわかるように、马庆株(1981)、張文青(2013)のように“着”と動詞との共起関係を基準に中国語の動詞を分類することは、確かに“着”の特徴を見る上で価値があると考えられる。しかし、马庆株(1981)、張文青(2013)では“着”と共起できない種類に分類されている動詞であっても、“着”と共起する例文も確認できる。また、それらの例文の容認度は中国語母語話者にも認められている。そのため、本論文は“着”と動詞との共起関係を基準として中国語の動詞を分類することには再考する余地があると考えられる。

### 3.2.3 動詞を分類してから“着”との共起関係を考察する研究

これまでの動詞分類に関する研究では、马庆株(1981)、張文青(2013)のように動詞と“着”との共起関係を基準とする分類以外に、多くの研究者がほかのさまざまな方法と基準で動詞の分類を試みてきた。

Vendler(1967)は、What happened?, be-ing, in an hour, for an hour のようなテスト基準を用いて、時間的な継続(temporal duration)、時間的な終点(temporal termination)、および内的な時間構造(internal temporal structure)などの時間的な属性により、英語の動詞を下記の4タイプに分類している。

(3-15)

(a) STATE

Non-actions that hold for some period of time but lack continuous tenses.

例: know, believe, have, desire, love

( I ) Fred knows the girl.

(b) ACTIVITY

Events that go on for a time, but do not necessarily terminate at any given point.

例: run, walk, play, swim, push a cart, drive

( II ) John walked for an hour.

(c) ACCOMPLISHMENT

Events that proceed toward a logically necessary terminus.

例: consume, paint a picture, build a house, push a cart to the supermarket

( III ) Harry painted a picture yesterday.

(d) ACHIEVEMENT

Events that occur at a single moment, and therefore lack continuous tenses.

例: recognize, spot, find, lose, reach, die, arrive, win

( IV ) Bill found his watch.

(3-15)の Vendler(1967)の動詞分類からわかるように、動詞の 4 分類と呼ばれるものは、単独の動詞のみならず、**paint a picture** や **push a cart to the supermarket** のように、動詞句の意味に基づいている研究もある。この点に関して、左思民(2004)は、Vendler(1967)の 4 分類は単独の動詞の特徴だけではなく、命題のほかの部分も触れて分類していると述べている。本章の研究対象は中国語の動詞句ではなく、単独の動詞である。これまでの研究では、中国語の単独の動詞の特徴を考察し分類する研究も多くある。たとえば、郭锐(1993)、孙英杰(2006)は単独の動詞の内部過程を考察し、動詞を分類している。

郭锐(1993)は 6 つの基準で動詞の内部過程の 3 つの要素(始点 inception、終点 finish、存続 duration)の有無を判断して動詞を 5 種類(無限構造動詞、前限構造動詞、双限構造動詞、後限構造動詞、点構造動詞)に分けている。また、動詞の内部過程の 3 つの要素(始点、終点、存続)の強弱によって 5 種類の動詞をさらに 10 種類に分けている。

表 4 郭锐(1993)による動詞分類

分類	～着	例
無限構造動詞	－	是(である)、等于(等しい)、以为(思う)、作为(とする)
前限構造動詞	－	认识(認識する)、知道(わかる)、熟悉(よく知っている)、当心(気をつける)
双限構造動詞	－	相信(信じる)、喜欢(好きだ)、懂(わかる)、姓(を姓とする)、重视(重視する)
	＋	有(ある)、瞎(目が見えない)、信任(信任する)、爱护(大切に守る)、希望(希望する)
	＋	坐(座る)、病(病気になる)、醉(酔っ払う)、承担(引き受ける)
	＋	等(待つ)、端(両手で物を水平にささげ持つ)、战斗(戦う)、敲(たたく)、工作(仕事する)
	＋	吃(食べる)、烧(焼く)、搬(運ぶ)、看(見る)、修改(修正する)
後限構造動詞	＋	产生(現れる)、提高(高める)、消失(消える)、增加(増える)
	－	离开(離れる)、死亡(死ぬ)、消除(消える)、实现(実現する)
点構造動詞	－	来(来る)、忘(忘れる)、看见(見える)、收到(受け取る)、开始(開始する)

(郭锐 1993:413)

孙英杰(2006)は郭锐(1993)の分類を参考にして動詞を状態動詞、活動動詞、結果動詞、完成動詞に分けている。孙英杰(2006)は状態動詞、活動動詞、結果動詞を基本的な種類と見なし、完成動詞を複合動詞と見なしている。また、動詞の意味特徴に[動態]と[結果]が含まれているかどうかを基準として状態動詞、活動動詞、結果動詞を区別している。

表 5 孙英杰(2006)による動詞分類

動詞分類	例
状態動詞	等于(等しい)、称(呼ぶ)、爱(愛する)、相信(信じる)、认为(思う)
活動動詞	吃(食べる)、说(言う)、写(書く)、画(描く)、敲(叩く)、思考(考える)
結果動詞	死(死ぬ)、倒(倒れる)、丢(なくす)、赢(勝つ)、毕业(卒業する)
完成動詞	“V+結果補語”：打败(負かす)、打死(打ち殺す)、抓住(捕まえる)、吃掉(食べてしまう)、猜中(ぴたりと当たる)
	“V+方向補語”：请来(誘ってきてもらう)、拖下去(引っ張っていく)、带过来(連れてくる)
	“V+到”：看到(見える)
	“V+往/中/掉”：抓住(捕まえる)、吃掉(食べてしまう)、猜中(ぴたりと当たる)

(孙英杰 2006:43-68)

孙英杰(2006)は郭锐(1993)の分類を踏まえた上で、動補構造を動詞の一種類に含めた。孙英杰(2006)の動詞分類の基準は明確であり、中国語の動詞の特性を適切に捉えられるものだと考えられる。そのため、本章は孙英杰(2006)の動詞分類を参考に各種類の動詞を考察する。また、コーパスを利用し、各種類の動詞と“着”との共起関係を考察するとともに、各種類の動詞の内部過程を考察し、仮定される時間軸上に表示する。

### 3.3 各種の動詞と“着”との共起関係

本節は孫英杰(2006)の分類を踏まえ、動詞を状態動詞、活動動詞、結果動詞と完成動詞に分類する。しかし、具体的な動詞をこれら 4 つの動詞タイプに分類する際、本論文は孫英杰(2006)の分類結果とは異なる場合がある。本節はそれぞれの動詞を考察し、孫英杰(2006)の分類を検討しながら、それぞれの動詞タイプを再分類して、それらと“着”との共起関係を分析することによって、動詞の内部過程から捉える局面を明らかにする。そして、各種の動詞と“着”との共起関係と内部過程の特徴から“着”と“V 着”の本質に関する仮説の妥当性を検証する。

#### 3.3.1 状態動詞と“着”との共起関係

孫英杰(2006)は状態動詞を下記の 5 種類に分類している。

- ①大方(気前がいい)、充分(十分)、严肃(厳しい)、悠然(悠然だ)、雪白(雪のように白い)
- ②擅长(上手だ)、善于(上手だ)、适合(ふさわしい)
- ③等于(等しい)、称(呼ぶ)、号称(誇称する)、姓(…を苗字とする)、像(似ている)、属于(属する)
- ④犹豫(迷う)、爱(愛する)、相信(信じる)、喜欢(好きだ)、犹豫(迷う)、高兴(嬉しい)、希望(希望する)、恨(うらむ)、悲伤(悲しむ)、尊重(尊重する)、感谢(感謝する)、失望(がっかりする)
- ⑤觉得(と思う)、认为(と思う)、以为(と思う)

孫英杰(2006)によれば、状態動詞は変化がなく、穏やかで持続的な状態を表す静態状態動詞を示す。静態状態動詞は“丢(なくなる)”、“忘(忘れる)”、“赢(勝つ)”、“毕业(卒業する)”のような状態の変化が含意される動態状態動詞と区別される。孫英杰(2006)は“丢(なくなる)”、“忘(忘れる)”、“赢(勝つ)”、“毕业(卒業する)”のように、状態の変化があり、ある結果(状態の変化または位置の変化)が現れることを表す動態状態動詞を結果動詞に分類している。

また、孫英杰(2006)は「±動態」という意味特徴に基づいて状態動詞と活動動詞を区別している。(3-16)が示すように、活動動詞は「動態」の意味特徴を含意する

ので、進行相の形式“正在”と共起できる。(3-17)、(3-18)が示すように、状態動詞は「動態」の意味特徴を含意していないため、進行相の形式“正在”と共起できない。

- (3-16) 我 正 在 写书, 在 书 中 反省 我 的 前半生。  
(私 正に Zai 本を書く 介詞 本 中 反省 私 の 前半生 )  
(私は今、本を書いている。本を書きながら私の前半生を省みている)

- (3-17) \*最 使 他 高兴的 是, 人们 正 在 尊重 他 的 意见。  
(一番 CAUS 彼 嬉しい は 人間 正に Zai 尊重する彼 の 意見)

- (3-18) \*他 正 在 坐。  
(彼 正に Zai 座る)

確かに、この基準は“尊重(尊敬する)”、“坐(座る)”を状態動詞に分類する場合には有効である。

しかし、孙英杰(2006)は例文(3-19)の“犹豫”を状態動詞として扱っているが、CCLで調べた結果、例文(3-20)のように、“犹豫”が進行相の形式“正在”と共起する例文が61例確認できる。

- (3-19) 夏青 犹豫着, 嗫嚅着, 迟迟 不 开口。(孙英杰 2006:52)  
(PSN 迷う+Zhe 言い渋る+Zhe 遅々として NEG 口を出す )  
(夏青は迷って、言い渋って、なかなか口に出さない。)

- (3-20) 老人 正 在 犹豫 去不去 时, 这个骗局 被 揭穿。(CCL)  
(老人 正に Zai 考える 行くかどうか 時 この詐欺 PASS ばらす)  
(老人が行くかどうかと考えているうちに、この詐欺がばれた。)

例文(3-20)の“犹豫”は「迷う」の意味を表すより、「考える」の意味と理解することは自然であると考えられる。つまり、この例文の“犹豫”が表す意味は「迷

う」という状態より、「考える」という動作に近いと考えられる。その一方、下記の(3-21)では、“犹豫”を「考える」より「迷う」の意味と理解することが自然である。また、状態の程度を修飾する程度副詞“非常(非常に)”があることも、(3-21)の“犹豫”が動作より状態と判断するための証拠であると考えられる。

(3-21) 余静 赶到 实验室, 韩云程 坐 在那里, 心里 非常 犹豫。(CCL)

(PSN 急ぐ 着く実験室 PSN 座る Zai あそこ 心中 非常に 迷う)

(余静が急いで実験室に着いた時、韓雲程が座っていて、非常に迷っていた。)

つまり、“犹豫”が表す意味は「考える」という意味に近い活動動詞の面と「迷う」という意味に近い状態動詞の2つの面がある。孫英杰(2006)に従えば、“犹豫”は活動動詞、状態動詞のどちらに分類されてもかまわないと考えられる。

“犹豫”以外に、“想”が表す意味も「考える」の面と「会いたい」の面の2つの面がある。このため、本章は“犹豫”と“想”を“犹豫<sub>1</sub>(迷う)”、“犹豫<sub>2</sub>(考える)”と“想<sub>1</sub>(会いたい)”と“想<sub>2</sub>(考える)”に分ける。孫英杰(2006)の研究を踏まえ、“犹豫<sub>2</sub>(考える)”、“想<sub>2</sub>(考える)”が“正在”と共起できるため、“思考(思考する)”、“考虑(考える)”、“反思(反省する)”と同様に活動動詞に分類する。さらに、“犹豫<sub>1</sub>(迷う)”と“想<sub>1</sub>(会いたい)”を“尊重(尊敬する)”、“坐(座る)”と同様に状態動詞に分類する。

また、孫英杰(2006)が言及した状態動詞に“大方(気前がいい)”、“充分(十分)”、“严肃(厳しい)”、“悠然(悠然だ)”、“擅长(上手だ)”、“善于(上手だ)”、“适合(ふさわしい)”、“雪白(雪のように白い)”のようなタイプがある。このタイプの状態動詞はものごとの性質や属性を表す。北京大学中国語文学系現代漢語教研室(2004:257)においては形容詞は性質或いは属性を表すと述べている。本論文はこのタイプの品詞を形容詞として扱い、状態動詞に分類しないこととする。

また、“坐(座る)”、“站(立つ)”、“躺(横になる)”のような動詞は孫英杰(2006)では言及していない。進行相の形式“正在”と共起できないため、本論文は“坐(座る)”グループの動詞を状態動詞に分類する。

本節は上記の分析を踏まえ、孫英杰(2006)の5種類の状態動詞を下記の4種類に分類する。

状態動詞 1: 等于(等しい)、称(呼ぶ)、号称(誇称する)

姓(…を苗字とする)、像(似ている)、属于(属する)

状態動詞 2: 爱(愛する)、相信(信じる)、喜欢(好きだ)、高兴(嬉しい)

犹豫<sub>1</sub>(迷う)、希望(希望する)、恨(うらむ)、悲伤(悲しむ)

尊重(尊重する)、感谢(感謝する)、失望(がっかりする)

状態動詞 3: 觉得(と思う)、认为(と思う)、以为(と思う)

状態動詞 4: 站(立つ)、坐(座る)、躺(横になる)、趴(うつ伏せになる)

次節では、それぞれの状態動詞と“着”との共起関係を考察する。

#### 3.3.1.1 状態動詞 1

状態動詞には、“等于(等しい)”、“称(呼ぶ)”、“号称(誇称する)”、“姓(…を苗字とする)”、“像(似ている)”、“属于(属する)”などが含まれる。

孫英杰(2006)は意味上、状態動詞 1 が物事の関係を表すため、“是(である)”、“等于(等しい)”、“称(呼ぶ)”、“号称(誇称する)”、“姓(…を苗字とする)”、“像(似ている)”、“属于(属する)”のような動詞を関係動詞と呼んでいる。郭銳(1993)は、下記の(3-22)、(3-23)が示すように、状態動詞 1 が表す動作・作用は始点と終点を持っておらず、“了”、“着”、“时量宾语(目的語としての時間量詞)”と共起できないため、「無限構造動詞」と分類している。

(3-22) 我 是 (\*着/\*了) 小郑。

(私 は Zhe Le PSN)

(3-23) 我 是 小郑(\*两年 了 (2年になった))。

(私 は PSN 2年 LE)

邓宇阳(2019)は“是(である)”、“像(似ている)”、“姓(…を苗字とする)”、“等于(等しい)”、“属于(属する)”のような動詞はある性質を描写する、或いは際立たせるため、「動相形式」“着”および“了”と共起できないと指摘している。工藤真由美(2014:46)に従えば、これらの動詞は「時間的限定性」<sup>16</sup>を持っていない動詞と考えられる。つまり、状態動詞 1 が表す局面は仮定される時間軸上に展開されず、捉えられないと考えられる。1.4.2 節で示したように、本論文における「動相」とは事態の内部的な時間構造の捉え方(事態がどの段階に注目するか)に関わる文法カテゴリーである。本論文における中国語の「動相形式」“着”は認知主体がスキニングの動的な認知プロセスを行う窓口の認知視点である。状態動詞 1 が表す局面は仮定される時間軸上に展開されないため、窓口の認知視点としての“着”から動詞が表す局面が捉えられないのは当然であると考えられる。状態動詞 1 が“着”と共起できないことも“着”の認知視点の役割を証明していると考えられる。

### 3.3.1.2 状態動詞 2

状態動詞 2 には、“爱(愛する)”、“相信(信じる)”、“喜欢(好きだ)”、“高兴(嬉しい)”、“希望(希望する)”、“恨(うらむ)”、“悲伤(悲しむ)”、“尊重(尊重する)”、“感谢(感謝する)”、“失望(がっかりする)”などが含まれる。

“爱(愛する)”に関して、沈家煊(1995)は赵元任(1979)における動作動詞と非動作動詞の分類を説明する際に、動作動詞は“吃着(食べている)”、“吃吃(ちょっと食べる)”のように、“着”を付加することができるが、非動作動詞は“爱着(愛している)”のように一般に“着”を付加できないと述べている。また、郭锐(1993)は“相信(信じる)”、“喜欢(好きだ)”を“着”と共起できない「前限動詞」に分類している。張文青(2013)は“喜欢(好きだ)”、“高兴(嬉しい)”、“相信(信じる)”のような動詞が“着”と共起できないと説明している。

---

<sup>16</sup> 工藤真由美(2014:46)は時間的限定性とは、すべての述語を捉えているカテゴリーで、偶発的(accidental)な一時的(temporary)な<現象>か、ポテンシャルな恒常的(permanent)な<本質>かのスケールの違いであると指摘している。

しかしながら、CCLで調べた結果、“爱着(愛している)”の例文は908例、“相信着”の例文は23例、“高兴着”の例文は15例確認できた。また、同じ状態動詞1に属する動詞の“想念着(懐かしんでいる)”は99例、“希望着(期待している)”は80例、“恨着(恨んでいる)”の例文は52例、“喜欢着(好き)”は15例、“悲伤着(悲しんでいる)”は6例、“尊重着(尊重している)”は3例、“感谢着(感謝している)”は24例、“失望着(失望している)”は4例確認できた。つまり、状態動詞2は“着”と共起することが可能である。では、なぜ先行研究の判例が多く確認されるのであろうか。

沈家煊(1995)、郭锐(1993)、張文青(2013)の分類と異なり、王学群(2007)は状態動詞2が“着”と共起できることを認めている。王学群(2007)は状態動詞2を心理活動動詞と分類し、これらの動詞がゼロ形態<sup>17</sup>の場合には、心的な態度の表明、感情的な表出を表すのに対して、“V着”の場合にはそのような心理活動を継続的なものとしてとらえると指摘している。王学群(2007)の論述は状態動詞2と“着”の共起関係を理解する上で参考になると考えられる。

意味的には、状態動詞2は主に認知主体の心理状態を表す。統語的には、例文(3-24)、(3-25)が示すように、これらの動詞は性質形容詞<sup>18</sup>に近く、“很(すごく)、“非常(非常に)”、“有点儿(ちょっと)”のような程度副詞に修飾される。そのため、これらの動詞を「静態動詞」と認識する先行研究もある(吴春相・余瑞雪(2008:83-88)、刘月华(2001:194)。邓宇阳(2019:42-54)はそのような動詞を形容的動詞と呼んでいる。刘月华(2001:205)はこれらの動詞を形容詞と動詞両方の特徴を同時に持つ兼類語<sup>19</sup>と呼んでいる。

- (3-24) 他      非常      爱      她。  
(彼   非常に   愛する   彼女)  
(彼は彼女のことを非常に愛している。)

---

<sup>17</sup> 王学群(2007)によれば、動詞のゼロ形態は“V着”と区別する動詞単体“V”を示す。

<sup>18</sup> 刘月华(2001:194)は一般に、性質形容詞は程度副詞に修飾されると指摘している。

<sup>19</sup> 北京大学中国語文学系現代漢語教研室(2004:275)は「しかるに具体的な語のいくつかについてみると、2種類もしくは2種類以上の品詞の文法的特徴を兼ね備えていることがあって、これを語の兼類現象と呼ぶ。たとえば、“革命”は形容詞(革命的な)と名詞(革命)の兼類語なのである」と指摘している。

(3-25) 他 很 尊重 他 的 老师。

(彼 すごく 尊重する 彼 の 先生)

(彼はとても先生のことを尊敬している。)

つまり、中国語の状態動詞 2 は性質形容詞の特徴をもつ状態動詞である。本論文は邓宇阳(2019:42-54)を参考に、これらの動詞を形容的動詞と呼ぶ。沈家煊(1995)、郭锐(1993)、張文青(2013)がこれらの動詞を“着”と共起できない動詞と判断する理由は、これらの動詞が性質形容詞の特徴を見ていたためであると考えられる。

また、張文青(2013)は心理状態や生理状態を表す動詞は持続性を持つと指摘している。確かに、一般的に、これらの心理状態は瞬間的に変えられず、持続している状態と認知される。

町田健(2004:169)によれば、コトバには意味を伝達する機能があることを前提としながら、コトバを支配する原理として「経済性」<sup>20</sup>がある。2.5 節で説明したように、“V 着”は持続性を持つ「線状過程」を表す。しかしながら、“V 着”を使わず、状態動詞 2 のゼロ形態だけでも、持続している状態を表すことができる。そのため、“V 着”ではなく、状態動詞 2 を使う場合、ゼロ形態が多く使われると考えられる。つまり、沈家煊(1995)、郭锐(1993)、張文青(2013)がこれらの動詞を“着”と共起できない動詞と判断する理由にはコトバの経済性もあると考えられる。

また、“我爱你(私はあなたのことを愛している。)”、“我喜欢你(私はあなたのことが好きだ。)”のようなゼロ形態の場合、この態度や気持ちがいつまで持続できるかどうかに関しては関心を持たず、ただ単に主体が発話時点における態度と気持ちを相手に伝える。そのため、“V 着”より、状態動詞 2 のゼロ形態のほうがより相応しいと考えられる。

では、CCL で見つかった状態動詞 2 の“V 着”の実例の存在はどのように理解すれば良いのであろう。

---

<sup>20</sup> 町田健(2004:169)は「経済性とは、コトバのしくみは人間ができるだけ労力を使わなくて済むように、効率的に出来上がっているという性質のことを言う」と述べている。

状態動詞 2 は形容詞の特徴を持っているが、動詞として、時間の限定性も持っている。状態動詞 2 が表す状態が持続していることがわかるが、この状態がいつ始まったのか、いつ終わったのかを捉えることは難しい。そのため、仮定される時間軸上では状態動詞 2 が表す過程は始点と終点がない「線」と認識される。

中国語の「動相形式」“着”は認知主体がスキニングの動的な認知プロセスを行う窓口の認知視点である。状態動詞 2 の“V 着”の実例の存在は“着”という認知視点から状態動詞 2 の内部過程を捉えることができることを証明している。

状態動詞 2 の“V 着”の例を考察した結果、例文(3-26)～(3-29)が示すように、状態動詞 2 の“V 着”の前に、“深情地(感情深く)”、“死心塌地地(決心したらどんなことがあっても変えようとししない)”、“坚决地(決心に)”、“深深地(深く)”のような連用修飾節がよく用いられる。

CCL における“爱着”の例からランダムに 100 例を抽選して考察した結果、その中の 61 例に連用修飾節が出現する。また、“喜欢着”の 13 例の中の 11 例で“喜欢着”の前に、連用修飾節が出現する。

(3-26) a.他 深情地 爱着 这里的 一草一木，一山一水。(CCL)

(彼 ADV 愛する+Zhe この山、川、草、木 )

(彼はここの山、川、草、木など、すべてを深く愛している。)

b.?他深情地爱这里的一草一木，一山一水。

c.他爱这里的一草一木，一山一水。

(彼はここの山、川、草、木など、すべてを愛している。)

(3-27) a.她 死心塌地地 爱着 孤儿 出身、比她小几岁的 庆生。(CCL)

(彼女 ADV 愛する+Zhe 孤児 出身 彼女より何歳年下の PSN )

(彼女は自分より若くて、両親をなくした慶生を一途に愛している。)

b.?她死心塌地地爱孤儿出身、比她小几岁的庆生。

c.她 爱孤儿出身、比她小几岁的庆生。

(彼女は自分より若くて、両親をなくした慶生を愛している。)

(3-28) a.当地 孩子 朴素 而又 自然地 相信着 师长们 的 教诲。

(地元 子供 純粹 そして ADV 信じる+Zhe 先輩方 の 教え)

(地元の子供たちは純粹で先輩方の教えを疑わずに信じている。)

b.?当地孩子朴素而又自然地相信师长们的教诲。

(地元の子供たちは純朴で先輩方の教えを疑わずに信じている。)

c.当地孩子相信师长们的教诲。

(地元の子供たちは先輩方の教えを信じている。)

(3-29) a.叶雪清 学 的 是 西医， 却 深深地 喜欢着 中医。(=(3-13))

(PSN 習う の は 西洋医学 しかし ADV 好き+Zhe 漢方医学)

(葉雪清は西洋医学を習ったが、漢方医学のほうがけっこう好きだ。)

b.?叶雪清学的是西医，却深深地喜欢中医。

c.叶雪清学的是西医，却喜欢中医。

(葉雪清は西洋医学を習ったが、漢方医学のほうが好きだ。)

(3-26b)、(3-27b)、(3-28b)、(3-29b)が示すように、もし、(3-26a)、(3-27a)、(3-28a)、(3-29a)の“V 着”をそれぞれゼロ形態に置き換えると、文は非文になるか、不自然な文になる。また、(3-26c)、(3-27c)、(3-28c)、(3-29c)が示すように、連用修飾節と“着”を削除すると、文が自然になる。つまり、連用修飾節がある場合は、状態動詞2のゼロ形態より“V 着”のほうが自然である。

意味的には、例文(3-26a)、(3-27a)、(3-28a)、(3-29a)の“深情地(感情深く)”、“死心塌地地(決心したらどんなことがあっても変えようとしない)”、“自然地(疑わずに)”、“深深地(深く)”のような連用修飾節は“V 着”が表す持続している状態の特徴を描写する。つまり、持続している心理状態の特徴を描写する場合に、“V 着”はゼロ形態より自然である。

朱継征(2004:127)は「“V 起来”の前の様態描写の成分は述語構造の前に現れ、それを修飾・制限するものである。話者は時間的座標には注目せず、動作の展開過程に的を絞り、動作起動後の、被写体の様態を描写することによって、その起動相を捉えたわけである」と正しく指摘している。“V 起来”と同じように、状態動詞2の“V 着”の場合、“V 着”の前の連用修飾節は“V 着”を修飾・制限

すると理解できる。話者(認知主体)は時間的座標には注目せず、状態の展開過程に的を絞り、持続している心理状態を描写することによって、その持続的な状態を捉えている。

### 3.3.1.3 状態動詞 3

状態動詞 3 には、“觉得(と思う)”、“认为(と思う)”、“以为(と思う)”などが含まれる。

CCL で調べるかぎり、“觉得(と思う)”、“认为(と思う)”、“以为(と思う)”が“着”と共起できる例文は確認できない(閲覧日 2020 年 2 月 3 日)。王学群(2007:38)は「“觉得(と思う)”、“认为(と思う)”、“以为(と思う)”のような動詞は常に思惟活動の内容を表すためか、“V 着”を持っていない」と指摘している。しかしながら、思惟活動の内容を表すことが“着”と共起できない理由かどうかは再考する余地があると考えられる。例文(3-30)を見てみよう。

(3-30) a. 我 认为 他 是 个 好人。

(私 思う 彼 は 量詞 いい人)

(彼はいい人だと思う)。

b. 他是个好人。

(彼はいい人である。)

c. ?我 认为着 他 是 个 好人。

(私 思う+Zhe 彼 は 量詞 いい人)

例文(3-30b)が示すように、“我认为(私は～と思う)”を削除しても、「彼はいい人だ」という見方や判断が成立する。つまり、“我认为(私は～と思う)”はただ後続の見方と判断を導くと考えられる。また、“认为(と思う)”が導く内容の“他是个好人(彼はいい人だ)”は思惟活動より、認知主体の見方、判断、態度と認識したほうが相応しいと考えられる。

李玲(2014:9-11)は“觉得(と思う)”、“认为(と思う)”、“以为(と思う)”が主観の認識を表す動詞であると正しく論述している。“觉得(と思う)”が主観の認識を表す場合、「確信度が低い」という意味特徴を持つ。そのため、“觉得(と思

う)”が用いられると、談話中の対立や矛盾がある程度避けられ、認知主体の見方を相手が受け取りやすくなる。“认为(と思う)”が表す見方と判断は分析や理解することを通じて、確信を抱くものである。認知主体の見方を相手に強要するニュアンスも含意されている。“以为(と思う)”はただ単に認知主体の個人的な見方を表す。また、例文(3-31)が示すように、事実と相反している認識内容を表す場合に、“以为(と思う)”がよく用いられる。(3-31)では、“以为(と思う)”の認識内容「私はもう彼女に会えない」と相反している「翌日彼女は北海公園に現れた」という事実はよく認識内容に後続する。

(3-31) 我 以为 再 也 见不到 她 了， 没 想到 第 2 天 她又 出现 在 了 北海公园。(CCL)

(私 思う 二度と ADV 合えない 彼女 LE NEG 思いつく 翌日彼女  
また 出現する 介詞 Le 地名)

(私はもう彼女に会えないと思ったが、翌日彼女は北海公園に現れた。)

李玲(2014:9-11)の研究を踏まえ、本論文は“觉得(と思う)”、“认为(と思う)”、“以为(と思う)”は認知主体の見方、判断、態度を導く意味を持っていると考える。では、なぜこれらの動詞は“着”と共起できないのであろう。

“觉得(と思う)”、“认为(と思う)”、“以为(と思う)”の語の構成を見てみよう。“觉得(と思う)”は“觉”と“得”、“认为(と思う)”は“认”と“为”、“以为(と思う)”は“以”と“为”である。孙英杰(2006:65)は“得”を複合動詞の結果補語として扱うことができると述べている。3つの動詞は動詞の“觉(感じる)”、“认(見分ける)”、“以(とする)”と結果補語の“得”、“为”を組み合わせた複合動詞として扱うことができると考えられる。

戴耀晶(1991:96)は“着”は動作結果を表す語と共起できないと述べている。“觉得(と思う)”、“认为(と思う)”、“以为(と思う)”は結果の意味を表す複合動詞であるため、“着”と共起できない。

また、複合動詞として、“觉得(と思う)”、“认为(と思う)”、“以为(と思う)”をスキヤニングの認知プロセスで認知すると、「点」としてしか捉えることがで

きない。これらの動詞が“着”と共起できないことは“着”が“線状視点”であることを証明している。

#### 3.3.1.4 状態動詞 4

状態動詞 4 には、“站(立つ)”、“坐(座る)”、“躺(横になる)”、“趴(うつ伏せになる)”などが含まれる。

CCL で調べるかぎり、状態動詞の“站(立つ)”、“坐(座る)”、“躺(横になる)”、“趴(うつ伏せになる)”は“着”と共起できることがわかった。意味的には、状態動詞の“站(立つ)”、“坐(座る)”、“躺(横になる)”、“趴(うつ伏せになる)”は主体の姿勢変化を表す。本論文は進行を表す形式“正在”と共起できないため、これらの動詞を状態動詞に分類する。

王学群(2007:21)は“坐(座る)”グループは瞬間的であり、動作・変化という 2 側面を持つ動詞グループであり、「付着」という共通の意味特徴を持っていると指摘している。荒川清秀(2015:109)は日本語のタツ、スワル…の動詞は変化や過程に重点を置く動詞であるが、中国語の“站(立つ)”類は変化や過程よりも状態(“站(立つ)”なら立ッテイルという状態)を表すのがその基本的な意味であると指摘している。確かに、われわれの認知では、一般的に、“坐(座る)”グループが表す「腰掛ける」、「立ち上がる」の動作が瞬間的で、これらの動作が終わってからの状態は仮定される時間軸に長い幅を持っていると認識される。もしスキミングの認知プロセスで“坐(座る)”グループが表す内部過程を認知すれば、下記の図のようになる。

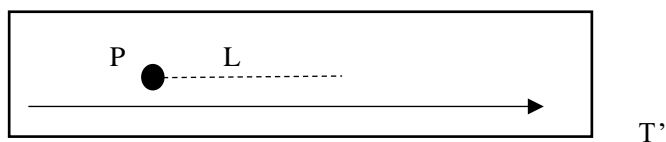


図 3-2 “坐(座る)”グループの内部過程

実線の矢印 T'は仮定される時間軸を示す。四角の枠の中は動詞に関わる全体の事態(動作・作用が始まる前の状態から終わった後の状態まで)を表す。点 P は

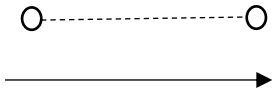
“坐(座る)”グループが表す瞬間的な動作を表す。線 L は瞬間的な動作が終わってからの状態を表す<sup>21</sup>。

図 3-2 が示すように、“坐(座る)”グループの内部過程は瞬間的な動作とその動作が終わってからの状態を示す。本論文は王学群(2007:21)と荒川清秀(2015:109)を参考に、“坐(座る)”グループを「瞬間後動詞」と呼ぶ。

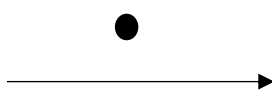
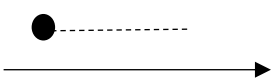
王学群(2007:21)は“坐(座る)”グループの“V 着”は変化の結果の継続を常に表していると指摘している。つまり、認知主体は“着”という認知視点から図 3-2 の“L”の部分を知覚できると考えられる。この意味は、“坐(座る)”グループと“着”がよく共起できることは“着”の“線状視点”を証明している。

以上述べてきたことから、それぞれの状態動詞を考察した結果として、各種類の内部過程が仮定される時間軸上に表示される図と“着”と共起関係を下記のようにまとめる。

表 6 本論文における状態動詞の各種類の内部過程と“着”との共起関係

種類	例	内部過程が表示される図	“着”との共起関係
状態動詞 1	等于(等しい)、称(呼ぶ)、号称(誇称する)、姓(…を苗字とする)、像(似ている)、属于(属する)	仮定される時間軸上に表示できない	×
状態動詞 2	爱(愛する)、相信(信じる)、喜欢(好きだ)、高兴(嬉しい)、希望(希望する)、恨(うらむ)、悲伤(悲しむ)、尊重(尊重する)、感谢(感謝する)、失望(がっかりする)		◎

<sup>21</sup> 本章の図では、動作を実線で示す、動作が終わった後の状態を破線で示す。捉えられない始点、終点を白丸“○”で示す。捉える始点、終点を黒丸“●”で示す。

状態動 詞 3	觉得(と思う)、认为(と思う)、 以为(と思う)		×
状態動 詞 4	站(立つ)、坐(座る)、躺(横にな る)、趴(うつ伏せになる)		◎

### 3.3.2 活動動詞と“着”との共起関係

前節では、孙英杰(2006)の動詞分類を踏まえ、状態動詞を再分類し、各種類の状態動詞と“着”の共起関係を考察した。

孙英杰(2006:52)は“说(話す)”、“写(書く)”、“敲(叩く)”、“喝(飲む)”、“考虑(考える)”のように、「+動態」と「-結果」の意味特徴を持っている動詞を活動動詞と定義している。本節は孙英杰(2006:52)をもとに、活動動詞を考察し、活動動詞と“着”の共起関係を分析した上で、“着”の本質に関する仮説の妥当性を検証する。

まず、孙英杰(2006:52)を参考に、活動動詞を下記のように分類し、それぞれを考察する。

活動動詞 1: 吃(食べる)、说(言う)、喝(飲む)、跑(走る)、炒(いためる)

活動動詞 2: 写(書く)、画(描く)、盖(建てる)、穿(着る)、戴(被る)、  
挂(かける)、摆(並べる)、贴(貼る)

活動動詞 3: 敲(叩く)、爆炸(爆発する)、闪(煌めく)

活動動詞 4: 思考(考える)、考虑(考える)、想(考える)

次節では、活動動詞の各種類が“着”との共起関係をそれぞれ考察する。

#### 3.3.2.1 活動動詞 1

活動動詞 1 には、“吃(食べる)”、“说(言う)”、“喝(飲む)”、“跑(走る)”、“切(切る)”、“炒(いためる)”などが含まれる。

CCL で調べるかぎり、これらの動詞が“着”と共起できる。これらの動詞は典型的な活動動詞で、「+動態」の意味特徴が際立っている。また、動作の始点、持

続している過程、終点もはっきり捉えられる。仮定される時間軸上に、これらの動詞の内部過程を表示すると、下記の図のようになる。

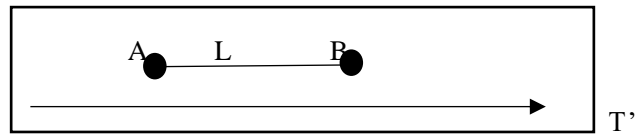


図 3-3 “吃(食べる)”グループの内部過程

図 3-3 における実線の矢印 T'と四角の枠が示す内容は図 3-2 と同様である。点 A、B は動作の始点と終点を表す。L は持続している過程を表す。

王学群(2007:17)はこれらのグループの“V 着”は動作の継続のみを表すと指摘している。つまり、認知主体が“着”という認知視点からこれらの動詞の内部過程を考察すれば、図 3-3 の点 A と点 B の間の部分を捉えていると考えられる。

### 3.3.2.2 活動動詞 2

活動動詞 2 には、“写(書く)”、“画(描く)”、“盖(建てる)”、“穿(着る)”、“戴(被る)”、“挂(かける)”、“摆(並べる)”、“贴(貼る)”などが含まれる。

荒川清秀(2015)によると、“着”との相性が一番いい動詞は活動動詞 2 である。意味的には、これらの動詞はある動作を行うことによって、あるものをある場所に付着させる意味が含意されている。朱徳熙(1990:11)は活動動詞 2 の共通の意味特徴を「付着」としている。つまり、この動作が終わっても、必ずあるものがどこかに付着している。このグループの中で、“写(書く)”、“画(描く)”、“盖(建てる)”はある動作を行うことによって、あるものが産出されて、ある場所に付着している意味を表す。“穿(着る)”、“戴(被る)”、“挂(かける)”、“摆(並べる)”、“贴(貼る)”はただ単に、すでに存在しているものをある場所に付着させる意味を表す。

“写(書く)”、“画(描く)”、“盖(建てる)”であっても、“穿(着る)”、“戴(被る)”、“挂(かける)”、“摆(並べる)”、“贴(貼る)”であっても、これらの動詞の内部過程の始点、終点、持続している過程ははっきり捉えられる。仮定さ

れる時間軸上に、これらの動詞の内部過程を表示すると、下記の図のようになる。

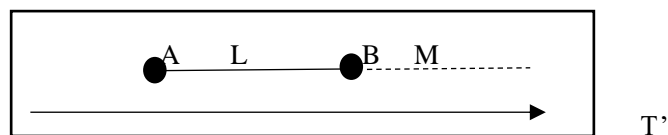


図 3-4 “写(書く)”グループの内部過程

実線の矢印 T’、四角の枠、点 A、B が示す内容は図 3-3 と同様である。L は「書いている」過程を表す。破線 M が表すのは動作が終わって、産出されたものがある場所に付着している状態を表す。

“写(書く)”グループの“V 着”例文を見てみよう。

- (3-32) 他 在 黑板上 一笔一画地 写着 自己 的 名字。  
 (彼 介詞 黑板の上に ADV 書く+Zhe 自分 の 名前)  
 (彼は黑板に自分の名前をきちんと書いている。)

- (3-33) 黑板 上 写着 他 的 名字。  
 (黑板 上 書く+Zhe 彼 の 名前)  
 (黑板に彼の名前が書いてある。)

例文(3-32)では、“写着”は認知主体が「書く」動作を行っていることを示す。例文(3-33)の“写着”は「書く」動作がもう終わって、名前が黑板に書いてある状態を示している。つまり、認知主体が“着”という認知視点から“写(書く)”グループの内部過程を捉えたのは図 3-4 の線 L と線 M であると考えられる。

### 3.3.2.3 活動動詞 3

活動動詞 3 には、“敲(叩く)”、“爆炸(爆発する)”、“閃(煌めく)”などが含まれる。

左思民(2009:74)は“敲(叩く)”、“爆炸(爆発する)”、“閃(煌めく)”のような動詞は、それらが表す動作・作用が行われる時間の幅が短すぎるため、「瞬間活動動詞」と呼んでいる。

これらの動詞の内部過程は仮定される時間軸上においては「点」で表示できる。しかし、2.5.2 節で説明した通り、例文(3-34)、(3-35)が示すように、動作主が瞬間的行為を反復して行う場合、もしくは複数の主体が、それぞれ瞬間的な事象を発生させ、それらが時間的に連続発生する場合には、一つの連続した持続的プロセスとして認知できる。

(3-34) 樓上 的 小朋友 在 不停地 敲着 地板。(=(2-23))

(階上 の 子供 Zai ADV 叩く+Zhe 床。)

(上に住んでいる子供はずっと床を叩きつづけている。)

(3-35) 手榴彈 一顆一顆地 爆炸着。(=(2-24))

(手榴彈 一発また一発 爆発する+ Zhe )

(手榴彈が一発また一発と爆発している。)

つまり、動作主が瞬間的行為を反復して行う場合、もしくは複数の主体が、それぞれ瞬間的な事象を発生させ、それらが時間的に連続発生する場合に、事態を仮定される時間軸上に表示すると、いくつかの「点」として捉えていた断続的な動作・変化から「線」になっている。この場合には、“敲(叩く)”、“爆炸(爆発する)”、“閃(煌めく)”は“着”と共起できる。

#### 3.3.2.4 活動動詞 4

活動動詞 4 には、“思考(思考する)”、“想<sub>2</sub>(考える)”、“考慮(考える)”、“反思(反省する)”、“猶豫<sub>2</sub>(考える)”などが含まれる。

CCL で調べるかぎり、心理状態を表す動詞より、“思考(思考する)”、“想<sub>2</sub>(考える)”、“考慮(考える)”、“反思(反省する)”、“猶豫<sub>2</sub>(考える)”のような動詞は“着”と共起できる。

(3-36) “嗯”，横渡 哼 了 一声，默默地 思考 起来。(CCL)

(うん PSN うなり声を出す Le 一声 ADV 考える 始める )

(横渡は「うん」と言った後、静かに考えはじめた。)

(3-37) 我 正 在 考虑 我 要不要 继续 读博。

(私正に Zai 考える 私 しようかどうか 続ける 博士後期に入る)

(私は博士後期過程を続けるかどうかを考えている。)

(3-38) 我 思考 过 这个 问题。

(私 考える Guo この 問題)

(この問題を考えたことがある。)

(3-39) 整天 考虑着 将会 怎样 结束自己的一生。(CCL)

(まる一日 考える+Zhe もうすぐ…する どうやって 人生を終わらせる)

(人生を終わらせる方法を一日中考えている。)

(3-40) 中共中央 认真 考虑 了 斯大林的建议。(CCL)

(CPC 中央委員会 真剣に 考える Le PSN の提案 )

(CPC 中央委員会は、スターリンの提案を真剣に検討しました。)

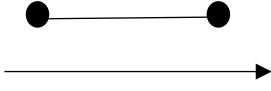
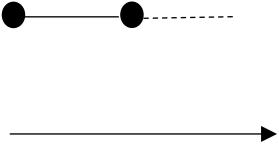
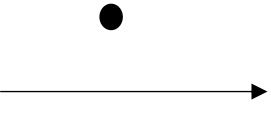
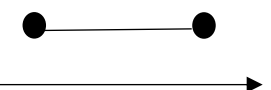
例文(3-36)～(3-40)が示すように、活動動詞 4 は「動相形式」の“起来”、“正在”、“着”、“了”、“过”と共起できる。前の 3 種類の活動動詞と比べれば、活動動詞 4 が表す動作の動態ははっきり捉えられないが、“正在”と共起できるため、これらの動詞を活動動詞に分類する。

活動動詞 4 が表すのは頭の中の思考作用であるが、主体はこの活動がいつから始まったか、いつ終わるか、持続しているかどうかをはっきり捉えることができると考えられる。つまり、仮定される時間軸上に状態動詞 4 の内部過程を表示すると、活動動詞の“吃(食べる)”と同じように、始点、持続している過程、終点が全て表示される図になる。この点に関して、王学群(2007:32)は活動動詞 4 が最も動作動詞に近い存在であると指摘している。

王学群(2007:39)は活動動詞 4 が“着”と共起し、思考活動の継続を表すと指摘している。つまり、“着”という認知視点から、活動動詞 4 の内部過程を考察し、捉えられたのは始点と終点の間の部分である。

以上述べてきたことから、それぞれの活動動詞を考察した結果、各種類の内部過程が仮定される時間軸上に表示される図と“着”と共起関係を下記のようにまとめる。

表 7 本論文における活動動詞の各種類の内部過程と“着”との共起関係

種類	例	内部過程が表示される図	“着”と共起関係
活動動詞 1	吃(食べる)、说(言う)、喝(飲む)、跑(走る)、炒(いためる)		◎
活動動詞 2	写(書く)、画(描く)、盖(建てる) 穿(着る)、戴(被る)、挂(かける)、摆(並べる)、贴(貼る)		◎
活動動詞 3	敲(叩く)、爆炸(爆発する)、閃(煌めく)		△ <sup>22</sup>
活動動詞 4	思考(考える)、考虑(考える)、想(考える)		◎

<sup>22</sup> 主体が複数の場合或いは動作が繰り返される場合、活動動詞 3 が“着”と共起できる。

### 3.3.3 結果動詞と“着”との共起関係

孫英杰(2006)は「結果」を表す“义素<sup>23</sup>”を持つ動詞を結果動詞と定義している。結果動詞の例として、“断(切れる)”、“裂(割れる)”、“破(破れる)”、“碎(碎ける)”、“倒(倒れる)”、“丢(なくす)”、“忘(忘れる)”、“死(死ぬ)”、“赢(勝つ)”、“输(負ける)”、“毕业(卒業する)”が挙げられている。

王学群(2007:24)はこれらの動詞を、ものの変化を表す変化動詞と分類している。郭锐(1993:416)はこれらの動詞の内部過程が「点構造動詞」であり、「点」として捉えられ、“着”と共起できないと指摘している。3.2 節で指摘したように、马庆株(1981)は「死」タイプ(“死(死ぬ)”、“熄(消える)”…)が“着”と共起できないため、「非継続動詞(Va)」に分類している。つまり、一般的に、仮定される時間軸上に結果動詞の内部過程を捉えたと、「点」しか捉えられず、“着”と共起できないと認知されている。

しかし、CCL と BCC<sup>24</sup>で調べた結果、これらの動詞の中に、下記の(3-41)～(3-43)が示すように、“着”と共起できる動詞も存在している。

- (3-41) 在 老街 一社区办事处门口 死着 3 个人 1 名 妇女, 2 名 男子。(=(3-10))  
(介詞 古い町 ある団地事務所の前 死ぬ+Zhe 3 人 1 人 女 2 人 男 )  
(古い町の団地事務所の前で、3 人が死んでいる。女 1 人、男 2 人。)

- (3-42) 小侯 返身 回 营 时, 看见 皑皑白雪堆里 倒着  
一位 年逾 8 旬的老人。(=(3-11))  
(PSN 戻る キャンプ地 時 見える 真っ白な雪だまりの中 倒れる+Zhe  
一位 80 代の老人 )  
(侯ちゃんがキャンプ地に戻った時、80 代の老人が真っ白な雪だまりの中に倒れているのが見えた。)

---

<sup>23</sup> “义素”は“語彙成分”とも呼ばれる。たとえば“哥哥(兄さん)”の“語彙成分”に、“同胞(同じ父母をもつ)”、“男性(男性)”、“年长(年上)”がある。

<sup>24</sup> 結果動詞と完成動詞が“着”と共起する例文がすくない。データの確率を確かめるために、CCL と BCC の 2 つのコーパスで例文を考察するようにした。

- (3-43) 门外过道上 丢着 一 只 沾满血迹的 花布拖鞋。(CCL)  
 (外の廊下 捨てる+Zhe 一 量詞 ADJ 色とりどりのスリッパ)  
 (外の廊下に血まみれの色とりどりのスリッパが捨てられている。)

本節は“着”と共起できる例が存在するかどうかを基準にして孫英杰(2006)における結果動詞を下記のように分類し、結果動詞と“着”が共起できる“反例”を考察し、中国語の「動相形式」“着”の本質が「線状視点」であるという考え方の妥当性を検証する。

結果動詞 1: “死(死ぬ)”、“倒(倒れる)”、“丢(なくす)”

“裂(割れる)”

結果動詞 2: “忘(忘れる)”、“赢(勝つ)”、“输(負ける)”

“毕业(卒業する)”

CCL と BCC で調べるかぎり、“倒(倒れる)”、“死(死ぬ)”、“丢(なくす)”の動詞は“着”と共起できる例文が確認できた。“赢(勝つ)”、“输(負ける)”、“毕业(卒業する)”のような結果動詞は“着”と共起する例文が確認できない(閲覧日:2020 年 2 月 3 日)。

一般的に、“死(死ぬ)”と“倒(倒れる)”の変化は瞬間的であり、それらの変化を捉えることができないと認知している。例文(3-41)では、「主体が死ぬ」という瞬間的な変化が捉えられないが、この変化の結果がずっと継続し、捉えられることができる。例文(3-41)と同様、例文(3-42)、(3-43)では、「主体が倒れる」、「主体が捨てられる」という瞬間的な変化が捉えられにくい、倒れた結果と捨てられた結果が継続していることが捉えられる。つまり、これらの結果動詞が表す意味は結果の意味だけではなく、結果が継続している状態の意味も捉えることができると考えられる。もし、“倒(倒れる)”、“死(死ぬ)”、“丢(なくす)”、“断(切れる)”、“裂(割れる)”の内部過程を仮定される時間軸上に表すと、下記の図のようになる。

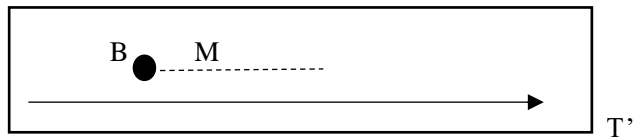


図 3-5 “倒(倒れる)”グループの内部過程

実線の矢印 T'、四角の枠、点 B が示す内容は図 3-4 と同様である。破線 M が表すのは変化が終わって、変化の結果が継続している状態を表す。

これらの動詞の内部過程は 3.3.1 節の状態動詞 4 の“坐(座る)”グループと同じであり、瞬間後状態動詞とも呼ばれる。しかし、“坐(座る)”グループと異なり、“倒(倒れる)”、“死(死ぬ)”、“丟(なくす)”が表す「状態義」は「結果義」よりずっと弱い。理由としては、“倒(倒れる)”、“死(死ぬ)”、“丟(なくす)”は“推倒(押し倒す)”、“打死(打ち殺す)”、“弄丟(なくす)”のように、活動動詞の後に後続して、結果補語として用いられるが、“坐(座る)”グループは結果補語として使うことができないためである。

また、結果動詞 1 が表す変化が起きて、変化の主体或いは変化によって出産されたものがその変化によって、どこかに存在していることが捉えられる。つまり、結果動詞 1 が表す意味に「付着」の意味も含意されている。そして、結果動詞 1 が“着”と共起して存在構文“L+V 着+NP”によく使われている。その一方で、結果動詞 2 は結果動詞 1 と異なり、変化が発生しても、その変化の結果の具体的な表現形式が捉えられないため、結果が継続している状態を表すことができないと考えられる。そのため、仮定される時間軸上に、“贏(勝つ)”、“輸(負ける)”、“毕业(卒業する)”を表示すれば、「点」でしか捉えられないと考えられる。

以上述べてきたことから、結果動詞の 2 種類を考察した結果、各種類の内部過程が仮定される時間軸上に表示される図と“着”と共起関係は下記のようにまとめられる。

表 8 本論文における結果動詞の各種類の内部過程と“着”との共起関係

種類	例	内部過程が表示される図	“着”との共起関係
結果動詞 1	“死(死ぬ)”、“倒(倒れる)”、“丢(なくす)”		◎
結果動詞 2	“忘(忘れる)”、“赢(勝つ)”、“输(負ける)”、“毕业(卒業する)”		×

### 3.3.4 完成動詞と“着”との共起関係

孙英杰(2006:65)は前節の状態動詞、活動動詞、結果動詞を中国語の動詞の基本動詞として扱い、“打败(負かす)”、“拿来(取ってくる)”、“听到(聞こえる)”、“抓住(捕まえる)”のような結果複合動詞<sup>25</sup>を完成動詞と呼んでいる。前項動詞は動作或いは原因を表し、後項動詞は結果を表す補語として扱われる。また、後項動詞の種類により、完成動詞を“V+結果補語”、“V+方向補語”、“V+到”、“V+住/中/掉”の4種類に分類している。

陶振伟(2005:92)は“到”の意味のプロトタイプが「到達する」という意味であり、メタファーの意味拡張により、動詞に後続され、結果を表す補語として使われることもできると指摘している。北京大学中国語言文学系現代漢語教研室(2004:298)は動語の表す動作行為の結果を表すものを結果補語と定義し、“住”、“掉”、“见”、“死”、“倒”、“丢”などを取り上げ。つまり、孙英杰(2006:65)に取り上げられた“到”、“住”、“中”、“掉”は動詞に後続され、結果補語として扱うことができる。本論文は孙英杰(2006:65)の分類をもとに、完成動詞を下記のように分類する。

<sup>25</sup> 孙英杰(2006:65)は「結果複合動詞が2つの動詞に構成されている。前項動詞は動作と原因を表す活動動詞であり、後項動詞は結果を表す補語として扱われる」と指摘した。

完成動詞 1: 打败(負かす)、打死(打ち殺す)、哭湿(涙で濡れる)、  
压倒(圧倒する)、看到(見える)、收到(受け取る)、  
抓住(捕まえる)、吃掉(食べてしまう)、卖掉(売ってしまう)、  
看中(気に入る)、猜中(当てる)

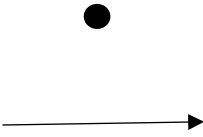
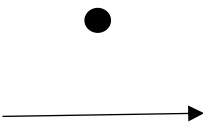
完成動詞 2: 拿出(出す)、请来(誘ってきてもらう)、  
拖下去(引っ張っていく)、放上带过来(連れてくる)

CCL と BCC で調べた限りでは、完成動詞 1 と完成動詞 2 は両者とも“着”と共起できる例文はなかった(閲覧日:2020 年 2 月 3 日)。

完成動詞 1 の構成は「V＋結果補語」である。前項動詞は動作或いは原因を表し、後項動詞は結果を表す結果補語である。朱繼征(2000:23)は“V＋結果補語”を「結果相」の文法形式と考え、「結果相」は時間の幅がないため、「点」の形で表すことができると説明している。つまり、仮定される時間軸上に完成動詞 1 の内部過程を表示すると、「点」である。完成動詞 2 の構成は「V＋方向補語」である。沈家煊(1995:372)は「V＋結果補語」構造や「V＋方向補語」構造も完結の意味を持ち、“V 了”と同様に、内在的で自発的な終了点を持つと指摘している。「V＋結果補語」と「V＋方向補語」の内部過程を仮定される時間軸上に捉えるなら「点」でしか捉えられないと考える。

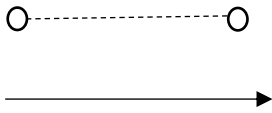

以上述べてきたことから、完成動詞の 2 種類を考察した結果、各種類の内部過程が仮定される時間軸上に表示される図と“着”と共起関係を下記のようにまとめる。

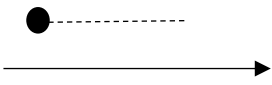
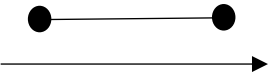
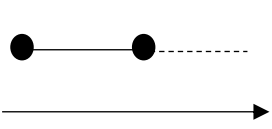

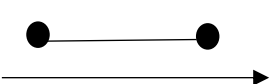
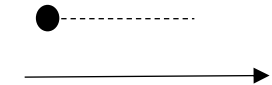

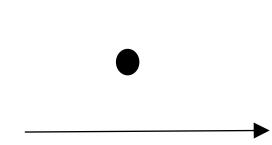
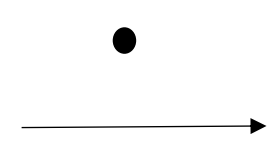
表 9 本論文における完成動詞の各種類の内部過程と“着”との共起関係

種類	例	内部過程が表示される図	“着”との共起関係
完 成 動 詞 1	打败(負かす)、打死(打ち殺す)、哭湿(涙で濡れる)、看到(見える)、抓住(捕まえる)、拦住(さえぎってとめる)、吃掉(食べてしまう)、猜中(当てる)		×
完 成 動 詞 2	拿出(出す)、请来(誘ってきてもらう)、拖下去(引っ張っていく)、带过来(連れてくる)		×

本節は孙英杰(2006)の動詞分類をもとに、各種類の動詞と“着”との共起関係、各種類の動詞の内部過程が仮定される時間軸上に表示される図を考察した。結果を下記の表のように整理している。

表 10 本論文による動詞の各種類の内部過程と“着”との共起関係

種類	例	内部過程が表示される図	“着”との共起関係
状態動 詞 1	等于(等しい)、称(呼ぶ)、号称(誇称する)、姓(...を苗字とする)、像(似ている)、属于(属する)	仮定される時間軸上に表示できない	×
状態動 詞 2	爱(愛する)、相信(信じる)、喜欢(好きだ)、高兴(嬉しい)、尊重(尊重する)、感谢(感謝する)、犹豫 <sub>1</sub> (迷う)		◎
状態動 詞 3	觉得(と思う)、认为(と思う)、以为(と思う)		×

状態動 詞 4	站(立つ)、坐(座る)、躺(横になる)、 趴(うつ伏せになる)		◎
活動動 詞 1	吃(食べる)、说(言う)、喝(飲む)、跑 (走る)、炒(いためる)		◎
活動動 詞 2	写(書く)、画(描く)、盖(建てる)、穿 (着る)、戴(被る)、挂(かける)、摆(並 べる)、贴(貼る)		◎
活動動 詞 3	敲(叩く)、爆炸(爆発する)、閃(煌め く)		$\Delta^{26}$
活動動 詞 4	思考(考える)、考虑(考える)、想(思 う)、犹豫 <sub>2</sub> (考える)		◎
結果動 詞 1	死(死ぬ)、倒(倒れる)、丢(なくす)		◎
結果動 詞 2	赢(勝つ)、输(負ける)、毕业(卒業す る)		×
完成動 詞 1	看到(見える)、打败(負かす)、打死 (打ち殺す)、抓住(捕まえる)、吃掉 (食べてしまう)、猜中(当てる)		×
完成動 詞 2	拿出(出す)、请来(誘ってきてもら う)、拖下去(引っ張っていく)、带过 来(連れてくる)		×

### 3.3.5 動詞と“着”との共起関係から見る“着”と“V着”の本質

前節で各種類の動詞と“着”との共起関係と、各種類の動詞の内部過程が仮定される時間軸上に表示される図を考察した。表 10 を参考にし、下記の結論を導くことができる。

<sup>26</sup> 主体が複数の場合或いは、動作が繰り返される場合では、活動動詞 3 が“着”と共起できる。

① “着”と共起できない動詞は状態動詞 1(“姓(…を苗字とする)”)、状態動詞 3(“认为(と思う)”)、結果動詞 2(“毕业(卒業する)”)、完成動詞 1(“看到(見える)”)、完成動詞 2(“拿出(出す)”)である。

② “着”と共起できる動詞は状態動詞 2(“爱(愛する)”)、状態動詞 4(“坐(座る)”)、活動動詞 1(“吃(食べる)”)、活動動詞 2(“写(書く)”、“穿(着る)”)、活動動詞 3(“敲(叩く)”、“爆炸(爆発する)”)、活動動詞 4(“思考(考える)”)である。

③ “着”と共起できない動詞の内部過程を仮定される時間軸上に表示すると、「点」でしか表示できない、或いは仮定される時間軸上に表示できない。

④ 活動動詞 3 の内部過程は仮定される時間軸上に「点」でしか表示できないが、主体が複数の場合或いは、動作が繰り返される場合、いくつかの「点」から「線」になり、“着”と共起できるようになる。

⑤ “着”と共起できる動詞の内部過程を仮定される時間軸上に表示すると、「線」である。

前章で“着”の本質が「線状視点」であり、“V 着”は「線状過程」を表すと仮定している。具体的に言えば、われわれはスキニングの認知プロセスで“着”の窓口のような「線状視点」から事態を知覚している。つまり、認知主体は動作・変化のような事態を捉える際に、「線」のような形の「認知視点」から事態を捉える。

本節は仮定される時間軸上に「線」として表示できる動詞が“着”と共起できるという結論を導くことができた。特に、活動動詞 2(“写(書く)”、“穿(着る)”)は動作を表す「線」と動作が終わってからの状態を表す「線」の両方とも捕らえられるため、“着”とよく共起できる。さらに、「点」で表示される内部過程は主体が複数の場合或いは、動作が繰り返される場合、「線」として捉えられ、動詞が“着”と共起できるようになる。つまり、内部過程が「線」の場合、“着”と共起できる。これらの事実“着”という認知視点が「線状視点」であり、“着”という認知視点から捉えた“V 着”が「線状過程」であることを示していると考えられる。

### 3.4 まとめ

本章は孫英杰(2006)の動詞分類を検討しながら、状態動詞、活動動詞、結果動詞、完成動詞の4種類をそれぞれ考察した上で、各種類の動詞と“着”との共起関係を考察した。考察と分析の結果、次のような成果が得られた。

第一に、仮定される時間軸上において内部過程を「線」と捉える動詞のみが“着”と共起できる。

第二に、“着”と共起できない動詞の内部過程を仮定される時間軸上に表示すると、「点」でしか表示できない、或いは仮定される時間軸上に表示できない。

第三に、内部過程が仮定される時間軸上に「点」で表す動詞は、主体が複数の場合或いは、動作が繰り返される場合、いくつかの「点」から「線」になり、“着”と共起できるようになる。

第四に、各種類の動詞と“着”との共起関係から“着”という認知視点が「線状視点」であることが確認できた。“着”の「線状視点」から捉えた“V着”が「線状過程」を表すこともわかった。

次章は“L+V 着/了+NP”における“着”と“了”の違いから中国語の「動相形式」“着”の本質が「線状視点」であるという考え方の妥当性を検証する。

## 第4章 “V 着”と“V 了”の違いから見る“着”の「線状視点」

存在構文“L+V 着/了+NP”において、“着”と“了”は、置き換えても同様の意味を表す場合もあるが、置き換えられない場合も存在する。本章は存在構文“L+V 着/了+NP”における“着”、“了”と共起する動詞や文中の連用修飾語などの構文環境の違いから“着”と“了”の違いを明らかにする。また、“着”と“了”の違いから、中国語の「動相形式」“着”の本質が「線状視点」であるという考え方の妥当性を検証する。

### 4.1 はじめに

中国語の「動相形式」“着”は“V 着”の形で、“L+V 着+NP”<sup>27</sup>という存在構文によく使われている。前章では、動詞分類の立場から各種類の動詞の内部過程と“着”との共起関係を分析し、中国語の「動相形式」“着”の本質が「線状視点」であるという考え方の妥当性を検証した。前章の分析によれば、“挖(掘る)”という動詞の内部過程は「線」で示すことができる活動動詞である。そのため、“挖(掘る)”は“着”と共起できるはずである。しかしながら、存在構文“L+V 着+NP”の場合、“挖(掘る)”が“着”と共起できない。つまり、構文の意味は“V 着”の使用を制約している。

また、下記のような例文(4-1)～(4-5)が示すように、存在構文“L+V 着+NP”において、“着”と“了”は、置き換えても同様の意味を表す場合もあるが、置き換えられない場合も存在する。

(4-1) a. 大门 两旁 贴着 一 幅 对联。

(大门 両側 貼る+Zhe 一 量詞 対聯)

(大門の両側には対聯が貼ってある。)

---

<sup>27</sup> 本論文では、“L”、“V”、“NP”はそれぞれ場所名詞、動詞、名詞フレーズを示す。

b. 大门 两旁 贴了 一 幅 对联。

(大门 両側 貼る+Le 一 量詞 対聯)

(大門の両側には対聯が貼ってある。)

(4-2) a. 世界海洋 生存着 20 万 种 生物。

(世界海洋 生存する+Zhe 20 万 種類 生物)

(世界海洋には 20 万種類の生物が生存している。)

b.\*世界海洋 生存了 20 万 种 生物。

(世界海洋 生存する+Le 20 万 種類 生物)

(4-3) a. 天上 飞着 一只老鹰。

(大空に 飛ぶ+Zhe 一 量詞 鷹)

(一羽の鷹が大空を飛んでいる。)

b.\*天上 飞了 一只老鹰。

(大空に 飛ぶ+Le 1 量詞 鷹)

(4-4) a.\*门前 挖着 一条沟。

(門の前 掘る+Zhe 1 量詞 溝)

b. 门前 挖了 一条沟。

(門の前 掘る+Le 1 量詞 溝)

(門の前には溝が掘ってある。)

(4-5) a. 大门 两旁 一直 贴着 一幅对联。

(大門 両側 ずっと 貼る+Zhe 1 量詞 対聯)

(大門の両側にはずっと対聯が貼ってある。)

b.\*大门 两旁 一直 贴了 一幅 对联。

(大門 両側 ずっと 貼る+Le 1 量詞 対聯)

例(4-1)では、動詞の“貼(貼る)”は“着”、“了”のどちらとも共起でき、場所の「大門の両側」に“对联(対聯)”が存在している状態を表す。つまり、この

場合では、“L+V 着+NP”と“L+V 了+NP”が置き換えても、同様の意味を表す。しかしながら、例文(4-2)、(4-3)が示すように、動詞が“生存(生存する)”、“飞(飛ぶ)”である場合、例文(4-2a)、(4-3a)の“着”は(4-2b)、(4-3b)の“了”に置き換えられない。また、例文(4-4)が示すように、動詞が“挖(掘る)”である場合、“了”を“着”に置き換えられない。つまり、存在構文“L+V 着+NP”における“着”、“了”と共起できる動詞はそれぞれ特徴が異なる。

また、例文(4-5)が示すように、連用修飾語の“一直(ずっと)”がある場合、例文(4-1)と同じ動詞の“貼(貼る)”であっても、“着”しか使えない。

本章は存在構文“L+V 着/了+NP”文における動詞の語彙的意味、存在構文“L+V 着/了+NP”の「存在義」および“V 着”と“V 了”の機能から“着”と“了”の違いを見る。また、文中の連用修飾語などの構文環境の違いから“着”と“了”の違いを考察する。このように、存在構文“L+V 着/了+NP”文における“着”と“了”の違いから中国語の「動相形式」“着”の本質が「線状視点」であるという考え方の妥当性を検証する。

## 4.2 本章で取り上げる存在構文

存在文には、いろいろなタイプの存在構文がある。本章の研究対象の“L+V 着/了+NP”はその一つである。本節ではまず存在文の定義、種類を検討する。また、本章の研究対象は存在文の一種である存在構文“L+V 着/了+NP”を定める。その上で、存在構文“L+V 着/了+NP”の意味を確認する。

范方莲(1963)は形態上、存在文は「場所+動詞構造+数量名詞構造」という3部分によって構成されると規定し、また「場所」、「動詞構造」、「数量名詞構造」をそれぞれA、B、Cの3段にわけて考察を行い、B段の動詞構造には、①“V 着”、②“V 了”、③“着”と“了”がつかない動詞、という3つの形式があると指摘している。王勇・徐杰(2010)は存在文とは場所要素、存在述語と存在主体から構成されると指摘し、尹美蓮(2013)は存在文とは存在場所、存在方式、存在主体の3要素から構成されると指摘している。「動詞構造」は存在方式を表し、「数量名詞構造」は存在主体を表す。

宋玉柱(1988)、朱繼征(2000)、范晓(2010)、王勇・徐杰(2010)、尹美蓮(2013)は意味的に「ある場所にある事物或いは人物が存在する」の意味を表す文を「存在

文」と定義する。また、王勇・徐杰(2010)では、存在文は場所要素、存在述語と存在主体という 3 つの意味要素から組み合わせた構文であると指摘されている。

本章では、宋玉柱(1988)、朱繼征(2000)、范晓(2010)、王勇・徐杰(2010)、尹美蓮(2013)に従い、意味的に、ある場所にある人物あるいは事物が存在することを表す文を存在文と定義する。

存在文の種類について、宋玉柱(1995)は次の表 11 のように、存在文を「静態存在文」と「動態存在文」に分類している。また、宋玉柱(1995)は「静態存在文」を“有”構文、“是”構文、“着”構文、“了”構文、経験相存在文、数量名述語存在文、名詞述語存在文に分け、「動態存在文」を進行相動態存在文と完了相動態存在文に分類している。

表 11 宋玉柱(1995)における存在文の分類

存在文	静態存在文	“有”構文：门口有一个人。(入り口にひとが一人いる)
		“是”構文：窗前是个花园。(窓の前はガーデンである。)
		“着”構文：墙上贴着一张画。(壁には一枚の絵が貼ってある。)
		“了”構文：船上点了一盏灯。(船にはあかりがついている。)
		経験相存在文：窗上贴过几张剪纸。(窓に何枚かの切り紙が貼ってあったことがある。)
		数量名述語存在文：地上一片血迹。(地面に一面の血痕がある。)
		名詞述語存在文：满地垃圾。(地面はごみだらけである。)
	動態存在文	進行相動態存在文：天上飞着一只鸟。(空を一羽の鳥が飛んでいる。)
	完了相動態存在文	完了相動態存在文：门前挖了一道沟。(門の前に溝が掘ってある。)

宋玉柱(1995)は存在文を分類し、詳細に論じた研究として大変意義深く、存在文に対する理解を深めることに大きく貢献した。

范晓(2010:59)は宋玉柱(1995)を踏まえ、存在文を単純存在文<sup>28</sup>、断定存在文<sup>29</sup>、状態存在文<sup>30</sup>に分けている。尹美蓮(2013)は范晓(2010:59)と宋玉柱(1995)を参考に存在文の種類を下記の表のように整理している。

表 12 尹美蓮(2013)における存在文の分類

存在文	静态存在文	“有”構文：墙上（挂）有一幅画。（壁に一枚の絵がある。）
		“是”構文：学校前面是游泳馆。（学校の前は水泳館である。）
		無動存在文：满地纸屑。（地面は紙くずだらけである。）
		“着”構文：门前放着一个大石头。（門の前に大きい石が置いてある。）
		“了”構文：桌上的书架上则摆了一些小说等。（テーブルの上の本棚に小説などが置いてある。）
		經驗相存在文：屋子里放过一个钢琴。（部屋の中にピアノが置いてあった。）
	動態存在文	進行相動態“着”存在文：湖里面飘荡着落叶。（湖の上に落葉が漂っている。）

本章で取り上げるのは存在文の1種である存在構文“L+V 着/了+NP”である。存在構文“L+V 着/了+NP”は尹美蓮(2013)が述べている静态存在文の“着”構文および“了”構文、動態存在文の進行相動態“着”存在文を含んでいる。范方蓮(1963)が述べている「場所+V 着+数量名構造」と「場所+V 了+数量名構造」と同様なものである(便宜上、本論文では、存在構文“L+V 着/了+NP”で表記する)。

<sup>28</sup> 范晓(2010:59)は単純存在文が“有”存在文、“存在”動詞存在文、無動存在文を指すと述べている。

<sup>29</sup> 范晓(2010:59)は断定存在文が“是”存在文を指すと述べている。

<sup>30</sup> 范晓(2010:59)は状態存在文が“V 着”存在文、“V 了”存在文、“V 有”存在文、“V(着)”存在文、“V 满”存在文を指すと述べている。

村尾治彦(2013:209)によると、構文は意味と形式が対となった記号である。存在構文“L+V 着/了+NP”という構文形式の意味は「ある場所にある事物或いは人物が存在する」ということである。本論文はこれを「存在義」と呼ぶことにする。つまり、存在構文“L+V 着/了+NP”の構文意味は「存在義」である。存在構文“L+V 着/了+NP”では、“L”は「存在場所」を表し、「NP」は「存在主体」を表す。では、「存在述語」の“V 着”、“V 了”の意味は構文の「存在義」とどのように関連しているのか。楊明(2009:114)によると、ある一定の統語パターンに結びつく抽象的な構文の意味と動詞の具体的な意味が統合されることで、文の具体的な意味が構築される。任鷹(2007)は動詞自体の語彙特徴は必ず構文の意味と合わなければならないと指摘している。次節は、存在構文“L+V 着/了+NP”の「存在義」、動詞自体の語彙特徴、動詞と“着”、“了”との共起関係という三者の関係から、存在構文“L+V 着/了+NP”における“着”と“了”を考察する。

#### 4.3 “L+V 着/了+NP”における“着”と“了”の違いに関する先行研究

本節は存在構文“L+V 着/了+NP”の“着”と“了”の違いに関する先行研究を概観する。

存在構文“L+V 着/了+NP”の“着”と“了”の違いに関して、范方莲(1963)は、存在構文“L+V 着/了+NP”における“着”と“了”は等価であり、意味的には置き換えられると考え、その理由は方言の影響に関わっていると考えている。李临定(1985)は存在文においては、動詞の後の“着”と“了”が互いに置き換えられ、また文の意味に特に影響を与えないことをはっきり指摘している。宋玉柱(1995)は、静態存在文における“着”構文と“了”構文は基本的に等価であり、“着”と“了”の働きが同じであるから、互いに置き換えられると指摘している。動態存在文においては、“着”と“了”が互いに置き換えられないと指摘している。任鷹(2000)は静態存在文の“着”構文と“了”構文において、もし文中の動詞が動態の意味も静態の意味も備え、即ち、動作だけではなく、動作完了後の状態も表すことができるという意味特徴を備える場合であれば、“着”構文と“了”構文の意味は同一視されると説明している。

王学群(2007)は“V 着”が動作の進行を表すか、結果状態の持続を表すか、実現を表すかなどは、動詞の語彙的な意味特徴と具体的な文構造またはコンテク

ストなどの複合条件によって決められ、決して動詞の動作の意味や状態の意味によって決められるのではないと指摘している。例えば、4.1 節で取り上げた例で示したように、“着”と“了”の両方と共起する動詞もあるが、片方だけと共起する動詞もある。また、本来両方と共起する動詞であっても、連用修飾語やコンテキストなどによる制約を受けた上で、共起できなくなる場合もある。

次節では、まず、存在構文“L+V 着/了+NP”における“着”、“了”と共起する動詞の語彙的意味、“V 着”と“V 了”が存在構文“L+V 着/了+NP”の「存在義」との関連性を結びつけ、存在構文“L+V 着/了+NP”における“着”と“了”と共起する動詞および“V 着”、“V 了”それぞれの役割を考察した。また、“着”と“了”それぞれの構文環境の違いを考察し、存在構文“L+V 着/了+NP”における“着”と“了”の違いを明らかにする。

#### 4.4 “L+V 着/了+NP”における“着”/“了”と共起する動詞

本節では存在構文“L+V 着/了+NP”における動詞の語彙的意味と存在構文“L+V 着/了+NP”の「存在義」の関係から、存在構文“L+V 着/了+NP”における動詞と“着”、“了”との共起関係を制約する要因を考察するほかに、“V 着”と“V 了”のそれぞれの役割を考察する。

まず、存在構文“L+V 着/了+NP”における“着”と“了”と共起する動詞に関する先行研究を概観する。

朱継征(2000:95)は残存相を、動作終了後、その動作によって生物や事物がその動作と相関する状態を持って、ある場所に残留する過程であると定義した。さらに、存在構文“L+V 着/了+NP”における“着”と“了”の違いを以下のように指摘している。「語彙レベルでは、「+存在状態」「-動作」「-様態」動詞は“着”と共起できるが、“了”とは共起できない。「+動作」「+様態」「-存在状態」動詞は“了”と共起できるが、“着”とは共起できない。「+動作」「+存在状態」動詞は“着”とも“了”とも共起可能できるが、それは構文環境に“着”あるいは“了”を制限する要因が明示されない場合に限られる」。

劉琛琛(2007)は存在構文“L+V 着/了+NP”に用いられる動詞を、be 動詞と“有”を除き、動作性を持っているかどうかことによって、動作動詞と非動作動詞に分けている。さらに、朱継征(2000)を参考に、動作動詞を「+動作」「+状態」動詞と「+

動作」「-状態」動詞に分類し、非動作動詞を「-動作」「+状態」動詞と「+動作」「+状態」動詞に分類している。劉琛琛(2007)によると、「-動作」「+状態」動詞は“着”としか共起できない。「+動作」「+状態」動詞と「+動作」「+動作」動詞は“着”、“了”の両方と共起できる。「+動作」「-状態」動詞は“了”としか共起できない。

尹美蓮(2013)は朱繼征(2000)、劉琛琛(2007)を参考に、存在構文“L+V 着/了+NP”に用いられる動詞を下記の3種類に分けている。

#### A 状態動詞「-動作、+静的状態」

完結状態動詞:貼(貼る)、挂(掛ける)、放(置く)、摆(並べる)、坐(座る)、  
戴(被る)、穿(着る)、拿(持つ)

非完結状態動詞:耸立(聳えている)、存在(存在する)、生存(生存する)

#### B 動作動詞「+外部/内部動作、+動的状態」

外部動作動詞:飞(飛ぶ)、奔(疾駆する)、飘动(漂う)、滚动(転がる)

内部動作動詞:烤(焼く)、煮(煮る)、炖(煮込む)、蒸(蒸す)

#### C 変化動詞「+動作、+変化」:挖(掘る)、凿(掘る)、破(破れる)、碎(碎ける)

また、尹美蓮(2013:45-47)は「完結状態動詞と内部動作動詞は存在構文“L+V 着/了+NP”における“着”と“了”の両方と共起できる、非完結状態動詞、外部動作動詞は“着”としか共起できない。変化動詞は“了”と共起できない」と説明している。

朱繼征(2000)、劉琛琛(2007)、尹美蓮(2013)の指摘を踏まえ、本論文は存在構文“L+V 着/了+NP”における“着”、“了”と共起する動詞を下記のように整理する。

表 13 朱(2000)、劉(2007)、尹(2013)における“着”/“了”と共起する動詞

共起関係	動詞の類
“着”のみ共起	耸立(聳えている)、存在(存在する)、生存(生存する)、 飞(飛ぶ)、奔(疾駆する)、走(歩く)、跑(走る)、游(泳ぐ)、 飘动(漂う)、滚动(転がる)
“了”のみ共起	挖(掘る)、凿(掘る)、破(破れる)、碎(砕ける) <sup>31</sup>
“着”“了”の両方共起	挂(掛ける)、贴(貼る)、放(置く)、摆(並べる)、穿(着る)、 戴(被る)、写(書く)、画(描く)、 坐(座る)、站(立つ)、躺(横になる)、 煮(煮る)、烤(焼く)、炖(煮込む)、蒸(蒸す)

以下、表 13 を参考に、存在構文“L+V 着/了+NP”における“着”、“了”と共起する動詞の語彙的意味、“V 着”と“V 了”が存在構文“L+V 着/了+NP”の「存在義」との関連性を結びつけ、存在構文“L+V 着/了+NP”における“着”、“了”と共起する動詞および“V 着”、“V 了”それぞれの役割を考察する。

#### 4.4.1 “L+V 着/了+NP”における“着”としか共起できない動詞

まず、存在構文“L+V 着/了+NP”における“着”としか共起できない動詞を考察する。

前章の動詞分類からわかるように、存在構文“L+V 着/了+NP”における“着”としか共起できない動詞のうち、“耸立(聳えている)”、“存在(存在する)”、“生存(生存する)”は状態動詞であり、“飞(飛ぶ)”、“走(歩く)”、“奔(疾駆する)”、“跑(走る)”、“游(泳ぐ)”、“飘动(漂う)”、“滚动(転がる)”は活動動詞である。

“耸立(聳えている)”、“存在(存在する)”、“生存(生存する)”のような状態動詞は動詞自体が「存在」の意味特徴を持ち、恒常的な存在状態を表すことがで

<sup>31</sup> 朱繼征(2000)、尹美蓮(2013)によれば、存在文における“破(破れる)”、“碎(砕ける)”は“了”としか共起できない。劉琛琛(2007)によれば、存在文における“破(破れる)”、“碎(砕ける)”は“着”と“了”の両方と共起できる。

きる。また、これらの動詞には、動作・変化の意味が含意されてない。これらの動詞の内部過程を仮定される時間軸上に表示すれば、始点と終点を持たない「線」で示される。前章で検証したように、内部過程を「線」で表示される動詞は“着”と共起できる。これらの動詞は“着”と共起して、存在主体が存在している静的な存在状態を表す。

中国語の「動相形式」“了”に関して、従来の主要な考え方は“了”の機能を「完了」としていることである(王力(1943)、木村英樹(1997)、呂叔湘(1999)、楊凱榮(2001))。また、朱繼征(2000:23)は「完了相」<sup>32</sup>は時間の幅がない、「点」の形で表されるができると指摘している。1.4 節で説明したように、本論文は“着”、“了”のような「動相形式」を認知主体がスキニングの動的な認知プロセスを行う認知視点としている。「線状視点」の“着”と異なり、“了”の認知視点は「点状視点」である。認知主体が注目しているのは動作・作用が終了した「点」である。

“耸立(聳えている)”、“存在(存在する)”、“生存(生存する)”のような動詞には動作・作用や変化などが内在していない。そのため、動作・作用の終点が見られない。存在構文“L+V 着/了+NP”の構文形式と関係なく、どのような構文でも、“了”と共起できない。

次は“飞(飛ぶ)”、“走(歩く)”、“奔(疾駆する)”、“跑(走る)”、“游(泳ぐ)”、“飘动(漂う)”、“滚动(転がる)”のような活動動詞を考察する。例文(4-6)、(4-7)を見よう。

(4-6) a. 天上 飞着 一 只 老鹰。(=(4-3))

(大空に 飛ぶ+Zhe 一 量詞 鷹)

(一羽の鷹が大空を飛んでいる。)

b.\*天上 飞了 一 只 老鹰。

(大空に 飛ぶ+Le 一 量詞 鷹)

---

<sup>32</sup> 朱繼征(2000:22-23)は「完了相」は動作・作用が終了する過程を指し、時間の幅がないと指摘している。

(4-7) a.马路上 走着 一 群 人。

(道路に 歩く+Zhe 一 量詞 人)

(道路を一群の人が歩いている。)

b.\*马路上 走了 一 群 人。

(道路に 歩く+Le 一 量詞 人)

宋玉柱(1988)は(4-6)、(4-7)のような存在構文を「動態存在文」としている。(4-6)、(4-7)における動詞“飞(飛ぶ)”、“走(歩く)”は典型的な活動動詞である。齐沪扬(1998)は“飞(飛ぶ)”、“走(歩く)”のような動詞は「+動作」、「+持続」の意味特徴を持つと指摘している。これらの動詞の内部過程を仮定される時間軸上で表示すると、持続している「線」で示すことができる。認知主体は“着”の認知視点から“飞(飛ぶ)”、“走(歩く)”を捉えた結果、“飞着(飛んでいる)”、“走着(歩いている)”のような持続的動作を得ている。これらの持続的動作“飞着(飛んでいる)”、“走着(歩いている)”は存在主体の存在方式である。つまり、存在場所の「大空」と「道路」に、存在主体としての「一羽の鷹」と「一群の人」は「飛んでいる」と「歩いている」の方式で存在している。存在述語の“飞着(飛んでいる)”、“走着(歩いている)”が表す動態は「存在状態」でもあり、「存在方式」でもある。“飞着(飛んでいる)”、“走着(歩いている)”は「存在状態」と「存在方式」を表すことができるということは、存在構文“L+V 着+NP”の「存在義」を表すことができるということを意味する。そのため、“飞(飛ぶ)”、“走(歩く)”は存在構文“L+V 着+NP”に用いられる。

例文(4-6a)、(4-7a)が示すように、存在構文“L+V 了+NP”では、“飞(飛ぶ)”、“走(歩く)”のような動詞は用いられない。“飞了(飛んだ)”、“走了(歩いた)”はただ単に「飛ぶ」と「歩く」の動作が終わったことを示す。“飞(飛ぶ)”、“走(歩く)”の動作が終わった後、存在主体が存在場所に存在しているかどうかは不明である。つまり、存在述語の「完了義」は存在構文の「存在義」に当てはまらない。そのため、存在構文“L+V 了+NP”では、“飞(飛ぶ)”、“走(歩く)”のような活動動詞は用いられない。

まとめていうと、本節では次のことを明らかにした。存在構文“L+V 着/了+NP”における“着”としか共起できない動詞は“耸立(聳えている)”、“存在(存在す

る)、“生存(生存する)”などの状態動詞と“飞(飛ぶ)”、“走(歩く)”、“奔(疾駆する)”などの活動動詞である。“耸立(聳えている)”、“存在(存在する)”、“生存(生存する)”などの状態動詞は動作・作用や変化などが内在していない。つまり、動作・作用の終点が見られない。そのため、動作・作用が終了した点に注目する「点状視点」の“了”と共起できず、「線状視点」の“着”としか共起できない。“飞了(飛んだ)”、“走了(歩いた)”はただ単に「飛ぶ」と「歩く」の動作が終わったことを示す。“飞(飛ぶ)”、“走(歩く)”の動作が終わった後、存在主体が存在場所に存在しているかどうかは不明である。つまり、存在述語の「完了義」は存在構文の「存在義」に当てはまらない。そのため、動作・作用が終了した点に注目する「点状視点」の“了”と共起できず、「線状視点」の“着”としか共起できない。

#### 4.4.2 “L+V 着/了+NP”における“了”としか共起できない動詞

次は存在構文“L+V 着/了+NP”における“了”としか共起できない動詞を考察する。

表 13 が示すように、存在構文“L+V 着/了+NP”における“了”としか共起できない動詞は“挖(掘る)”、“凿(掘る)”、“破(破れる)”、“碎(碎ける)”のような動詞である。

まず、“挖(掘る)”、“凿(掘る)”のような動詞を見てみよう。

(4-8) a.\*门前 挖着 一条 沟。(=(4-4))

(門の前 掘る+Zhe 一 量詞 溝)

b.门前 挖了 一条 沟。

(門の前 掘る+Le 一 量詞 溝)

(門の前には溝が掘ってある。)

(4-9) a.\*地上 凿着 一口井。

(地面に 掘る+Zhe 一 量詞 井戸)

b.地上 凿了 一口井。

(地面に 掘る+Le 一 量詞 井戸)

(地面に井戸が掘ってある。)

(4-10) 匪军们 正 在 那里 挖着 坑。(CCL)

(敵軍 正に 介詞 あそこ 掘る+Zhe 溝)

(敵軍が溝を掘っている。)

例文(4-8)、(4-9)が示すように、存在構文“L+V 着/了+NP”における“挖(掘る)”、“凿(掘る)”のような動詞は“了”としか共起できない。例文(4-10)が示すように、存在文ではない場合には、“挖(掘る)”、“凿(掘る)”は“着”と共起できる。前章の動詞分類からわかるように、“挖(掘る)”、“凿(掘る)”は「動態」の意味特徴を持つ活動動詞である。“挖(掘る)”、“凿(掘る)”の内部過程は下記の通りである。

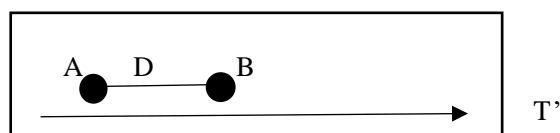


図 4-1 “挖(掘る)”、“凿(掘る)”の内部過程

A、B は動作の始点と終点を示す。A と B の間の D は動作を行う動態の過程を示す。実線の矢印 T' は假定される時間軸を示す。

(4-10)が示すように、認知主体が“着”の認知視点から、A と B の間の D を知覚する場合では、“挖着(掘っている)”は動態の持続を表す。

宋玉柱(1988)によれば、動態存在文における動詞は“走(歩く)”、“跑(走る)”のような自動詞である。“走着(歩いている)”、“跑着(走っている)”が動態の持続を表す。それらの動態は人の存在方式や存在状態として捉えられる。他動詞

の“挖(掘る)”、“凿(掘る)”の“V 着”が表す動態の持続は動作主の存在方式や存在状態として捉えられない。

「溝」と「穴」は“挖(掘る)”、“凿(掘る)”という動作の生産物である。動作が行われた後、生産物が出現する。しかしながら、動作によって生産された「溝」と「穴」はどのような存在状態で存在しているかは不明である。認知主体は“着”の認知視点から B の後の状態を捉えられない。

つまり、動態の持続を表す場合、“挖着(掘っている)”、“凿着(掘っている)”は動作主の存在方式や存在状態として捉えられない。また、“挖着(掘っている)”、“凿着(掘っている)”は生産物の静態の持続を表すことができない。そのため、存在構文“L+V 着/了+NP”における“挖(掘る)”、“凿(掘る)”は“着”と共起できない。

一方、“了”の場合、認知主体は終点 B に注目し、B から、動作によって生産された生産物の存在を推論できる。つまり、この場合の“挖了(掘り終わった)”、“凿了(掘り終わった)”は存在理由を表すと考えられる。存在理由を表すことができるということは、存在構文の「存在義」を表すことができるということを意味する。そのため、存在構文“L+V 着/了+NP”における“挖(掘る)”、“凿(掘る)”は“了”と共起できる。

次は“破(破れる)”、“碎(碎ける)”のような動詞を考察する。

朱繼征(2000)、尹美蓮(2013)によると、(4-11)、(4-12)が示すように、存在構文“L+V 着/了+NP”における“破(破れる)”、“碎(碎ける)”は“了”としか共起できない。劉琛琛(2007)によると、存在構文“L+V 着/了+NP”における“破(破れる)”、“碎(碎ける)”は“着”、“了”の両方と共起できる。朱繼征(2000)が取り上げた例を見てみよう。

(4-11) a.\*他 手上 破着 好几个 口子。(朱繼征 2000:88)

(彼 手に 破れる+Zhe 何箇所か 傷)

b.他 手上 破了 好几个 口子。

(彼 手に 破れる+Le 何箇所か 傷)

(彼は手に何箇所かの傷を負っている。)<sup>33</sup>

(4-12) a.\*窗户上 碎着 两 块 玻璃。(朱繼征 2000:88)

(窓に 割れる+Zhe 2 量詞 ガラス)

b.窗户上 碎了 两 块 玻璃。

(窓に 割れる+Le 2 量詞 ガラス)

(窓ガラスが2枚割れた。)

また、(4-13a)、(4-13b)が示すように、意味的には、(4-13a)=(4-11b))の“破了(破れた)”を“有(ある)”に置き換えられるが、(4-13b)=(4-12b))の“碎了(割れた)”を“有(ある)”に置き換えられない。

(4-13) a.他手上破了好几个口子。→ a'.他 手上 (有) 好几个 口子。

(彼 手に ある いくつ 傷)

(彼は手にいくつの傷を負っている。彼は手にいくつの傷がある。)

b.窗户上碎了两块玻璃。→×b'.窗户上 (有) 两 块 玻璃。

(窓に ある 2 量詞 ガラス)

(窓ガラスが2枚割れた。窓にガラスが2枚あった。)

c.窗户上 有 两 块 碎玻璃。

(窓に ある 2 量詞 割れているガラス)

(窓に割れたガラスが2枚ある。)

d.窗户上 的 两 块 玻璃 碎 了。

(窓 の 2 量詞 ガラス 割れる LE)

(窓ガラスが2枚割れた。)

---

<sup>33</sup> 朱繼征(2000:88)における訳文は「彼は手にいくつも傷を負った」である。しかし、手に傷が存在しているという「存在義」を表すため、ここでは「彼は手に何箇所かの傷を負っている」と訳す。

范方莲(1963)、宋玉柱(1995)によると、存在構文“L+V 着/了+NP”における“V 了/着”は存在を表す動詞“有(ある)”に置き換えられる。(4-12)の“碎了(割れた)”を“有(ある)”に置き換えられないため、本章は(4-12)を存在構文“L+V 着/了+NP”ではない文と判断する。(4-12b)の場合、存在主体のガラスはもともと存在場所の窓に存在している。存在主体のガラスは“碎(碎ける)”という変化の結果ではない。“碎(碎ける)”という変化が発生しても、「傷」や「穴」などは出現しない。もし、窓のガラスの割れた状態を表すなら、(4-13c)、(4-13d)のように言うべきである。総じていえば、(4-12b)の文自体は意味的には不自然である。このため、(4-12)を本章の研究対象外として扱う。

次に、存在構文“L+V 着/了+NP”における“破(破れる)”と“着”、“了”との共起関係を検討する。存在構文“L+V 着/了+NP”の“破了(破れた)”に関して、朱継征(2000)、劉琛琛(2007)、王学群(2007)、尹美蓮(2013)がすでに明瞭に説明しているため、ここで検討するのは存在構文“L+V 着/了+NP”における“破着(破れている)”である。

朱継征(2000)によると、「+様態」「存在状態」を表す動詞は“破(破れる)”は存在・残存の意味を表せないゆえに、“着”と共起できない。劉琛琛(2007)は“破(破れる)”は状態を表す動詞であるため、必ず存在する状態を表し、「存在・残存の意味を表せない」とは言いづらいと指摘している。また、劉琛琛(2007)は“破(破れる)”が“着”と共起して、「結果状態」が続いていることを表すと指摘している。王学群(2007:210)は“破(破れる)”が“着”と共起する例文(4-14)を取り上げたが、例に関する説明はなかった。本論文はウェイボーで調べた結果、(4-14)のような“破着”の存在文が 30 例確認できた。

(4-14) 不 知 发生 了 什么事, 见 窗纸上 破着 一个 大洞, 屋里 静悄悄的。(王学群 2007:210)

(NEG 知る発生する Le 何事 見える 窓に 破れる+Zhe 一 量詞 大きな 穴 部屋に 静か)

(何かあったかわからないが、窓に張る紙に、大きな穴があいていて、部屋の中は静かである。)

前章の動詞分類からわかるように、“破(破れる)”は結果動詞である。また、“打破(打ち破る)”のように、“破(破れる)”がよく結果補語として活動動詞に後続している。

3.3.3 節では、結果動詞は瞬間的な変化と変化の結果が継続している状態の両方が捉えられる結果動詞 1 と、瞬間的な変化しか捉えられない結果動詞 2 に分けられている。“倒(倒れる)”のような結果動詞 1 は、動詞が表す変化が起きた後、変化の主体或いは変化によって生じるものがどこかに存在していることを表す。つまり、“倒(倒れる)”のような結果動詞に「付着」の意味も含意されている。

“倒(倒れる)”と同様に、“破(破れる)”は「破れる」という変化があるため、「傷」という存在主体が場所に出現し、存在場所に付着していることを表す。また、“破(破れる)”という変化の結果が継続している状態も捉えられる。つまり、動詞の“破(破れる)”の内部過程は“倒(倒れる)”と同様であり、下記のように表示される。

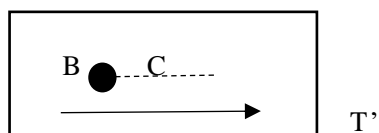


図 4-2 “破(破れる)”の内部過程

B は瞬間的な変化を示す。C は変化の結果が継続している状態を示す。実線の矢印 T' は仮定される時間軸を示す。

図 4-2 が示すように、“破(破れる)”の内部過程は変化を表す点状の B と変化した結果が継続している状態の線状の C である。“着”の視点から変化の結果が継続している状態を捉えられる。(4-15)、(4-16)を見てみよう。

(4-15) 左边膝盖上 破着 一 条 长 口子。

(左の膝に 破れる+Zhe 一 量詞 長い 傷)

(左の膝に大きな傷が裂けている。)

(4-16) 路上 倒着 一 棵 树。

(道に 倒れる+Zhe 一 量詞 木)

(道に木が倒れている。)

(4-15)では、“破(破れる)”という変化があるため、“口子(傷)”が変化の結果として出現する。「傷」があることと、“左边膝盖(左の膝)”が“破着(破れている)”の状態と一致する。つまり、“破着(破れている)”は「左の膝」の様態も表す、「傷」が存在している意味も表す。(4-16)では、“倒(倒れる)”という変化があるため、木は道の地面に付着する。その付着状態は存在文の「存在義」と一致する。

また、“倒着(倒れている)”と“破着(破れている)”が異なるのは、(4-15)“破着(破れている)”の状態は存在場所の「左の膝」の状態であるが、(4-16)の“倒着(倒れている)”の状態は存在主体の“树(木)”の状態である。

まとめると、結果動詞“破(破れる)”は、瞬間的な変化と変化の結果が継続している状態という両方の面が捉えられる結果動詞である。内部過程は仮定される時間軸上に“点+線”で表示できる。「付着」の意味特徴を持つ。“破(破れる)”は“着”と共起して、存在場所の様態を表す。このため、“破着(破れている)”は存在構文“L+V 着/了+NP”に用いられる。“破(破れる)”グループの動詞には“倒(倒れる)”、“裂(裂ける)”がある。本論文は“破(破れる)”、“倒(倒れる)”、“裂(裂ける)”のような動詞を存在構文“L+V 着/了+NP”の“着”、“了”の両方と共起できる動詞に分類する。

まとめていうと、本節では、次のことを示した。

存在構文“L+V 着/了+NP”における“了”としか共起できない動詞は“挖(掘る)”、“凿(掘る)”などの活動動詞である。“挖(掘る)”グループの動詞は“着”と共起すると、存在方式や存在状態として捉えられないため、“挖着”は存在構文“L+V 着/了+NP”に用いられない。“了”と共起すると、存在主体の存在理由を表すため、“挖了”は存在構文“L+V 着/了+NP”に用いられる。

朱繼征(2000)、劉琛琛(2007)、尹美蓮(2013)で取り上げた“碎(碎ける)”について、本章は“碎(碎ける)”を“破(破れる)”、“倒(倒れる)”、“裂(裂ける)”と違う種類の動詞として扱う。“碎(碎ける)”が“着”、“了”と共起するが、存在構文“L+V 着/了+NP”では使えないと考え、本章の研究対象から除外する。

“破(破れる)”グループの動詞は結果動詞であるが、瞬間的な変化と変化の結果が継続している状態という両方の面が捉えられる結果動詞である。内部過程は仮定される時間軸上に“点+線”で表示できる。「付着」の意味特徴を持つ。“着”と共起して、存在場所の様態を表す。その様態自体は存在主体が存在していると意味する。このため、“破(破れる)”グループの動詞を存在構文“L+V 着/了+NP”の“着”、“了”の両方と共起できる動詞に分類する。

#### 4.4.3 “L+V 着/了+NP”における“着”“了”の両方と共起できる動詞

この節では、存在構文“L+V 着/了+NP”における“着”、“了”の両方と共起できる動詞を考察する<sup>34</sup>。

まず、意味によって、“着”、“了”の両方と共起できる動詞を5つのグループに分ける。“挂(掛ける)”、“貼(貼る)”、“放(置く)”、“摆(並べる)”グループは「主体が事物をあるところに置く」の意味を表す。“穿(着る)”、“戴(被る)”グループは「主体が服装を身にまとう」の意味を表す。“写(書く)”、“画(描く)”グループは「主体があるところに文字や図形を記す」の意味を表す。“坐(座る)”、“站(立つ)”、“躺(横になる)”は「主体がある姿勢で体をあるところにつける」の意味を表す。“烤(焼く)”、“煮(煮る)”、“炖(煮込む)”、“蒸(蒸す)”は「料理を作る方法」を表す動詞である。5種類のうち、まず、“挂(掛ける)”グループ、“穿(着る)”グループ、“写(書く)”グループを考察する。

李临定(1985)、任鹰(2000)は“挂(掛ける)”グループ、“穿(着る)”グループ、“写(書く)”グループの動詞は動態の意味と静態の意味の両方を表すことができると指摘している。2.4節ですでに指摘したように、荒川清秀(2015)は“穿(着る)”を“穿<sub>1</sub>(動詞の変化にいたる過程の局面)”と“穿<sub>2</sub>(状態を維持する動作の局面)”に分けている。荒川清秀(2015)で指摘された“穿<sub>1</sub>”が表す「動詞の変化にいたる過程の局面」は“穿(着る)”の動態的意味であり、“穿<sub>2</sub>”が表す「状態を維持する動作の局面」は“穿(着る)”の静態的な意味である。税昌锡(2014)によれば、こ

---

<sup>34</sup> 存在構文“L+V 着/了+NP”における“着”、“了”の両方と共起できる破(破れる)”、“倒(倒れる)”、“裂(裂ける)”はすでに前節で説明されているため、本節で重複に説明しない。

これらのグループの動詞は「動態の特徴」と「静態の特徴」<sup>35</sup>を持つ。つまり、李临定(1985)、任鷹(2000)、税昌锡(2014)、荒川清秀(2015)はこれらの動詞グループは「動態の意味」と「静態の意味」の両方を持つと主張している。3.2.3 節で述べている孙英杰(2006)の動詞分類の基準からわかるように、活動動詞は「動態」の意味特徴を持ち、状態動詞は「静態」の意味特徴を持つ。つまり、これらの動詞は活動動詞と状態動詞の兼類動詞と捉えることができる。

この主張に関して、李杰(2003)は“挂(掛ける)”グループ、“穿(着る)”グループ、“写(書く)”グループの解釈を検討し、これらのグループの動詞の本質は兼類動詞ではなく、動作動詞(本論文で述べている活動動詞)であると指摘している。また、李杰(2003)はこれらの動詞の意味特徴を「置く」とし、「置く」の意味特徴に「付着義」が含意されていると論述している。また、王学群(2007)はこれらの動詞グループは「付着」という意味特徴を持つと指摘している。

李杰(2003)、王学群(2007)の「付着説」は李临定(1985)、荒川清秀(1985)、任鷹(2000)、税昌锡(2014)の「動静態兼類説」と矛盾せず、一致すると考えられる。「置く」という動作が終わって、受け手が付着の状態が始まったと考えられる。つまり、まず、動作主が動作を行って、動作によって、受け手がある場所に付着して、付着状態が始まった。動作を行う状態は動態として、付着状態の継続は静態として理解できる。これらの動詞の内部過程は、下記のように図示できる

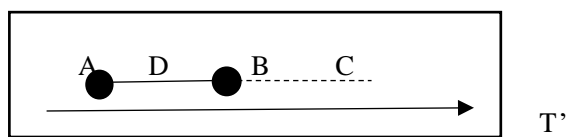


図 4-3 “挂(掛ける)”グループ、“穿(着る)”グループ、“写(書く)”グループの内部過程

A、B は動作主が動作を行う始点と終点を示す。実線の矢印 T' は仮定される時間軸を示す。A と B の間の D は動作を行う動態の過程を示す。C は動作が終わ

<sup>35</sup> 税昌锡(2014:110)は「動態特徴は動作の持続を示し、静態特徴は動作が終わってからの遺留状態を示す」と述べている。

った後、受け手がある形で残す遺留状態あるいは付着状態を示す。つまり、Dは動態の部分を示し、Cは静態の部分を示す。“挂(掛ける)”グループ、“穿(着る)”グループ、“写(書く)”グループが動態の意味と静態の意味の両方を表すのはこれらの動詞が「付着」の意味特徴を持つからであると考えられる。「付着」の意味特徴を持つため、動態の過程が終わって、付着状態は静態として始まったということである。

また、“挂(掛ける)”グループの動作を行うなら、必ず置く場所が必要である。“穿(着る)”グループの動作の目的地は体でなければならない。“写(書く)”グループの動作を行うためには、書かれる場所が必ず必要である。つまり、この3つのグループの動詞は「付着」の意味特徴があるため、動作の結果の付着場所に依存しなければならないという特徴を示す。では、“V着”と“V了”は存在構文“L+V着/了+NP”においてどのような機能をしているのか。

具体的な例文を見てみよう。

(4-17) a. 墙上 挂着 一 幅 画。

(壁に 掛ける+Zhe 一 量詞 絵)

(壁に絵が一枚掛かっている。)

b. 墙上挂了一幅画。

(壁に 掛ける+Le 一 量詞 絵)

(壁に絵が一枚掛かっている。)

(4-18) a. 他 的 身上 穿着 一 件 红色毛衣。

(彼 の 体に 着る+Zhe 一 量詞 赤いセーター)

(彼の体に赤いセーターが一枚纏われている。)

b. 他 的 身上 穿了 一 件 红色毛衣。

(彼 の 体に 着る+Le 一 量詞 赤いセーター)

(彼の体に赤いセーターが一枚纏われている。)

(4-19) a.黑板上 写着 他 的 名字。

(黑板に 書く+Zhe 彼 の 名前)

(黑板に彼の名前が書いてある。)

b.黑板上 写了 他 的 名字。

(黑板に 書く+Le 彼 の 名前)

(黑板に彼の名前が書いてある。)

(4-17)～(4-19)が示すように、動詞が“挂(掛ける)”グループ、“穿(着る)”グループ、“写(書く)”グループの場合、“L+V 着/了+NP”は両方ともある場所にある事物が存在するということを表す。(4-17)～(4-19)において“V 着”と“V 了”は置き換えられる。

これらの動詞は「付着」の意味特徴を持ち、動態的な意味(動作を表す)と静態的な意味(受け手が動作の結果として残されている状態を表す)を表す。1.4.2 で指摘したように、本論文は“着”と“了”を、認知主体が事態を捉える認知視点として扱う。(4-17)～(4-19)の認知プロセスを図式化すれば、下記の通りである。

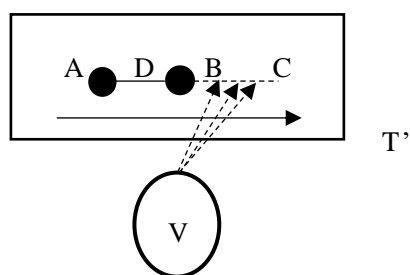


図 4-4 (4-17a)～(4-19a)の図式

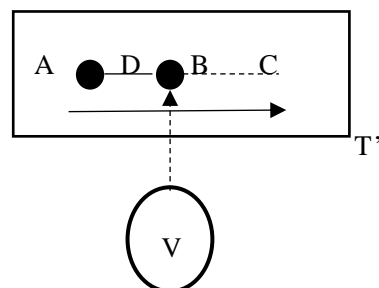


図 4-5 (4-17b)～(4-19b)の図式

A、B、C、D が示す内容は図 4-3 と同様である。④は認知主体(viewer)、破線の矢印は視線、実線の矢印 T'は仮定される時間軸を示す。四角の枠の中は動詞に関わる全体の事態(動作・作用が始まる前の状態から終わった後の状態まで)を表す。

(4-17a)、(4-18a)、(4-19a)の“V 着”の場合、認知主体は動作がいつ始まったか、いつ終わったかに関心を持たず、動作が終わった後、受け手の「絵」、「赤いセー

ター」、「名前」が遺留されている状態あるいは付着状態、つまり動作の終点 B の後の部分だけを知覚している。

(4-17b)、(4-18b)、(4-19b)の“V 了”場合、認知主体は動作の終点 B に注目している。動作は存在主体が残される理由として理解する。受け手の「絵」、「赤いセーター」、「名前」の存在は、動作の産物であり、動作が終わってから残されると推論される結果であると理解して良い。

つまり、“着”と“了”の両方と共起できる動詞であれば、“V 着”の場合、存在構文の「存在義」は認知主体が直接に存在状態に注目して捉えたものである。一方、“V 了”の場合、存在文の「存在義」は認知主体が動作の終了の意味から推論して捉えたものである。“V 着”は存在状態や存在方式を表し、“V 了”は存在理由として考えることが可能である。「存在義」を表すという点において、認知主体が直接的に注目した部分の“V 着”と間接的に推論した部分の“V 了”は共通するため、置き換えられると考えられる。しかしながら、“一直(ずっと)”、“已经(すでに)”のような連用修飾語や特別なコンテキストなどの構文環境がある場合、同様な動詞であっても、“V 着”と“V 了”は置き換えられない。“L+V 着/了+NP”における“V 着”と“V 了”の構文環境の違いは 4.3.2 節で考察する。

“坐(座る)”グループは動詞が“挂(掛ける)”グループと同様、「付着」の意味特徴を持つため、「腰をかける」や「立ち上がる」の動作が終わった後、体がある姿勢でどこかに残されている付着状態を表す。3.3.1.4 で指摘したように、“挂(掛ける)”グループ、“穿(着る)”グループ、“写(書く)”グループと異なり、“坐(座る)”グループの動作が瞬間で終わる。“正在”と共起できないため、状態動詞として扱われている。荒川清秀(2015)は“坐(座る)”グループを静態動詞と呼んでいる。“坐(座る)”グループの動詞が含まれる“L+V 着+NP”の「存在義」は、“挂(掛ける)”グループの動詞が含まれる“L+V 着+NP”の「存在義」と同様に、認知主体が直接に“坐着(座っている)”の存在状態に注目して捉えたものである。

“坐(座る)”グループの動詞が含まれる“L+V 了+NP”の場合、「存在義」は認知主体が「腰掛ける」の動作の終了の意味から推論して捉えたものである。“坐着”は存在状態や存在方式を表し、“坐了”は存在理由として考えることが可能である。

最後に、料理を作る方法を表す“烤(焼く)”、“煮(煮る)”、“炖(煮込む)”、“蒸(蒸す)”のような動詞を検討する。

“L+V 着/了+NP”における“煮(煮る)”グループは“着”と“了”の両方とも共起できるが、2つの文が表す意味は違う。例文(4-20)を見よう。

(4-20) a. 锅里 煮着 红烧肉。

(鍋の中 煮る+Zhe 角煮)

(鍋の中で角煮を煮ている。)

b. 锅里 煮了 红烧肉。

(鍋の中 煮る+Le 角煮)

(鍋の中に煮た角煮がある。)

(4-20a)と(4-20b)は両方とも鍋に角煮があることを表すことができる。(4-20a)では、存在主体の「角煮」はまだ煮ている状態であり、(4-20b)では、「煮る」という作用がすでに終わって、存在主体の「角煮」が煮られてできた状態である。このため、(4-20a)と(4-20b)の“煮着(煮ている)”、“煮了(煮た)”は置き換えられない。また、“挂(掛ける)”グループの動詞が含まれる“L+V 着+NP”の「存在義」と同様に、“煮(煮ている)”グループの動詞が含まれる“L+V 着+NP”の「存在義」は認知主体が直接に“煮着(煮ている)”の存在状態に注目して捉えたものである。“煮(煮ている)”グループの動詞が含まれる“L+V 了+NP”の「存在義」は認知主体が動作の終了の意味から推論して捉えたものである。“煮着(煮ている)”は存在状態や存在方式を表し、“煮了(煮た)”は存在理由として考えることが可能である。

また、“挂(掛ける)”グループと異なり、“煮(煮ている)”グループの動詞が含まれる“L+V 着+NP”と“L+V 了+NP”の両方とも「存在義」を表すが、それぞれの意味には、「煮ている」と「煮終わった」の意味の差がある。“一直(ずっと)”、“已经(すでに)”のような連用修飾語や特別なコンテキストなどの構文環境がなくても、“煮着(煮ている)”と“煮了(煮た)”は自由に置き換えられない。

まとめていうと、本節では、次のことを示した。存在構文“L+V 着/了+NP”における“着”、“了”の両方とも共起できる動詞は“挂(掛ける)”グループ、“穿

(着る)”グループ、“写(書く)”グループ、“坐(座る)”グループ、“煮(煮る)”グループである。これらの動詞が“着”と共起する場合、存在構文の「存在義」は認知主体が直接に存在状態に注目して捉えたものである。一方、“了”と共起する場合、存在文の「存在義」は認知主体が動作の終了の意味から推論して捉えたものである。“V 着”は存在状態や存在方式を表し、“V 了”は存在理由として考えることが可能である。「存在義」を表すという点において、認知主体が直接的に注目した部分の“V 着”と間接的に推論した部分の“V 了”は共通するため、置き換えられると考えられる。

#### 4.4.4 “着” / “了” と共起する動詞から見る “V 着” “V 了” の役割

本節は 4.4.1 節～4.4.3 節の論述をまとめる。

仮定される時間軸上に始点、終点がない「線」で表示する“存在(存在する)”グループの動詞は“了”と共起できず、“着”と共起できて、存在主体が存在しているという静的な存在状態を表す。仮定される時間軸上に始点、終点がある「線」で表示する“飞(飛ぶ)”グループは“着”と共起して、存在主体の動的な存在状態或いは存在方式を表す。動作が終われば、存在主体は場所に存在しているかどうかは不明であるため、“了”と共起できない。

存在構文“L+V 着/了+NP”における“了”としか共起できない動詞は“挖(掘る)”、“凿(掘る)”などの活動動詞である。“挖(掘る)”グループは“着”と共起して、存在方式や存在状態として捉えられないため、“挖着”は存在構文“L+V 着/了+NP”に用いられない。“了”と共起して、存在主体の存在理由を表すため、“挖了”は存在構文“L+V 着/了+NP”に用いられる。

朱繼征(2000)、劉琛琛(2007)、尹美蓮(2013)で取り上げた“碎(碎ける)”について、本節は“碎(碎ける)”を“破(破れる)”、“倒(倒れる)”、“裂(裂ける)”と違う種類の動詞として扱う。“碎(碎ける)”は“着”、“了”と共起できるが、存在構文“L+V 着/了+NP”に使えないため、本章の研究対象から除外する。“破(破れる)”グループの動詞は結果動詞であり、瞬間的な変化と、変化の結果の継続状態の両方が捉えられる結果動詞である。内部過程は仮定される時間軸上に“点+線”で表示できる。「付着」の意味特徴を持つ。“着”と共起して、存在場所の様態を表す。その様態自体は存在主体が存在していると意味する。

“挂(掛ける)”グループ、“穿(着る)”グループ、“写(書く)”グループ、“坐(座る)”グループ、“煮(煮る)”グループは“着”の“了”の両方と共起できる。存在構文“L+V 着+NP”の場合、存在構文の「存在義」は認知主体が直接に存在状態に注目して捉えたものである。一方、存在構文“L+V 了+NP”の場合、存在文の「存在義」は認知主体が動作の終了の意味から推論して捉えたものである。“V 着”は存在状態や存在方式を表し、“V 了”は存在理由を表すと考えることが可能である。“一直(ずっと)”、“已经(すでに)”のような連用修飾語や特別なコンテキストなどの構文環境がない場合、“煮(煮る)”グループ以外の4グループの動詞が含まれる“V 着”と“V 了”は置き換えられる。次節は存在構文“L+V 着/了+NP”に伴う“一直(ずっと)”、“已经(すでに)”のような連用修飾語や特別なコンテキストなどの構文環境を考察する。

#### 4.5 “V 着”と“V 了”の構文環境

前節は“一直(ずっと)”、“已经(すでに)”のような連用修飾語や特別なコンテキストなどの構文環境がある場合、同じ動詞であっても、“V 着”と“V 了”は置き換えられないことを説明した。本節はこれらの構文環境を考察する。まず、存在構文“L+V 着/了+NP”における“V 着”と“V 了”と共起する連用修飾語を見てみよう。

(4-21) a. 他 的 办 公 室 里 挂着 一 幅 书 法。

(彼 の 事 務 室 中 掛 け る +Zhe 一 量 詞 書 道 作 品 )

(彼の事務室に書道作品が一枚掛かっている。)

b. 他 的 办 公 室 里 挂 了 一 幅 书 法。

(彼の事務室に書道作品が一枚掛かっている。)

c. 他 的 办 公 室 里 仍 挂着 一 幅 书 法。

(彼の事務室に一枚の書道作品がずっと掛かっている。)

d. \*他 的 办 公 室 里 仍 挂 了 一 幅 书 法。

(4-22) a. 门口 站着 两个 士兵。

(入口 立つ+Zhe 2 量詞 衛兵)

(入口には 2 人の衛兵が立っている。)

b. 门口站了两个士兵。

(入口には 2 人の衛兵が立っている。)

c. 门口 一直站着 两个士兵。(朱繼征 2000:90)

(入口には 2 人の衛兵がずっと立っている。)

d. \*门口 一直站了 两个士兵。(朱繼征 2000:90)

(4-23) a. 他 年轻的夫人 头 上 戴着 遮阳帽。

(彼 若い奥さん 頭 上 被る+Zhe 日よけ帽子)

(彼の若い奥さんは日よけ帽子を被っている。)

b. 他年轻的夫人头上戴了遮阳帽。

(彼の若い奥さんは日よけ帽子を被っている。)

c. 他年轻的夫人头上 总是戴着 遮阳帽。(CCL)

(彼の若い奥さんはいつも日よけ帽子を被っている。)

d. \*他年轻的夫人头上 总是戴了 遮阳帽。

(4-24) a. 他们的桌子上 摆着 大盘的 自己园子里产的鲜美的 水果。

(彼らの机に 並べる+Zhe 大きなお皿の上 ADJ 果物 )

(彼らの机に、大きなお皿の上に彼らの果樹園で生産された新鮮な果物が並べられている。)

b. 他们的桌子上摆了大盘的自己园子里产的鲜美的水果。

(彼らの机に、大きなお皿の上に彼らの果樹園で生産された新鮮な果物が並べられている。)

c. 他们的桌子上 每天摆着 大盘的自己园子里产的鲜美的水果。(CCL)

(彼らの机に、毎日、大きなお皿の上に彼らの果樹園で生産された新鮮な果物が並べられている。)

d. \*他们的桌子上 每天摆了 大盘的自己园子里产的鲜美的水果。

(4-21)～(4-24)が示すように、存在構文“L+V 着/了+NP”において、“仍(まだ、相変わらず)”、“一直(ずっと)”、“总是(いつも)”、“每天(毎日)”のような連用修飾語がない場合、存在構文“L+V 着/了+NP”の“挂(掛ける)”、“站(立つ)”、“戴(被る)”、“摆(並べる)”は“着”と“了”の両方と共起する。しかし、これらの連用修飾語を伴う場合、“着”とのみ共起する。

また、次の(4-25)～(4-27)を見よう。

(4-25) a. 墙 上 挂着 一 幅 画儿。

(壁 上 掛ける+Zhe 一 量詞 絵)

(壁に絵が一枚掛かっている。)

b. 墙上挂了一幅画儿。

(壁に絵が一枚掛かっている。)

c. \*墙上刚挂着一幅画儿。(朱繼征 2000:91)

d. 墙上刚挂了一幅画儿。(朱繼征 2000:91)

(たった今、壁に絵を掛けたばかりだ。)

(4-26) a. 椅子 上 坐着 一 个 人。

(椅子 上 座る+Zhe 一 量詞 人 )

(椅子に一人が座っている。)

b. 椅子上坐了一个人。

(椅子に人一人が座っている。)

c. \*椅子上已坐着一个人。

d. 椅子上已坐了一个人。(任鷹 2000:29)

(椅子に一人が座っている。)

(4-27) a. 衣服上 绣着 一 朵 花。

(服の上 刺繍する+Zhe 一 量詞花)

(服の上に一輪の花が刺繍してある。)

b.衣服上绣了一朵花

(服の上に一輪の花が刺繍された。)

c.\*衣服上又绣着一朵花。

d.衣服上又绣了一朵花。(任鷹 2000:29)

(服の上にまた一輪の花が刺繍された。)

(4-28) a.地 上 堆着 很多 白菜。

(地面 上 積む+Zhe たくさん 白菜)

(地面にたくさんの白菜が積まれている。)

b.地上堆了很多白菜。

(地面にたくさんの白菜が積み上げられた。)

c.\*不知什么时候地上堆着很多白菜。(朱繼征 2000:91)

d.不知什么时候地上堆了很多白菜。(朱繼征 2000:91)

(いつの間にか、地面にたくさんの白菜が積み上げられた。)

(4-25)～(4-28)が示すように、存在構文“L+V 着/了+NP”において、“刚(先)”、“已(すでに)”、“又(また)”、“不知什么时候(いつの間にか)”のような連用修飾語を伴わない場合、“挂(掛ける)”、“坐(座る)”、“绣(刺繍する)”、“堆(積む)”は“着”と“了”の両方とも共起する。しかし、これらの連用修飾語を伴う場合、“了”とのみ共起する。

朱繼征(2000)は、(4-21)～(4-24)の“仍(まだ、相変わらず)”、“一直(ずっと)”、“总是(いつも)”、“每天(毎日)”などの連用修飾語が持続・経常的時間の幅を示すと指摘している。(4-21)～(4-24)はいずれも恒常的な事態を表す。前節で指摘したように、存在構文“L+V 着+NP”では、認知主体は動作・変化が終わった後、残される状態に注目する。“V 着”は存在状態や存在方式を表す。“仍(まだ、相変わらず)”、“一直(ずっと)”、“总是(いつも)”、“每天(毎日)”などの連用修飾語は“V 着”が表す存在状態や存在方式が持続・経常的時間の幅において、変わっていないことに焦点を当てると考えられる。

任鷹(2000)、朱繼征(2000)によると、(4-25)～(4-27)の“刚(たった今)”、“已(すでに)”、“又(また)”、“不知什么时候(いつの間にか)”は已然(動作完成)を

表す連用修飾語である。(4-25d)では、絵が掛けられたばかりであるため、壁に以前は絵がなかったことが推測できる。たった今の動作で絵が今壁に存在している。(4-26d)～(4-28d)は(4-25d)と同様に、以前に存在しなかったものは、動作が行われ、変化が起きた後、存在主体として存在するようになった。前節で指摘したように、存在構文“L+V了+NP”では、認知主体は動作・変化の終了の点に注目する。“V了”は存在理由を表す。已然を表す連用修飾語は“V着”と共起したら、動作・変化の完了と実現に焦点を当てると考えられる。

また、連用修飾語だけではなく、特別なコンテキストがある場合、“V着”と“V了”とは置き換えられない。

- (4-29) a.\*屋子里 摆着 两张 桌子, 房间 一下子 就 变 拥挤 了。  
 b.屋子里 摆了 两张 桌子, 房间 一下子 就 变 拥挤 了。  
 (部屋 中 並べる+LE 2 量詞 机 部屋 急に ADV 変える 窮屈 LE)  
 (部屋にテーブルが2台並べられた。部屋はすぐ窮屈になった。)

- (4-30) a.\*合约 上 写着 我的名字, 你 可以 拿走 了。  
 b.合约 上 写了 我的名字, 你 可以 拿走 了。  
 (契約書 上 書く+Le 私の名前 あなた できる 持っていく LE)  
 (契約書に私の名前が書かれた。持って行っていいよ。)

- (4-31) a.\*几年没回家, 家里变化可大了。房间里安着新空调, 卫生间里铺着大理石。  
 b.几年 没 回家, 家里 变化 可 大 了。房间里 安了 新 空调, 卫生间 里 铺 了 大理石。  
 (数年 NEG 家に帰る 家中 変化 大きい LE 寝室 中 付ける+LE 新しい エアコン お手洗い 中 敷く+LE 大理石 )  
 (数年ぶりに実家に帰ると、実家の様子は大きく変わった。寝室に新しいエアコンが付けられて、お手洗いに大理石が敷かれていた。)

(4-32) a. 吸毒者 骨瘦如柴, 家徒四壁, 屋 里  
放着 一 张 破 床, 屋外 种着 一 小片 罂粟。

(BCC)

(麻薬常用者 やせて骨と皮だけになる 家財道具がない。 部屋 中  
 置く+Zhe 一 量詞 ADJ ベッド 部屋の外 栽培する+Zhe 一 量詞ケシ  
 (麻薬常用者はやせて骨と皮だけになるようだ。貧乏で家に家財道具がない。  
 部屋の中に、ぼろぼろのベッドが置いてあり、部屋の外にケシがす  
 こし栽培されている。)

b.\*吸毒者骨瘦如柴, 家徒四壁, 屋里放了一张破床, 屋外种了一小片罂粟。

(4-33) a. 领导们 推开 老工人的 家门 时 看到 的 是 一 幅 令人心酸  
 的 情景: 狭窄的 房 间 里, 没 有 一 样 像样的 家具, 炕头 坐着  
 年迈的 母亲, 炕梢 躺着 患病的 妻子。(BCC)

(リーダーたち 押し開ける ADJ ドア とき 見える の は 一 量詞 ADJ  
 場面: ADJ 部屋 中 なし 一 量詞 ADJ 家具 L 座る+Zhe  
 ADJ 母親 L 横になる+Zhe ADJ 妻)

(リーダーたちは労働者の家のドアを押し開いたとき、彼らは悲しい場面  
 を見ました: 狭い部屋にはきちんとした家具がなく、オンドルの片側に  
 高齢の母親が座っていて、病気の妻はオンドルの別の側に横になってい  
 る。)

b.\*领导们推开老工人的家门时看到的是一幅令人心酸的情景: 狭窄的房间里,  
 没有一样像样的家具, 炕头坐了年迈的母亲, 炕梢躺了患病的妻子。

(4-29)～(4-33)は複文である。まず、(4-29)～(4-31)を検討する。

(4-29b)、(4-30b)、(4-31b)の“V 了”は“V 着”に置き換えられない。(4-29b)で  
 は、「部屋は窮屈になった」という気持ちの変化があるため、通常その気持ちの変  
 化をもたらす何らかの動作や行為を伴うべきであるが、何らかの静的な状態を  
 伴うべきではない。(4-30b)は(4-29b)と同様である。「持って行ってはだめだ」と  
 いう状態から「持って行っていい」という状態になった理由は、「書く」という動  
 作が終わって、「私の名前」が書かれたためである。(4-31b)では、「数年ぶりに実

家に帰ると、実家の様子は大きく変わった」という前提があるため、後続の部分は必ず実家の変化を表す。存在構文“L+V 了+NP”では、認知主体は動作・変化の終点に注目する。また、前述したように、“V 了”は存在理由を表す。そのため、変化が含意される“V 了”は(4-29b)、(4-30b)、(4-31b)に用いられやすい。存在状態或いは存在方式を表す“V 着”は変化を含意しないため、(4-29a)、(4-30a)、(4-31a)に用いられにくい。次は(4-32)、(4-33)を見てみよう。

(4-32a)、(4-33a)の存在構文“L+V 着/了+NP”における“V 着”は“V 了”に置き換えられない。(4-32a)～(4-33a)のコンテキストは場面の状況を描写するものである。つまり、目の前の人物やものの存在状態や存在方式をありのままに描写するものである。変化があるかどうかに関心を持っていない。存在構文“L+V 着+NP”では、認知主体は動作・変化が終わった後、残される状態に注目する。“V 着”は存在状態や存在方式を表す。そのため、(4-32a)、(4-33a)では、動作・変化の終点に注目される“V 了”は用いられず、存在状態や存在方式を表す“V 着”が用いられる。

本節は存在構文“L+V 着/了+NP”における“V 着”、“V 了”の使用を制約する要素としての“一直(ずっと)”、“已经(すでに)”のような連用修飾語や特別なコンテキストなどの構文環境を考察した。その結果、次のことがわかった。

持続・経常的時間の幅を示す連用修飾語“仍(まだ、相変わらず)”、“一直(ずっと)”、“总是(いつも)”、“每天(毎日)”は、“V 着”と共起し、“V 着”が表す存在状態や存在方式が変わっていないことに焦点を当てる。それらの連用修飾語は、時間の幅を示すという点において、“着”の「線状視点」という認知視点と一致する。

“刚(たった今)”、“已(すでに)”、“又(また)”、“不知什么时候(いつの間にか)”のような已然を表す連用修飾語は、“V 了”と共起し、存在主体の存在理由が“V 了”が示す動作・変化に由来することを際立たせる。それらの連用修飾語は、動作・変化の終了を示すという点において、“了”の「点状視点」という認知視点と一致する。

存在構文“L+V 着/了+NP”における“V 着”、“V 了”のコンテキストに関して、変化の情報が含意される場合には、“V 了”を使いやすい。動作・変化の終了を示すという点において、このようなコンテキストも“了”の「点状視点」と一

致する。変化の情報が含意されず存在状態や存在方式をありのまま描写する場合には、“V 着”を使いやすい。時間の幅を示すという点において、このようなコンテキストも“着”の「線状視点」と一致する。

#### 4.6 まとめ

本章はまず、存在構文“L+V 着/了+NP”における動詞の語彙的意味と存在構文“L+V 着/了+NP”の「存在義」の関係から、存在構文“L+V 着/了+NP”における動詞と“着”、“了”との共起関係を制約する要因を考察するほかに、存在構文“L+V 着/了+NP”における“V 着”と“V 了”のそれぞれの役割を考察した。また、“着”と“了”それぞれの構文環境の違いを考察し、中国語の「動相形式」“着”の本質が「線状視点」であるという考え方の妥当性を検証した。考察と分析の結果、次のような成果が得られた。

第一に、仮定される時間軸上において始点、終点がない「線」で表示される動詞は“了”と共起できず、“着”と共起できる。“着”と共起する場合、“V 着”は存在主体が存在しているという静的な存在状態を表す。“了”としか共起できない動詞は“了”と共起したら、動作の終了に注目し、存在主体の存在理由を表す。

第二に、“着”と“了”の両方と共起できる動詞であれば、“V 着”の場合、存在構文の「存在義」は認知主体が直接に存在状態に注目して捉えたものである。一方、“V 了”の場合、存在文の「存在義」は認知主体が動作の終了の意味から推論して捉えたものである。言い換えれば、存在構文“L+V 着/了+NP”における“V 着”は残存結果の線状過程に焦点を当てるが、“V 了”は残存状態の始点に焦点を当てる。存在構文“L+V 着/了+NP”における“着”、“了”と共起する動詞の特徴は“着”の「線状視点」との“了”の「点状視点」と一致する。

第三に、持続・経常的時間の幅を示す連用修飾語“仍(まだ、相変わらず)”、“一直(ずっと)”、“总是(いつも)”、“每天(毎日)”は、“V 着”と共起し、“V 着”が表す存在状態や存在方式が変わっていないことに焦点を当てる。それらの連用修飾語は、時間の幅を示すという点において、“着”の「線状視点」という認知視点と一致する。“刚(たった今)”、“已(すでに)”、“又(また)”、“不知什么时候(いつの間にか)”のような已然を表す連用修飾語は、“V 了”と共起し、

存在主体の存在理由が“V 了”が示す動作・変化に由来することを際立たせる。それらの連用修飾語は、動作・変化の終了を示すという点において、“了”の「点状視点」という認知視点と一致する。

第四に、存在構文“L+V 着+NP”と存在構文“L+V 了+NP”の使い分けは、変化を指示するコンテキストにも制約される。変化の情報が含意される場合には、“V 了”を使いやすい。動作・変化の終了を示すという点において、このようなコンテキストも“了”の「点状視点」と一致する。変化の情報が含意されず存在状態や存在方式をありのまま描写する場合には、“V 着”を使いやすい。時間の幅を示すという点において、このようなコンテキストも“着”の「線状視点」と一致する。

## 第5章 “着”と“在”の違いから見る“着”の「線状視点」

前章は存在構文“L+V 着/了+NP”における“着”と“了”の違いから中国語の「動相形式」“着”の本質が「線状視点」であるという考え方の妥当性を検証した。「動相形式」“着”は進行を表す文にも用いられる。この用法の“着”は別の進行の形式の“在”とよく比べられる。本章は進行を表す文における“着”と“在”の違いから“着”の「線状視点」について検討する。

### 5.1 はじめに

現代中国語では、以下の例文(5-1a)～(5-1c)が示すように、“在”が動詞、介詞、時間副詞として用いられる。例文(5-1c)のように、“在”が時間副詞として用いられる場合には、“在 V”は事態の過程を表すことができる。この場合の“在”は進行の形式であると主張される先行研究がある(刘月华(1983)、金奉民(1991)、朱繼征(2000))。本章の研究対象は(5-1c)が示す時間副詞の“在”である。

(5-1) a.他 在 哪儿?他 在 家。(動詞)

(彼 いる どこ 彼 いる 家)

(彼はどこにいるの?家にいる。)

b.他 在 家 里 住 吗?(介詞)

(彼 介詞 家 中 住む 語気助詞)

(彼は家に住んでいるの?)

c.昨天 一整天, 我们 都 在 讨论 这个问题。(時間副詞)

(昨日 一日中 私たち ずっと Zai 論じる この 問題)

(昨日一日中、私たちはずっとこの問題について論じていた。)

時間副詞として使われる“在”と同じように、進行を表す文によく用いられる形式に“着”がある。次の(5-2)、(5-3)を見てみよう。

(5-2) a.外面 在 下 雨。

(外 Zai 降る 雨)

(外は雨が降っている。)

b.外面 下着 雨 呢。

(外 降る+Zhe 雨 Ne )

(外は雨が降っているよ。)

(5-3) a.A:你 在 干 什么?B:我 在 吃 饭。

(あなた Zai する 何 私 Zai 食べる ご飯)

(A : 何をしているの?B:ご飯を食べているよ。)

b.A:你 在 干 什么?\*B:我 吃着 饭。

(あなた Zai する 何 私 食べる+Zhe ご飯 )

例文(5-2)が示すように、「雨が降っている」という事態を表す文には、“着”と“在”の両方とも使える。例文(5-3)では“在吃饭”を“吃着饭”に置き換えると、きわめて不自然な文になり、もとの文とは異なる事態を表現するようになる。第2章では進行の概念を定義した上で、“着”は進行を表さないと指摘した。では、例文(5-2)のような進行を表す文における“着”はどのような役割を担っているのか。また、例文(5-3)の“在”を“着”に置き換えられない理由は何であろう。“在”と“着”の使用を制約している要因は何であろう。

本章は“着”と“在”を比較しながら、“着”の「線状視点」を考察する。

## 5.2 先行研究

本節は“在”と“着”の違いに関する先行研究を概観する。

陈月明(1999)は“着”を動作の進行と持続を表す“着<sub>1</sub>”と状態の持続を表す“着<sub>2</sub>”に分け、“着<sub>1</sub>”と“在”を比較し、以下の結論を導き出した。

“在”や“着”と共に起する動詞や述語成分は[+行為][+継続]という意味特徴を持っている。“在”は事態が進行中であることを表し、“着”は動作が持続中であることを表す。

しかし、陈月明(1999)は進行と持続の違いについて明確に説明していない。また、動作の持続と事態の進行中の違いも詳細に説明していない。

朱繼征(2000:40)は“在”と“着”の使い分けを以下のようにまとめている。

意味論から言うと、“在”と“着”は両方共ある条件の下で進行を表すことができる。しかし、“在”は動詞の外部環境を示すことによって進行を表すのに対し、“着”は動詞の内部状況を示すことによって進行を表す。したがって、文法的に見ると、“在”の焦点は常に動詞の外部状況に対応しており、“着”の焦点は常に動詞の内部状況に対応している。これは音声学上からも、その根拠をあげることができる。“在”を用いる文では、常に動詞の外部状況を表す文成分にストレスがかかり、“着”を用いる文では、常に動詞の内部状況を表す文成分にストレスがかかる。

朱繼征(2000)は内部状況、外部状況の立場から、“V 着”と“在 V”のそれぞれの役割を指摘した。しかし、外部状況と内部状況はどのように判断するのか。また、この指摘は、例文(5-3)における“在 V”が“V 着”に置き換えられない理由としての説明にならないと考えられる。

王学群(2007:90-91)は下記の観点を主張している。

“V 着”と“在 V”の重なり合う部分は、主に文の述語に用いられる用法の中の「動作の継続」である。“V 着”と“在 V”は動詞のタイプと関係する。“在 V”は動作動詞に集中しているのに対して、“V 着”は動きの少ない動詞または「付着・取り付け・接触」などの意味特徴のある動詞が多用される。特に動作動詞以外の場合、“在 V”より“V 着”のほうが多く見られる。また、“V 着”と“在 V”は役割分担が異なる。つまり、両者は重なり合う部分を持ちながらも、自分自身の守備範囲を持っているのである。また重なり合う部分にも意味的な相違が見られる。

しかし、“V 着”と“在 V”のそれぞれの役割分担に関して、王学群(2007:90-91)は詳細に説明していない。

尚新(2009:169-170)は認知言語学の視点から“在”と“着”が示す空間的な位置の対立を考察し、以下の結論を導き出している。

“在”を使う時、主体が注目しているのは“FRONT”である。“着”を使う時、主体が注目しているのは“BACK”である。これは中国語システムにおける事

態空間配置上の対立と言える。しかしながら、その対立は絶対的な関係ではなく、デフォルト関係である。例えば、場合によって、“着”の認知上の空間位置は“BACK”に位置づけられることができれば、“FRONT”に位置づけられることもできる。

(5-4) 许多 仆人 围着 繁漪，繁漪 不知 是 在 哭 还 是 在笑。(尚新 2009:168)

(多い 召使い 囲む+Zhe PSN PSN わからない は Zai 又は は Zai 笑う )

(繁漪は多くの召使いに囲まれて、泣いているのか笑っているのか分からないような顔をしている。)

(5-5) a.摄影机 在 不停地 转动。(陈月明 1999:11)

(ビデオカメラ Zai ADV 回る)

(ビデオカメラが絶えず回っている。)

b.摄影机 不停地 转动着。(陈月明 1999:11)

(ビデオカメラ ADV 回る+Zhe)

(ビデオカメラが絶えず回っている。)

尚新(2009)によれば、例文(5-4)が示すように、“在”と“着”がある文に同時に使われる場合、“围着(囲まれて)”という状態は背景として解釈され、“在哭还是在笑(泣いているか笑っているか分からない顔をする)”は前景として解釈される。すなわち、“在”と“着”はそれぞれ“FRONT-BACK”という空間構造の“FRONT”と“BACK”に位置付けられることである。しかし、例文(5-5a)と(5-5b)のように、“在”と“着”が同時に使われない場合、“FRONT-BACK”という空間構造対立説は(5-5a)の“在”と(5-5b)の“着”の使い分けを説明しにくいと考えられる。

孙瑞・李丽虹(2010:77-78)は“在”と“着”の文終了の観点から“在”と“着”の違いを考察し、以下の結論を導いている。

“在”と“着”はそれぞれ異なる文終了機能を持っている。“在”文は一般的には「独立文」である。静態を表す“着”文も通常「独立文」である。ただし、動態を表す“着”文は「非独立文」である。“在”は「動相」を表すと同時にテンス(時制)をも表す。そのため、“在”文は「独立文」である。“着”は「動相」だけを表し、テンス(時制)は表さないため、動態を表す“着”文は「非独立文」である。

しかし、参照時間“3点”が付与されている(5-6)は参照時間と事態時間のテンス(時制)的關係を示すが、依然として「非独立文」である。それはなぜであろうか。

(5-6) \*昨天 下午 3点, 我 吃着 饭。  
(昨日 午後 3時 私 食べる+Zhe ご飯)

また、“在”、“着”が時間とどのように関係しているのであろうか。孫瑞・李丽虹(2010:77-78)はこれらの問題について説明していない。

これまでの先行研究を概観した結果、“在”と“着”の違いはさまざまな立場から研究されてきたが、上記が示した問題はまだ解明されていないようである。次節では、これらの問題を検討しながら、“在”と“着”の本質の違いを考察する。

### 5.3 “着”、“在”と時間との関係

本節は“着”、“在”と時間との関係性を明らかにした上で、朱繼征(2000)が指摘している内部状況と外部状況を再考する。また、“着”、“在”の本質を確認した上で、例文(5-3)において“在”を“着”に置き換えられない理由を説明する。

本論文は、2.3 節で進行を「現実的な時間軸上の参照時間において、事態が正に発生していること」と定義した。時間副詞の“在”は進行の形式として時間と緊密に関わっている。下記の例文を考察しよう。

(5-7) 冬冬 在 吃 早餐。  
(PSN Zai 食べる 朝ごはん)  
(冬冬はご飯を食べている。)

(5-8) 昨天 早上 7 点 我 在 吃 早餐。

(昨日朝 7 時 私 Zai 食べる 朝ごはん)

(昨日の朝 7 時、私は朝ごはんを食べていた。)

例文(5-7)～(5-8)は“吃早餐(朝ごはんを食べる)”という行為が特定な参照時間に発生していることを表す。(5-8)では、明確な参照時間を表す時間詞“昨天早上 7 点(昨日の朝 7 時)”がある。(5-7)では、明確な参照時間詞がない。陈忠(2009)によると、文には明確な時間詞がない場合、発話者の発話時点は“在”が示す参照時間として扱われる。つまり、(5-7)では、参照時間は発話時点である。発話時点に、“吃早餐(朝ごはんを食べる)”という行為が発生していることを表す。

1.4.2 節ですでに時間軸を仮定される時間軸と現実的な時間軸に分けている。本章は現実的な時間軸 T と仮定される時間軸 T' を区別して、異なる線(実線の T と破線の T')で表示する。

では(5-7)、(5-8)の図式を見てみよう。

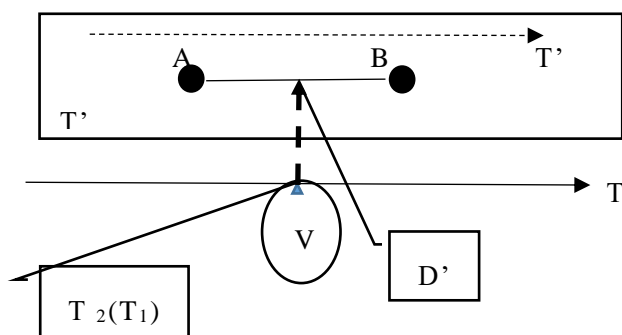


図 5-1 (5-7)の図式

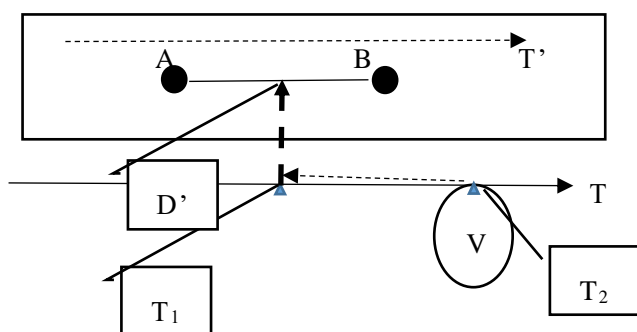


図 5-2 (5-8)の図式

㊦は認知主体(viewer)を示す。四角の枠の中は動詞に関わる全体の事態(動作・作用が始まる前の状態から終わった後の状態まで)を示す。A は動作の始点、B は動作の終点を表す。この過程は仮定される時間軸(T')上に展開されている。T<sub>2</sub> は発話時点、T<sub>1</sub> は参照時間を示す。D'は認知主体が参照時間で捉えた事態のある局面を示す。

(5-7)では、発話時点 T<sub>2</sub>(T<sub>1</sub>)と参照時間 T<sub>1</sub>(T<sub>2</sub>)が同様であり、認知主体は現実的な時間軸上の発話時点 T<sub>2</sub>(T<sub>1</sub>)に、参照時間 T<sub>1</sub>(T<sub>2</sub>)の事態(“吃(食べる)”という動作が行われていること)を捉える。(5-8)では、認知主体は現実的な時間軸上の発話時点 T<sub>2</sub>に、参照時間 T<sub>1</sub>の事態(“吃(食べる)”という動作が行われていること)を捉える。(5-7)、(5-8)において参照時間 T<sub>1</sub>で捉えた局面 D'はきっちり事態の始点 A と終点 B の間にあることを際立たせる。

本論文は 2.4 節で朱継征(2000)が提起した進行相における“着”を分析した。また、“着”が進行を表すという誤解が発生する理由は認知主体が発話時点で捉えた事態の局面は“V 着”が表す「線状過程」に存在するためであると指摘した。ここで詳しく説明する。例文(5-9)を見てみよう。

- (5-9) 甲：去            吃饭            吗？  
           (行く    ご飯を食べる    語気助詞)  
           (ご飯を食べに行く?)

乙：我 在 吃(着) 呢。(\*我吃着)

(私 Zai 食べる+(Zhe) Ne)

(今正に食べているよ。)

王学群(2015:224)によると、“呢”は基本的に「オシエ」構文<sup>36</sup>に用いられ、話し手(書き手)が聞き手(読み手)に伝えるある事柄(又はその一部分)に対する、聞き手(読み手)の認識の度合いを高める働きがある。“呢”は会話文に使われ、発話現場に強く依存している。例文(5-9)のように、“在”、“呢”がある場合、発話時点は事態の参照時間として認識される。

例文(5-9)が示すように、“在”、“呢”がつかない場合、“我吃着”は答えにならない。“吃着”と“在吃着呢”をそれぞれ図式化にすると、下記のとおりである。

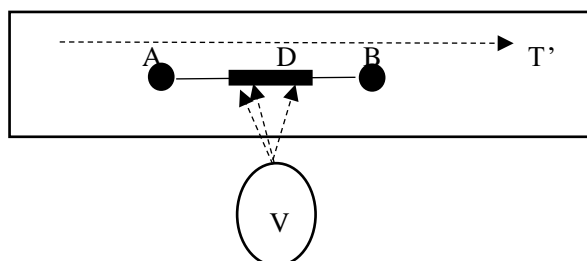


図 5-3 “吃着”の図式

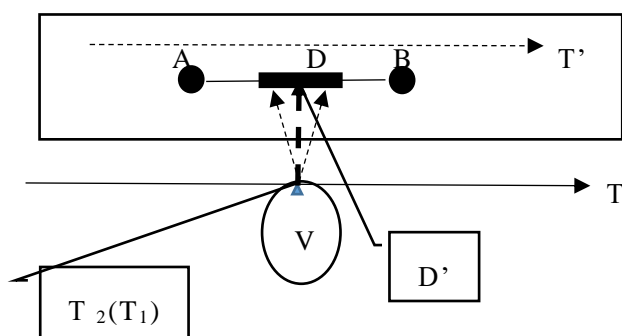


図 5-4 “在吃着呢”の図式

<sup>36</sup> 王学群(2015:211)からわかるように、「オシエ」構文とは、話し合いの中で話し手の知らない情報を聞き手に教えてもらう場合の「オシエテモラウ」構文と話し手の知っている情報や自分自身の考えを聞き手に伝える場合の「オシエアゲル」構文である。

D は、認知主体が“着”という視点から捉えた“吃着”という動態のプロセスまたは「線状過程」を示す。ほかの表示は図 5-1、5-2 と同様である。

“呢”が付かない“吃着”の場合、認知主体は“着”の視点から“吃”という動作の内部過程を捉える。捉えた「線状過程」は仮定される時間軸上に展開しているが、現実的な時間との関係は不明である。つまり、“吃着”が示す「線状過程」自体が現実的な時間において位置不明である。図 5-3 の D が示す「線状過程」は朱継征(2000)が指摘した動詞の内部状況である。

“在”、“呢”が付いている“在吃着呢”の場合、“在”、“呢”は現実的な参照時間を提供する。つまり、“吃着”が示す「線状過程」を現実的な時間に関係付ける。そのため、図 5-4 の  $T_2(T_1)$  が朱継征(2000)が指摘した動詞の外部状況である。

では、“在”は参照時間を提供する機能のみを持っているのか。参照時間があれば、“吃着”は進行の意味を表すのであろうか。(5-6)を再掲する。

(5-6') \*昨天 下午 3 点, 我 吃着 饭。

(昨日 午後 3 時 私 食べる+Zhe ご飯)

例文(5-6')には、参照時間を表す時間詞“昨天下午 3 点(昨日午後 3 時)”があるが、進行を表す自然な独立文にならない。

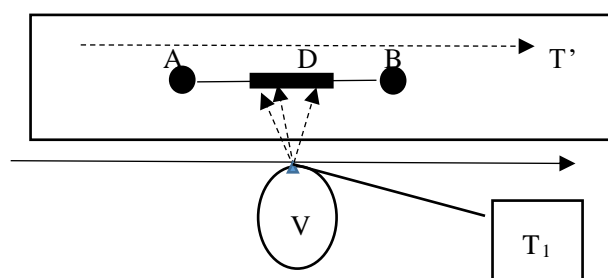


図 5-5 (5-6')の図式

図 5-5 の表示は図 5-3、5-4 と同様である。

(5-6')では、参照時間  $T_1$  があるものの、参照時間に事態が発生していることを表すことができない。それは、現実的な時間軸上の参照時間  $T_1$  を仮定された時間軸上において展開される事態に関連付ける機能を持つ要素がないためである。つまり、“在”は参照時間が発話時点であることを示す機能を持つだけでなく、現実的な時間軸上の参照時間  $T_1$  を、仮定された時間軸上において展開される事態に関連付ける機能も持つ。“在”が示す機能を図 5-4 で表示すれば、現実的な時間軸上の参照時間  $T_1$  と仮定される時間軸上の「線状過程」D'の対応関係であるということが分かる。(5-6')が示すように、参照時間  $T_1$  があるものの、参照時間  $T_1$  と「線状過程」D'の対応関係を示す要素がないと、進行を表す独立文にならない。

図 5-1～5-5 を考察した結果、“在”は参照時間が発話時点であることを示す機能、現実的な時間軸上の参照時間を仮定される時間軸上において展開される事態に関連付ける機能がある。明確な参照時間がない場合では、“在”はこの二つの機能を持っている。明確な参照時間がある場合では、“在”は現実的な時間軸上の参照時間を仮定される時間軸上において展開される事態に関連付ける機能のみを持っている。“在”の場合、参照時間に事態が存在するかどうかに関心を持つ。この意味で、“在”は現実的な時間軸上の参照時間の「点」の認知様式を際立たせる。その一方、“V 着”は仮定される時間軸上において展開される「線状過程」であるため、“着”は現実的な時間軸上の参照時間と関係せず、仮定される時間軸上の「線」を際立たせる。

“着”と“在”がそれぞれの特徴を持つため、“着”と“在”が表す事態は聞き手や読み手に与えるイメージが異なる。また、“着”、“在”と共起する様態描写もそれぞれ特徴がある。次節は、“在”と“着”が表す事態が聞き手や読み手に与えるイメージ、“着”と“在”と共起する様態描写から、“着”と“在”の違いを考察する。

#### 5.4 「録画」と「写真」のイメージから見る“着”と“在”の違い

本節は、進行を表す文における“着”と“在”が表す事態が聞き手や読み手に与えるイメージを考察する。例(5-10)、(5-11)を見てみよう。

(5-10) 水龙头 在 滴水。

(水道の蛇口 Zai 滴る)

(水道の蛇口から水が滴っている。)

(5-11) 水龙头 一滴一滴地 滴着水。

(水道の蛇口 ADV 滴る+Zhe)

(水道の蛇口から水が一滴一滴と滴っている。)

例文(5-10)と例文(5-11)は両方とも水が滴っていることを表す。しかし、この2つの例文は聞き手や読み手に異なるイメージを与えられ考えられる。

“在”が含まれる例文(5-10)は、発話時点を参照時間にして、「水道の蛇口」という空間を明示している。例文(5-10)の“在”が働くことから、発話者は例文(5-10)の動作を特定の時間と空間と結び付け、特定の時点と場所において事態が発生していることを認識するようになる。聞き手または読み手はこの文を聞いたり、読んだりした場合、頭の中にすぐに以下の図 5-6 が示す「写真」のようなイメージが生じる。



図 5-6 写真



図 5-7 録画

逆に言えば、もし図 5-6 が示すような「写真」が存在するなら、必ずその「写真」を撮った時間と空間があるはずである。

しかしながら、例文(5-11)は、図 5-6 が示す「写真」のようなイメージを聞き手または読み手に与えない。例文(5-11)は水が一滴一滴と滴っているという持続の状態を表す。例文(5-11)に対する反応として聞き手や読み手の頭に映し出される

のは図 5-6 の静止画より、むしろ図 5-7 の録画に相当すると言ったほうがより適切である。例文(5-11)の“着”が働くことから、水が一滴一滴と滴っている状態がビデオカメラで録画されたものとなり、その録画が聞き手や読み手の頭に再現するようになるのである。

ここで注意すべき点は、“在”文は聞き手または読み手に写真的イメージを与えやすいため、“在”文は瞬間の事態を表すという誤解が発生しやすい。実は、陳月明(1999:10)によれば、“在”と共起する動詞は「持続」の意味特徴を持っているので、“在”文はもともと瞬間の事態を表さず、持続する事態の進行を表すのである。つまり、一般的には、“在”と共起する動詞の内部過程は仮定される時間軸上の時間的幅をもつ「線」で表される。また、5.3 節では、“在”は現実的な時間軸上の参照時間の「点」的認知様式を際立たせると指摘した。要するに、“在”文において、“在”は現実的な時間軸上の参照時間という「点」を際立たせ、“在”と共起する動詞は仮定される時間軸上の時間的幅の「線」を際立たせる。“在”は現実的な時間軸上の参照時間の「点」的認知様式を際立たせることと、“在”文が持続する事態ことが異なるレベルの主張であり、矛盾しないと考えられる。

以上の分析に基づけば、認知主体に与えるイメージから見ると、“在”文は写真的イメージを与えるのに対して、“着”文は録画的イメージが与えるということが分かる。つまり、“在”は現実的な時間軸上の参照時間の「点」を際立たせるのに対して、“着”は仮定される時間軸上の「線」を際立たせるということである。ところで、本章は、“着”と“在”の両方が含まれる“在 V 着”構造のイメージを本章の研究対象から除外する。

## 5.5 共起する様態描写から見る“着”と“在”の違い

本節は“V 着”と“在 V”と共起する様態描写から“着”と“在”の違いを考察する。まず例文を見よう。

(5-12) a. 她 手舞足蹈, 时怒时笑, 时而低声细语, 时而慷慨激昂地 讲着  
《岳飞全传》。

(彼女 連用修飾節 話す+Zhe  
『岳飛全伝』)

(彼女は怒ったり、笑ったり、ある時には小聲で、またある時には意気盛んに『岳飛全伝』について話している。)

b.?她在手舞足蹈, 时怒时笑, 时而低声细语, 时而慷慨激昂地讲《岳飞全传》。

(5-13) a. 孩子们 手拉手, 排着队, 有说有笑, 高高兴兴地  
在大路上走着。

(子供たち 手を繋ぐ 並ぶ+Zhe 連用修飾節  
大通りで 歩く+Zhe)

(子供たちは並んで手を繋ぎ、話したり、笑ったりして、楽しく大通りを歩いている。)

b.?孩子们在手拉手, 排着队, 有说有笑, 高高兴兴地在大路上走。

(5-14) a. 我一追她, 她就 像个耗子似的在家具  
上面跳来跳去, 来来回回上上下下地 跑着。

(私 追いかける 彼女 彼女 すぐ  
連用修飾節 走る+Zhe)

(私が彼女を追いかけると、彼女はネズミのように家具の周りをぐるぐる回ったり、家具に登ったり飛び降りたりしながら走っている。)

b.?我一追她, 她就像个耗子似的在家具上面跳过, 在来来回回上上下下地跑。

(5-15) a.他 两手 捧着 大碗, 默不作声狼吞虎咽地 喝着  
碗里的 一点 剩粥。

(彼 両手 持つ+Zhe 大碗 黙る 連用修飾節 飲む+Zhe  
お碗の中少し 残ったお粥)

(彼は大きなお碗を手にとって、お碗に残ったお粥を静かに飲み込んで  
いる。)

b.? 他两手捧着大碗, 在默不作声狼吞虎咽地喝碗里的一点剩粥。

(5-16) a.他 背着 一个 大背篓, 一只手 拄着 拐,  
一瘸一拐, 身子摇摇晃晃, 步路蹒跚地 在路上 走着。

(彼 背負う+Zhe 一つ 大きなかご 片手 つく+Zhe 松葉杖  
連用修飾節 道で 歩く+Zhe)

(彼は大きなかごを背負って、片手で松葉杖をつき、びっこを引いて、よ  
ろめきながら道を歩いている。)

b.?他背着一个大背篓, 一只手拄着拐, 一瘸一拐, 身子摇摇晃晃, 在步路蹒  
跚地在路上走。

(5-17) a.他 像梦游似的, 摇摇晃晃地 走着, 嘴里还 在  
嘟嘟哝哝地 说着 什么。

(彼 まるで 連用修飾節 歩く+Zhe 口の中 まだ Zai  
ADV 話す+Zhe 何か)

(彼は夢遊病のように体を揺らして歩いている。口では何かぶつぶつ言っ  
ている。)

b.?他像梦游似的, 在摇摇晃晃地走, 嘴里还在嘟嘟哝哝地说着什么。

(5-12)～(5-17)が示すように、“手舞足蹈, 时怒时笑, 时而低声细语, 时而慷慨  
激昂地(怒ったり、笑ったり、ある時には小声で、またある時には意気盛んに)”、  
“有说有笑, 高高兴兴地(話したり、笑ったりして、楽しく)”、“像个耗子似  
的在家具上面跳来跳去, 来来回回上上下下地(ネズミのように家具の周りをぐる  
ぐる回ったり、家具に登ったり飛び降りたりしながら)”、“默不作声狼吞虎咽

地(静かに飲み込む)”、“一瘸一拐，身子搖搖晃晃，步路蹣跚地(びっこを引いて、よろめきながら)”、“像夢游似的，搖搖晃晃地(夢遊病のように体を揺らす)”のような様態描写の連用修飾節は“V 着”とよく共起する。しかしながら、これらの様態描写の連用修飾節と“在 V”と共起する文は不自然である。

一般的に言えば、様態描写の連用修飾節は動作主が行う動作の展開過程を描写するものが多い。特に、(5-12)～(5-16)が示すような様態描写の連用修飾節はいくつかの連用修飾語からなっているため、時間的幅が際立つ文成分として理解されやすい。そのため、これらの様態描写は時間軸上の時間的幅に関する描写、つまり「線状様態描写」と理解してもかまわない。“着”は、「線状過程」を捉える「線状視点」であり、「線状様態描写」の文成分と相性がよいため、「線状様態描写」の文成分と共起しやすい。

これらの様態描写の連用修飾節が“V 着”と共起すると、聞き手や読み手の頭に映し出されるのはいくつかの連続している画面からなる録画のようなイメージである。これらの様態描写の連用修飾節は“V 着”とよく共起できるところは、“着”という視点から捉えた動作の展開過程が仮定される時間軸上における幅をもつということの根拠の一つであると考えられる。

しかしながら、前述したように、“在”は現実的な時間軸上の参照時間の「点」的認知様式を際立たせる。「線状様態描写」の文成分と相性がよくないため、「線状様態描写」の文成分と共起しにくい。

このように、様態描写との共起関係からも、“着”が「線状視点」であることとすることがうかがえる。

## 5.6 まとめ

本章は進行を表す文における“着”と“在”の違いを考察して、以下の結論を導き出した。

第一に、“在”は参照時間が発話時点であることを示す機能と、現実的な時間軸上の参照時間を仮定される時間軸上において展開される事態に関連付ける機能がある。“在”は現実的な時間軸上の参照時間の「点」を際立たせる。その一方、

“着”は現実的な時間軸上の参照時間と関係せず、仮定される時間軸上の「線」を際立たせる。

第二に、聞き手や読み手に与えるイメージから分かるように、“在”文は写真的イメージを与えるのに対して、“着”文は録画的イメージを与える。

第三に、様態描写は、時間的幅を持つ動作の展開過程を描写するのに用いられやすいので、“**V** 着”が表す「線状過程」を修飾しやすく、“**V** 着”と共起しやすい。その一方、現実的な時間軸上の参照時間の「点」を際立たせる“在 **V**”と共起しにくい。様態描写と“**V** 着”、“在 **V**”との共起関係は、“在”が現実的な時間軸上の参照時間の「点」を際立たせ、“着”は仮定される時間軸上の「線」を際立たせるということを示す。

## 第6章 “V着”の“完句成分”から見る“着”の「線状視点」

前章では“着”は現実的な時間軸上の参照時間と関係せず、仮定される時間軸上の「線」を際立たせるということを指摘した。そのため、“V着”を使う場合、“呢”、“在”のような“V着”を伴うフレーズを現実的な時間軸と関連付ける要素がよく見られる。本章は“V着”を伴うフレーズを独立文として成立させる要素、つまり、“V着”を伴うフレーズを完結させる機能を持つ要素を考察する。

### 6.1 はじめに

钱乃荣(2000:5)は“着”は進行を表すことができないと指摘している。さらに、“着”が進行を表すことができないため、“他们正跳着舞(彼らはダンスしているところだ)”、“他们跳着舞呢(彼らはダンスしているよ)”、“他们快乐地跳着舞(彼らは楽しそうにダンスしている)”のような文は成立するが、“他们跳着舞”というフレーズは文として成立しないと、钱乃荣(2000:5)は指摘している。

钱乃荣(2000:5)によると、“他们跳着舞”というフレーズが文として成立しない理由は“着”が進行を表さないためである。しかしながら、钱乃荣(2000:5)はこの点の根本的な理由に関して十分な説明をしていない。なぜ“V着”を伴うフレーズは“呢”、“在”と共に起する場合に、はじめて完全な文として成立するのであろうか。また、次の例文が示すように、“呢”、“在”以外にも、他の要素を加えるとそのフレーズが文として自然になる場合がある。

(6-1) a.?他吃着晚饭。(=(2-20))

- b.他 狼吞虎咽地 吃着 晚饭。  
(彼ら ADV 食べる+Zhe 晩ご飯)  
(彼はガツガツと夕飯を食べている。)

(6-2) a.?他养着狗。(=(2-21))

- b.他 养着 50 只 狗。  
(彼 飼う+Zhe 50 量詞 犬 )  
(彼は犬を 50 匹飼っている。)

(6-3) a.?他们开着会。

b.他们 开着会，外面 下起雪来 了。(=(2-19))

(彼ら 会議をする+Zhe 外 雪 降り始める LE)

(会議中、雪が降り出した。)

钱乃荣(2000:5)が指摘している例文と同様に、例文(6-1a)、(6-2a)、(6-3a)が文として自然に成立するためには、例文(6-1b)、(6-2b)、(6-3b)のように、それぞれ“狼吞虎咽地(ガツガツと)”、“50 只(50 匹)”、“外面下起雪来了(雪が降り出した)”という要素を加える必要があると考えられる。

この点に関しては、下地早智子(2011)は“着”はどのような動詞に後続してもそれだけでは独立文として安定せず、後に主文となる別の動詞句を要求すると指摘している。しかし、その理由について、下地早智子(2011)は説明していない。

前章では、“在”は現実的な時間軸上の参照時間を示す機能と、現実的な時間軸上の参照時間と仮定される時間軸上において展開される事態を繋げる機能があることを明らかにした。つまり、参照時間に、対応している事態が存在するかどうかに関心を持つことを明らかにした。その一方、“着”は現実的な時間軸上の参照時間と関係せず、仮定される時間軸上の「線」を際立たせる。では、“着”が現実的な時間軸上の参照時間との無関係であることはわかったが、“呢”、“在”、“狼吞虎咽地(ガツガツと)”、“50 只(50 匹)”、“外面下起雪来了(雪が降り出した)”という要素の存在とどのような関係があるのであろう。

本章では、主に上記のような“V 着”を伴うフレーズに付加することで文を完結させる機能を持つ要素を考察する。

## 6.2 文と“完句成分”

本節はまず本論文における“完句成分”という概念を定義する。

文とは、一つの終止した言明を表す言語表現単位である。これまで中国語文法では、さまざまな角度から文が研究されてきた。胡明杨・劲松(1989:48)は文とフレーズを区別するために、フレーズを 2 種類に分けている。一つは独立フレーズであり、もう一つは非独立フレーズである。独立フレーズは文あるいは独立文としても扱われる。

(6-4) 我是中国人。

(私 は 中国人)

(私は中国人です。)

(6-5) a.?天气热。

b.天气 不 热。/天气 热，我 就 不 去 了 吧。(胡明杨・劲松 1989:50)

(天気 NEG 暑い 天気 暑い 私 では 行かない Le 語気助詞)

(暑くない。/暑いから、私は行かないと思うけど。)

(6-6) a.?我们吃过晚饭。

b.我们 没 吃 过 晚饭。(胡明杨・劲松 1989:49)

(私たち NEG 食べる Guo 晩御飯)

(晩ご飯はまだ食べていない。)

例文(6-4)が示すように、特定のコンテキストがなくても、平叙のイントネーションをつければ、フレーズは独立した文になれる。それに対して、例文(6-5a)と(6-6a)のようなフレーズは、例文(6-5b)と(6-6b)が示す特定のコンテキストに置かなければ、独立した文として成立しにくい。例文(6-5a)と(6-6a)は、特定のコンテキストがなく、平叙のイントネーションで発話される場合、発話がまだ終わらない感じを聞き手に与える、独立した文としては成立しない。

贺阳(1994:28)は胡明杨・劲松(1989:48)の研究をふまえ、文を“独立句(独立文)”と“语境句(コンテキスト文)”に分けてもよいほか、“陈述句(平叙文)”と“非陈述句”(非平叙文)に分けてもよいと指摘している。

(6-7) 小丽 长 得 很 漂亮。(贺阳 1994:28)

(PSN 成長する なる とても きれい)

(麗ちゃんはとてもきれいだ。)

(6-8) 喝茶！（问句“你喝什么？”的答语）(贺阳 1994:28)

(飲む お茶)

(お茶を飲む！)（「何を飲む？」の答え）

(6-9) a. 小丽 长 得 很 漂亮。(=(6-7))

(PSN 成長する なる とても きれい)

(麗ちゃんはとてもきれいだ。)

b. 老王 休息?(贺阳 1994:29)

(PSN 休む)

(王さんは今休んでいるの?)

c. 大家 抓住 绳子！(贺阳 1994:29)

(皆さん 掴む ロープ)

(皆さん、ロープをしっかり掴んでください！)

d. 干得漂亮！（贺阳 1994:29）

(する 助詞 よい)

(よくできた！)

贺阳(1994:28)からわかるように、例文(6-7)のように、コンテキストに頼らず、独立した文として存在しているのは“独立句(独立文)”であり、例文(6-8)のように、コンテキストの助けによって成立するのは“语境句(コンテキスト文)”である。また、贺阳(1994:28)は、文を例文(6-9a)のような“陈述句(平叙文)”と疑問文(6-9b)、命令文(6-9c)、感嘆文(6-9d)のような“非陈述句(非平叙文)”に分けている。

さらに、贺阳(1994:28)は、胡明杨・劲松(1989:48)が指摘している非独立フレーズを独立させる部分を“完句成分(文を完結させる要素)”と定義している。

(6-10) 完句成分是一个不依赖语境或上下文支撑的句子通常必须具有的结构成分，它具有使一个语言表达式能够独立成句的完句功能，它是句法结构的成句条件。

(“完句成分”はコンテキストに頼らずに成立する文が必ず備えている構文要素であり、あるフレーズを独立文にする機能を持ち、ある文構造を成立させるための条件である。)(賀陽 1994:28)

賀陽(1994:28)の見解を踏まえ、金延恩(1999:10)は“一个公认的能成立的句子中除句干之外的成分为完句成分”(成立すると認められる文において、中核述語以外の部分は“完句成分”である)と指摘している。また、“语境句(コンテキスト文)”は中核述語＋特定のコンテキストであり、“独立句(独立文)”は中核述語＋“完句成分”であると指摘している。

王玉华(2004:70)は“完句成分”を“不依赖语境和上下文的前提下，能够保证一个句法结构齐全的语言结构形成一个合格的句子的必需成分”(コンテキストに頼らないという前提のもとで、文構造が揃っているフレーズを容認度の高い文として成立させる要素である)と定義している。

また、“完句成分”の範疇に関して、賀陽(1994:31)は、中国語では、イントネーション以外に、助詞、副詞、時間詞、否定表現、助動詞、数量詞、連用修飾語、補語などの要素も文を完結させる機能があると指摘している。さらに、“完句成分”をイントネーション、語気、否定、モダリティ、意志、時制、動相、語彙的アスペクト、程度、数量など 10 種類に分けている。

本章は賀陽(1994:27)、金延恩(1999:10)、王玉华(2004:70)の見解を踏まえ、本論文における“完句成分”を下記のように定義する。

[本論文での“完句成分”の定義]

“完句成分”とは、コンテキストに頼らず文を完結させるために必要な、中核述語以外の要素である。

### 6.3 “着”と“完句成分”

本節は“着”と“完句成分”との関係および、“V 着”を伴うフレーズを文にさせる“完句成分”が存在する理由を明らかにする。

賀陽(1994:31)、金延恩(1999:12)は「動相形式」“着”が時制と動相の範疇の“完句成分”の一つであると主張している。郭彦成・洪淼(2000:98)は中国語の時制と

動相の範疇における“完句成分”に“着”、“了”、“过”があると指摘している。以下の例文を見てみよう。

(6-11) a.?山顶上笼罩浓雾。

b.山顶 上 笼罩着 浓 雾。(贺阳 1994:34)

(山顶 上 立ちこむ+Zhe 濃い 霧 )

(山頂で霧が立ち込めている。)

(6-11)が示すように、動詞フレーズに“着”を加えれば、自然な文として成立する。しかしながら、次の(6-12)～(6-17)が示すように、“着”が加えられていても、まだ発話は完結しておらず何か物足りない感じを聞き手に与える。

(6-12) a.?墙上挂着画。

b.墙上 挂着 一 幅 画。(=(4-17))

(壁に 掛ける+Zhe 1 量詞 絵 )

(壁には絵が 1 枚掛かっている。)

(6-13) a.\*他养着狗。(=(6-2))

b.他 养着 50 只 狗。

(彼 飼う+Zhe 50 量詞 犬 )

(彼は犬を 50 匹飼っている。)

(6-14) a.?他手里拿着毛衣。

b.他 手里 拿着 刚 买回来 的 毛衣。

(彼 手元 持つ+Zhe 先 買ってくる の セーター)

(彼は買ってきたばかりのセーターを手を持っている。)

(6-15) a.\*他吃着晚饭。(=(6-1))

- b.他 狼吞虎咽地 吃着 晚饭。  
(彼ら ADV 食べる+Zhe 晩ご飯)  
(彼はガツガツと夕飯を食べている。)

(6-16) a.?王强拿着步枪。

- b.王强 拿着 一 支 步枪。(贺阳 1994:34)  
(PSN 持つ+Zhe 1 量詞 銃)  
(王強は銃を1本持っている。)  
c.王强 拿着 步枪 走 了 进来。  
(PSN 持つ+Zhe 銃 歩く Le 入ってくる)  
(王強は銃を持って入ってきた。)

(6-17) a.?他们开着会。

- b.他们 开着会， 外面 下起雪来 了。(=(6-3))  
(彼ら 会議をする+Zhe 外 雪降り始める LE)  
(会議中、雪が降り出した。)

(6-12b)、(6-13b)、(6-14b)、(6-15b)、(6-16b)が示したように、“一幅(一枚)”、“50 只(50 匹)”、“刚买回来的(買ってきたばかりの)”、“一支(一本)”などの連体修飾語や“狼吞虎咽地”(ガツガツと)のような連用修飾語が加わることで、自然な文として成立する。また、(6-16c)、(6-17b)が示したように、動詞フレーズを加えることで、“V<sub>1</sub> 着 V<sub>2</sub>”、“V<sub>1</sub> 着, V<sub>2</sub>”構文、“V<sub>1</sub> 着, V<sub>2</sub> 着…”のような構文になる場合、自然な文として成立する。要するに、“着”は“完句成分”としての機能はきわめて弱く、他の要素を加えないと、独立文として成立しにくいと考えられる。

では、なぜ“着”は“完句成分”としての機能が弱いのであろうか。また、ほかの要素を加えないと、“V 着”を伴うフレーズはまだ終わっていない感じを与える理由は何であろう。

郭锐(2015:440)は「現代中国語において、現実世界と繋がっている平叙文は、参照時間が必ず必要である。参照時間は外部参照時間と内部参照時間に分けられる。外部参照時間は文が表す事態を現実世界に位置づける。内部参照時間は文の内部状況の時間関係のみと繋がり、現実世界に位置づけない。単文には、外部参照時間が必ず必要であり、内部参照時間はなくてもかまわない」と指摘している。郭锐(2015:440)の見解からわかるように、“了<sub>i</sub>”が付いている動詞フレーズが独立文として成立しない理由は外部参照時間がないからである。

郭锐(2015)が指摘した参照時間に関して、竟成(1996:4)はすでに容認される「独立文」が成立する際には、さまざまな条件が必要となり、その中で、直接的に、或いは間接的に表される時制が非常に重要な条件となるという見解を示している。Tang&Lee(2000:9)も中国語の文法には、文の成立を制約しているのは時制定位(tense anchoring)と焦点定位(focus anchoring)であると指摘している。顾阳(2007:28)は現実において、発話された事態や状態が必ず特定の時間と空間に位置づけられ、つまり、時制を示さなければならないが、そうでなければ、その事態や状態が指示する命題の価値がなくなると指摘している。郭锐(2015)、竟成(1996:4)、Tang & Lee(2000:9)、顾阳(2007:28)が言及している外部参照時間も、特定の時間と空間も、ある発話やフレーズを現実世界に位置づける機能、即ち、「時空位置づけ」を行う機能を持つと考えられる。

第3章から第5章まで、“着”は認知主体が事態を考察する認知視点として、仮定される時間軸上における幅をもつ「線」という特徴があることを検証した。また前章で、“着”は現実的な時間軸上の参照時間と関係せず、仮定される時間軸上の「線」を際立たせると説明した。郭锐(2015)が指摘した“了<sub>i</sub>”と同じように、“V着”を伴うフレーズが独立文として成立しない理由は外部参照時間がなく、現実世界に位置づけられないためであると考えられる。つまり、“着”は現実的な時間軸上の参照時間と関係がないため、“着”の認知視点から見た“V着”の「線状過程」は現実的な時間軸上に位置づけることができない。何らかの“完成分”を加えると、“V着”の「線状過程」を現実的な時間軸と関連付け、“V着”に「現実性」を与え、“V着”を伴うフレーズを独立文にさせる。つまり、“V着”を伴うフレーズに時空位置づけの機能を果たす要素が加えられると、“V着”を

伴うフレーズは独立文として成立する。次節は“V 着”を時空に位置づけるための“完句成分”を詳細に分析する。

#### 6.4 “V 着”を伴うフレーズを独立文として完結させる“完句成分”

6.2 節で指摘したように、本章における“完句成分”は「コンテキストに頼らず、文を完結させるために必要な中核述語以外の要素」である。本節では、地の文と会話文の“陈述句(平叙文)”において、“V 着”を伴うフレーズを独立文として完結させる“完句成分”を考察対象とする。前節の(6-12)～(6-17)と钱乃荣(2000:5)で取り上げた“V 着”を伴うフレーズを独立文として完結させる“完句成分”は連体修飾語、連用修飾語あるいは連用修飾節、構文形式、時間副詞“(正)在”、語気助詞“呢”などである。以下、これらの要素をそれぞれ考察する。

##### ① 数量的連体修飾語などの連体修飾語

連体修飾語は“V 着”を伴うフレーズを独立文として完結させる“完句成分”の一つである。例文を見よう。

(6-18) a.?墙上挂着画。

b.墙上 挂着 一 幅 画。(=(6-12))

(壁 掛ける+Zhe 1 量詞 絵)

(壁には絵が 1 枚掛かっている。)

(6-19) a.?院子里养着狗。(=(6-13))

b.院子里 养着 50 只 狗。

(庭 飼う+Zhe 50 量詞 犬 )

(庭では犬を 50 匹飼っている。)

(6-20) a.?路灯下站着女人。

b.路灯下 站着 1 个 女人。

(街灯の下 立つ+Zhe 1 量詞 女性)

(街灯の下 1 人の女が立っている。)

(6-21) a.?他手里拿着毛衣。

b.他 手里 拿着 刚 买回来 的 毛衣。(=(6-14))

(彼 手元 持つ+Zhe 先 買ってくる の セーター)

(彼は買ってきたばかりのセーターを手を持っている。)

連体修飾語は“完句成分”として、“V 着”を伴うフレーズを独立文にさせる機能を持つ。特に、存在構文“L+V 着+NP”の場合、数量的連体修飾語は存在構文“L+V 着+NP”の“NP”によく出現する。(6-18)～(6-21)が示すように、数量的連体修飾語(1 枚、50 匹、1 人)とほかの連体修飾語(買ってきたばかりの)は、存在構文“L+V 着+NP”を完結させる機能を持つ。「絵」、「犬」、「女性」と「セーター」は裸名詞のままでは無界名詞と扱われる。数量的連体修飾語(1 枚、50 匹、1 人)と連体修飾語(買ってきたばかりの)でそれらの名詞を修飾して限定すれば、有界名詞化するとともに、発話されたフレーズを発話時点と結びつける。そのため、聞き手(読み手)はそのフレーズの「現実性」を捉えられる。つまり、数量的連体修飾語などの連体修飾語は“V 着”を伴うフレーズに時空に位置づける機能を持ち、“V 着”を伴うフレーズを独立文として完結させる。

## ②連用修飾語あるいは連用修飾節

連用修飾語あるいは連用修飾節は“V 着”を伴うフレーズを独立文として完結させる“完句成分”の一つである。例文を見よう。

(6-22) a.?他吃着饭。

b.他 默不作声狼吞虎咽地 吃着 饭。(CCL)

(彼 ADV 食べる+Zhe ご飯 )

(彼は黙って、ガツガツとご飯を食べている。)

(6-23) a.?他操纵着方向盘。

b.他 伶俐地 操纵着 方向盘， 就像 一架 无语的 机器。(CCL)

(彼 見事に コントロールする+Zhe ハンドル まるで一 量詞 ADJ 機械)

(彼は機械みたいに、見事にハンドルをコントロールしている。)

(6-22)、(6-23)は、“默不作声，狼吞虎咽地(黙って、ガツガツと)”、“伶俐地、就像一架无语的机器(機械みたいに、見事に)”というような様態を表す連用修飾語、連用修飾節も“V 着”を完結させる機能を持つことを示す。これらの連用修飾語、連用修飾節は“V 着”が表す「線状過程」を描写・限定し、ある具体的場面、即ち特定の時空に結びつける機能を持つ。さらに、様態を表す連用修飾語、連用修飾節は、そうした事態の中で、被修飾動作を、聞き手(読み手)に伝えるべき情報の中核として解釈させる機能も果たしてもいる。

### ③ 構文形式

構文形式も“V 着”を伴うフレーズを独立文として完結させる“完句成分”の一つである。例文を見よう。

(6-24) a.?张皓天以为出了什么事，挣扎着。

b.张皓天 以为 出 了 什么事， 挣扎着 给 女孩 开门。(CCL)

(PSN 思う できる Le 何か もがく+Zhe あげる 女の子 ドアを開ける)

(張皓天は何かが起こったと思い、必死に女の子のためドアを開けてあげた。)

(6-25) a.?听完老师的训斥，她哭着。

b.听 完 老师的 训斥， 她 哭着 跑 了 出去。(BCC)

(聞く終わる 先生の 訓戒 彼女 泣く+Zhe 走る Le 出て行く )

(彼女は先生に叱られて、泣きながら走って出て行った。)

(6-26) a.? 张皓天瞪着眼。

b.张皓天 瞪着眼 对 女孩 说：“这 是 什么?(CCL)

(PSN 睨み付ける+Zhe に 女の子 話す これ は 何)

(張皓天は女の子を睨みつけて、「これは何だ?」と聞いた。)

(6-27) a.?露露看着他。

b.露露 看着 他 一根一根地 把 面条 吃 完。(BCC)

(PSN 見る+Zhe 彼 ADV CAUS ラーメン 食べる 終わる)

(露露は彼がラーメンを一本一本食べる様子を、食べ終わるまで見つめていた。)

(6-28) a.?他们开着会。

b.他们 开着会， 外面 下起雪来 了。(=(6-17))

(彼ら 会議をする+Zhe 外 雪降り始める LE)

(会議中、雪が降り出した。)

例文(6-24b)、(6-25b)、(6-26b)は“连动句”(“V<sub>1</sub> 着 V<sub>2</sub>”)の形式である。V<sub>2</sub>はこのような構文の主な動作であり、“V<sub>1</sub> 着”はV<sub>2</sub>が行われる様態、方法、手段の付帯状況を伝える。例文(6-24b)では、“挣扎着”は動作主がドアを開ける際の様子を示す。例文(6-25b)の“哭着”は走って出る時に泣いているという様態を示す。例文(6-26b)の“瞪着”は話している時に睨みつけている様態を表す。例文(6-24b)、(6-25b)、(6-26b)では、V<sub>1</sub>とV<sub>2</sub>の動作主は同じであるが、例文(6-27b)では、V<sub>1</sub>とV<sub>2</sub>の動作主は異なる。例文(6-27b)では、V<sub>1</sub>としての「見つめる」の動作主は「露露」であり、V<sub>2</sub>としての「食べる」の動作主はV<sub>1</sub>の目的語の「彼」である。例文(6-28b)は例文(6-27b)と同様に、動作主体が異なる。(6-28b)では、ある動作の起きているところに、別の出来事が起きたということを表す。具体的には、会議しているところに、雪が降り出した、という状況である。(6-24b)、(6-25b)、(6-26b)、(6-27b)、(6-28b)のV<sub>2</sub>に関する動詞フレーズは(6-24a)、(6-25a)、(6-26a)、(6-27a)、(6-28a)を独立文として完結させる機能を持つことがわかる。V<sub>2</sub>が表す動作は聞き手(読み手)に伝えるべき情報の中核として解釈できる。

(6-29) a.?一大群人吃着。

b.一大群人 吃着, 跳着, 拥挤着, 叫嚷着。(CCL)

(大勢の人 食べる+Zhe 踊る+Zhe 押し合う+Zhe 叫ぶ+Zhe)

(大勢の人が食べたり、踊ったり、押し合ったり、叫んだりしている。)

(6-30) a.?肖玉莲踢着水壶。

b.肖玉莲 踢着 水壶, 追赶着 火焰 燃烧最猛烈的 地方。(BCC)

(PSN 蹴る+Zhe 水筒 追いかける+Zhe 火炎 ADJ ところ)

(肖玉蓮は水筒を蹴りながら、燃え上がる火炎のもっとも激しいところを追いかけている。)

(6-31) a. 肖玉莲 踢着 水壶, 追赶着 火焰 燃烧最猛烈的 地方。(=(6-30)

(PSN 蹴る+Zhe 水筒、追いかける+Zhe 火炎 ADJ ところ)

(肖玉蓮は水筒を蹴りながら、燃え上がる火炎のもっとも激しいところを追いかけている。)

b. 肖玉莲 一边 踢着 水壶, 一边 追赶着

火焰燃烧最猛烈的 地方。

(PSN 蹴る しながら +Zhe 水筒 しながら 追いかける+Zhe 火炎 ADJ ところ)

(肖玉蓮は水筒を蹴りながら、燃え上がる火炎のもっとも激しいところを追いかけている。)

(6-29b)、(6-30b)は、複数の“V 着”を用い、“V 着”を伴うフレーズを独立文として完結させる例である。このような構文においては、2つ以上の“V 着”が必要となる。(6-31)が示すように、(6-30b)のような構文の“V 着”の前に“一边，一边”が加えられても、構文の意味は変わらず、場面に応じて、いくつかの動作や現象が起きていることを示し、全体としてひとまとまりの出来事を描写する。(6-29b)、(6-30b)、(6-31b)の“V 着”が同格的に使用され、互いに参照時間とし合うため、特定の時空に位置づけることができる。そのため、(6-29b)、(6-30b)、(6-31b)は独立文として成立する。

#### ④時間副詞

時間副詞は“V 着”を伴うフレーズを独立文として完結させる“完句成分”の一つである。例文を見よう。

(6-32) a. ?珂拉做着一个甜美的梦。

b. 珂拉 (正) 在 做着 一个 甜美的梦。(BCC)

(PSN 正に Zai 夢を見る+Zhe 1 量詞 ADJ )

(ケーラーはいい夢をみているところです。)

“V 着”の「線状過程」を時空に位置づける機能を持つ時間副詞には“(正)在”がある。前章で指摘したように、“在”は、参照時間を発話時点に置く機能と、現実的な時間軸上の参照時間と仮定される時間軸上で展開される事態を繋げる機能がある。この意味で“在”は現実的な時間軸上の参照時間の「点」を際立たせる。陈忠(2009)によると、“正”は認知主体が事態を考察することに参照時間を提供する。よって、“在”、“正在”は“V 着”と共に起して、“V 着”の「線状過程」を考察するための参照時間を提供する機能を持つ。具体的に言えば、(6-32)では、“(正)在”は記述時点や発話時点の「今」に加え、「夢を見ること」が正に発生しているということを際立たせる。さらに、“(正)在”のような時間副詞は、そうした事態の中で、被修飾動作の進行中を、聞き手(読み手)に伝えるべき情報の中核として解釈させる機能も果たしている。

#### ⑤語気助詞“呢”

会話文の“陈述句(平叙文)”では、“呢”という語気助詞は“V 着”を伴うフレーズを独立文として完結させる“完句成分”の一つである。例文を見よう。

(6-33) a. 甲：还不出发么，快迟到了。

?乙：吃着饭。

- b.甲：还 不 出发 么？ 快 迟到 了。  
 (まだ NEG 出発する 疑問助詞 もうすぐ 遅刻する LE)  
 乙：吃着饭呢，你先去吧。  
 (食べる+Zhe ご飯 Ne )  
 (甲：まだ出発していないのですか?遅刻しますよ。)  
 乙：ご飯を食べていますよ。)

王学群(2015:224)は、“呢”は基本的に「オシエ」構文に用いられ、話し手(書き手)が聞き手(読み手)に伝えるある事柄(又はその一部分)に対する、聞き手(読み手)の認識の度合いを高める働きがあると結論付けている。“呢”は会話文に使われ、発話現場に強く依存している。例文(6-33)のように、“呢”がある場合、発話時点は出来事の参照時間として認識される。つまり、“呢”は“着”と共起すると、出来事の発生時間を示し、“V 着”の「線状過程」を現実世界に位置づけ、文が完結させる。

上記の分析を踏まえ、“V 着”を伴うフレーズを独立文として完結させる“完句成分”は下記の表のようにまとめられる。

表 14 “V 着”を伴うフレーズを独立文として完結させる“完句成分”

地の文	数量的連体修飾語などの連体修飾語 連用修飾語あるいは連用修飾節 構文形式(“V <sub>1</sub> 着 V <sub>2</sub> ”、“V <sub>1</sub> 着, V <sub>2</sub> ”、 “一边 V <sub>1</sub> 着, 一边 V <sub>2</sub> 着”、“V <sub>1</sub> 着、V <sub>2</sub> 着…”) 時間副詞“(正)在”
会話文の平叙文	語気助詞“呢”

## 6.5 まとめ

本章は、“V 着”を伴うフレーズを独立文として完結させる“完句成分”を考察した。結論を下記のようにまとめる。

第一に、先行研究を踏まえ、本論文では“完句成分”を「コンテキストに頼らず文を完結させるために必要な中核述語以外の要素」と定義した。

第二に、“V 着”を伴う一部のフレーズが独立文として成立しない理由は外部参照時間がないことで、現実世界に位置づけられないためである。“着”は現実的な時間軸上の参照時間と関係がないため、“着”の認知視点から見た“V 着”の「線状過程」はもともと現実的な時間軸上に位置づけられない。何らかの“完句成分”を加えると、“V 着”の「線状過程」を現実的な時間軸と関連付け、“V 着”に「現実性」を与えるため、“V 着”を伴うフレーズを独立文にさせる。つまり、“完句成分”は“V 着”の「線状過程」を時空に位置づける機能がある。

第三に、会話文の平叙文における“V 着”を伴うフレーズの“完句成分”は語気助詞“呢”であり、地の文における“V 着”を伴うフレーズの“完句成分”は数量的連体修飾語などの連体修飾語、連用修飾語あるいは連用修飾節、構文形式(“V<sub>1</sub> 着 V<sub>2</sub>”、“V<sub>1</sub> 着, V<sub>2</sub>”、“一边 V<sub>1</sub> 着, 一边 V<sub>2</sub> 着”、“V<sub>1</sub> 着、V<sub>2</sub> 着...”)、時間副詞“(正)在”である。

## 第 7 章 終章

本論文は、中国語の「動相形式」“着”の本質を解明することを目的とした。全体的に見れば、次のように議論を展開した。まず、中国語の「動相形式」“着”の本質が「線状視点」を表す点にあるという仮説を提案した。次に、“着”と動詞との共起関係、“着”と“了”および“在”との比較から、“着”の本質に関する仮説の妥当性を検証した。このことにより、“着”の本質を明らかにするとともに、“着”と“了”や“在”との使い分けも明らかにした。最後に、“V 着”を伴うフレーズを独立文として完結させる要素との関係から“着”の「線状視点」の特徴を明らかにした。

第 1 章では、まず、研究対象、研究目的、本論文の構成と概要を示した。次に、中国語の「動相形式」“着”の文法化の過程を説明した。また、本論文における「動相」と「動相形式」の定義を明らかにした上で、“着”や“了”のような「動相形式」は認知主体が事態を認知する窓口のような認知視点であるという考え方を提案した。具体的な結論は次の通りである。①「動相」とは事態の内部的な時間構造の捉え方(事態のどの段階に注目するか)に関わる文法カテゴリーである。言い換えれば、認知主体がスキニングの動的な認知プロセスで事態の異なる局面を観察することである。②“着”や“了”のような「動相形式」は認知主体がスキニングの動的な認知プロセスを行う際に用いる認知視点である。

第 2 章では、中国語の「動相形式」“着”の本質に関する本論文の捉え方を提起した。第一に、“着”の意味に関する先行研究を整理し、“着”が進行や持続を表せるか否かという議論をめぐり研究者により意見が異なることを指摘した。第二に、本論文における進行と持続を定義した上で、“着”は進行を表さないことを説明した。本論文における進行とは時間軸上の参照時間において、事態が正に発生していることであり、本論文における持続とは時間軸上における幅を持つ状態が保持されることであると定義した。発話時点において捉えられる事態の局面は認知主体が“着”という認知視点から知覚するプロセスにあるため、“着”は進行を表すという誤解が生じることを明らかにした。第三に、朱繼征(2000)が指摘した進行相、持続相、残存相の 3 つを表すことの可能な“穿着”の

例を、スキヤニングの認知プロセスから考察した。その上で、中国語の「動相形式」「着」の本質が「線状視点」であり、“V 着”は「線状過程」を表すという本論文の仮説を提案した。「線状視点」に関する操作というのは、認知主体が動作・変化のような事態を捉える際に、「線」のような形の認知視点から事態を捉えるということである。あるいは、認知主体は各種類の事態における被写体を追跡する録画撮影のような方式で事態を捉えるということである。また、認知主体が“着”の「線状視点」から捉えた部分は仮定される時間軸上において幅を持つということ論じた上で、その幅をもつ部分は「線状過程」として、“V 着”の本質とする。第四に、戴耀晶(1991)の成果を踏まえ、“V 着”が表す「線状過程」の特徴は、非完結性、持続性、動静の二重性、均質性に現れることを指摘した。また、本論文は「持続」と「持続性」を同じ概念として扱い、両方も“V 着”が表す「線状過程」の特徴であることを明らかにした。

第3章から第5章までは、中国語の「動相形式」「着」の本質が「線状視点」であるという考え方の妥当性に関して、動詞との共起関係、他の「動相形式」との比較や構文形式との関わりからの検証を行う部分である。

第3章では、孫英杰(2006)の動詞分類を検討しながら、状態動詞、活動動詞、結果動詞、完成動詞の4種類をそれぞれ考察した上で、各種類の動詞と“着”との共起関係を考察した。考察の結果、次のような結論が得られた。①仮定される時間軸上において内部過程を「線」と捉える動詞のみが“着”と共起できる。②“着”と共起できない動詞の内部過程を仮定される時間軸上に表示すると、「点」でしか表示できないか、或いは仮定される時間軸上に表示できない。③内部過程が仮定される時間軸上において「点」で表される動詞は通常“着”と共起できないが、主体が複数の場合或いは動作が繰り返される場合に、その動詞の内部過程をいくつかの「点」からなる「線」として捉えられるため、“着”と共起できるようになる。このように、各種類の動詞と“着”との共起関係から“着”という認知視点が「線状視点」であることが確認できた。“着”の「線状視点」から捉えた“V 着”が「線状過程」を表すということもわかった。

第4章では、存在構文“L+V 着/了+NP”における“V 着”と“V 了”の違いを検討した。第一に、存在構文“L+V 着/了+NP”における動詞の語彙的意味と存在構文“L+V 着/了+NP”の「存在義」の関係から、存在構文“L+V 着/了+NP”

における動詞と“着”、“了”との共起関係を制約する要因を考察するほかに、存在構文“L+V 着/了+NP”における“V 着”と“V 了”のそれぞれの役割を考察した。結論は次の通りである。①仮定される時間軸上に始点や終点がない「線」で表示できる動詞は“了”と共起できず、“着”のみと共起できる。この場合には、“V 着”は存在主体が存在しているという静的な存在状態を表す。②“了”しか共起できない動詞は、“了”と共起して動作の終了に注目し、存在主体の存在理由を表す。③“着”と“了”の両方と共起できる動詞であれば、“V 着”の場合、存在構文の「存在義」は認知主体が直接に存在状態に注目して捉えたものである。一方、“V 了”の場合、存在文の「存在義」は認知主体が動作の終了の意味から推論して捉えたものである。言い換えれば、存在構文“L+V 着/了+NP”における“V 着”は残存結果の線状過程に焦点を当てるが、“V 了”は残存状態の始点に焦点を当てる。④存在構文“L+V 着/了+NP”における“着”と“了”と共起する動詞の特徴は、“着”の「線状視点」と“了”の「点状視点」と一致する。第二に、“着”と“了”それぞれの構文環境の違いを考察し、中国語の「動相形式」“着”の本質が「線状視点」であるという考え方の妥当性を検証した。検討した結果は次の通りである。①持続・経常的時間の幅を示す連用修飾語“仍(まだ、相変わらず)”、“一直(ずっと)”、“总是(いつも)”、“每天(毎日)”は、“V 着”と共起し、“V 着”が表す存在状態や存在方式が変わっていないことに焦点を当てる。それらの連用修飾語は、時間の幅を示すという点において、“着”の「線状視点」という認知視点と一致する。②“刚(たった今)”、“已(すでに)”、“又(また)”、“不知什么时候(いつの間にか)”のような已然を表す連用修飾語は、“V 了”と共起し、存在主体の存在理由が“V 了”が示す動作・変化に由来することを際立たせる。それらの連用修飾語は、動作・変化の終了を示すという点において、“了”の「点状視点」という認知視点と一致する。③存在構文“L+V 着+NP”と存在構文“L+V 了+NP”の使い分けは、変化を指示するコンテキストにも制約される。変化の情報が含意される場合には、“V 了”を使いやすい。動作・変化の終了を示すという点において、このようなコンテキストも“了”の「点状視点」と一致する。変化の情報が含意されず存在状態や存在方式をありのまま描写する場合には、“V 着”を使いやすい。時間の幅を示すという点において、このようなコンテキストも“着”の「線状視点」と一致する。

第5章では、進行を表す文における“着”と“在”の違いから“着”の「線状視点」について検討した。第一に、進行を表す文において、“着”、“在”、時間の三者の関係を考察した。検討した結果は次の通りである。“在”は現実的な時間軸上の参照時間の「点」を際立たせる。“着”は現実的な時間軸上の参照時間と関係せず、仮定される時間軸上の「線」を際立たせる。第二に、認知主体に与えるイメージ、共起する様態描写の違いから“着”と“在”の違いを考察した。検討した結果は次のようである。①認知主体に与えるイメージから見ると、“在”が使われる文は写真的イメージを与えるのに対して、“着”が使われる文は録画的イメージを与えると言える。②様態描写は“V着”とよく共起し、“V着”が表す「線状過程」を修飾し動作の展開過程の姿を描写する。様態描写が“在”と共起すると、文の容認度が低くなる。③認知主体に与えるイメージと様態描写との共起関係は、“在”が現実的な時間軸上の参照時間の「点」を際立たせ、“着”が仮定される時間軸上の「線」を際立たせるという特徴とも一致する。

第6章では、“着”の「線状視点」と“V着”を伴うフレーズを完結させる要素の関係を考察した。また、それらの要素を明らかにした上で、“着”の「線状視点」の特徴を考察した。第一に、先行研究を踏まえ、“完句成分”を「コンテクストに頼らず文を完結させるために必要な、中核述語以外の要素」と定義した。第二に、“完句成分”が存在する理由、言い換えれば“V着”を伴うフレーズが独立文として成立しない理由を検討した。検討した結果は次の通りである。“V着”を伴う一部のフレーズが独立文として成立しない理由は外部参照時間がないことで、現実世界に位置づけられないためである。“着”は現実的な時間軸上の参照時間と関係がないため、“着”の認知視点から見た“V着”の「線状過程」は現実的な時間軸上に位置づけることができない。何らかの“完句成分”を加えると、“V着”の「線状過程」を現実的な時間軸と関連付け、“V着”に「現実性」を与え、“V着”を伴うフレーズを独立文にさせる。要するに、“完句成分”は“V着”の「線状過程」を時空に位置づける機能がある。第三に、会話文の平叙文と地の文という2種類の文から“V着”を伴うフレーズの“完句成分”を考察した。会話文の平叙文において、“V着”を伴うフレーズの“完句成分”は語気助詞“呢”であり、地の文において、“V着”を伴うフレーズの“完句成分”は数量的連体修飾語などの連体修飾語、連用修飾語あるいは連用修飾節、“V<sub>1</sub>着 V<sub>2</sub>”、“V<sub>1</sub>

着、V<sub>2</sub>”、“一边 V<sub>1</sub> 着，一边 V<sub>2</sub> 着”、“V<sub>1</sub> 着、V<sub>2</sub> 着...” などのような構文形式、時間副詞“(正)在”であると説明した。また、これらの“完句成分”の必要性は逆に、“V 着”という「線状過程」には「現実性」がないことを証明している。

以上は本論文で得られた結論である。なお、残されている課題もある。たとえば、「NP+V 着/起来+AP」構文の場合、“着”と“起来”が置き換えられることができる。起動相の形式である“起来”と「線状視点」である“着”はなぜ置き換えられるのであろうか。また、“着”の「線状視点」に対応する日本語の表現は何であらうか。これらの問題については今後の課題としたい。

## 参考文献

### 日本語の参考文献(五十音順)

- 荒川 清秀(2015)『動詞を中心にした中国語文法論集』,東京:白帝社。
- 尹 美蓮(2013)「中国語の存在文に関する研究－存在文“着”構文と“了”構文の構文形式と意味の分析を中心に－」,修士学位論文,新潟大学大学院現代社会文化研究科。
- 王 学群(2007)『中国語の“V着”に関する研究』,東京:白帝社。
- 王 学群(2015)「“呢”の時間性と語気性について」,『日本語と中国語のモデリティ』(日中対照言語学会(編)), 201-225 頁。
- 木村 英樹(1982)「テンス・アスペクト:中国語」,『講座日本語学 11:外国語との対照Ⅱ』(寺村秀夫(他編)), 19-39 頁。
- 木村 英樹(1986)「“着”と“在”の否定」,『中国語』(中国語学習誌)11 月, 323 号, 21 頁。
- 木村 英樹(1997)「動詞接尾辞“了”の意味と表現機能」,『大河内康憲教授退官記念中国語学論文集』(大河内康憲教授退官記念論文集刊行会(編)), 157-179 頁。
- 工藤 真由美(2014)『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』,東京:ひつじ書房。
- 下地 早智子(2011)「接続形式としての“着”」,国立国語研究所共同研究プロジェクト,「複文構文の意味の研究」ワークショップ,神戸市大学共同利用施設 UNITY)。
- 朱 継征(1997)「中国語と日本語のアスペクト(aspect)について」,『新潟経営大学紀要』(新潟経営大学)第 3 号, 273-286 頁。
- 朱 継征(2000)『中国語の動相』,東京:白帝社。
- 朱 継征(2004)「中国語の起動相について－“开始～”と“～起来”の文法的な使い分けと意味的分析を中心に－」,『中国語学』(日本中国語学会)251 号, 114-135 頁。

- 張 文青(2013)「アスペクト助詞“着”の教授法に関する試み」,『言語と言語教育—アジア太平洋の声 ポリグロシア』(立命館アジア太平洋大学)第 24 号, 112-127 頁。
- 辻 幸夫(2013)『新編 認知言語学キーワード事典』,東京:研究社。
- 鄭 瓊花(2015)「存在文における“V 着”と“V 了”構文について」,日本中国語学会関西支部 2015 年度第 1 回例会(口頭発表),2015 年 6 月 27 日,関西学院大学梅田キャンパス。
- 鄭 瓊花(2016)「進行相を表す時間副詞の“在”と助動詞の“着”の比較研究」,『言語研究』(新潟大学大学院現代社会文化研究科)第 1 号, 71-85 頁。
- 鄭 瓊花(2017a)「“着”の基本的な文法的意味と意味特徴」,『現代社会文化研究科紀要』(新潟大学大学院現代社会文化研究科)第 64 号, 183-198 頁。
- 鄭 瓊花(2017b)「“着”構文を完結させる要素に関する研究」,『言語研究』(新潟大学大学院現代社会文化研究科)第 2 号, 67-81 頁。
- 鄭 瓊花(2017c)「“NP+V-着+AP”構文と“NP+V-起来+AP”構文の比較研究」,日本中国語学会第 67 回全国大会(口頭発表),2017 年 11 月 12 日,中央大学多摩キャンパス。
- 鄭 瓊花(2018a)「“(NP)+V-着+AP”構文に関する研究」,『言語研究』(新潟大学大学院現代社会文化研究科)第 3 号, 38-46 頁。
- 鄭 瓊花(2018b)「“着”と共起する様態描写に関する研究—“起来”の場合と比較しながら」,日本中国語学会第 68 回全国大会(ポスター発表),2018 年 11 月 4 日,神戸市外国語大学。
- 鄭 瓊花(2019)「“V<sub>1</sub> 着, V<sub>2</sub>”に関する研究」,『言語研究』(新潟大学大学院現代社会文化研究科)第 4 号, 33-41 頁。
- 鄭 瓊花(2020a)「“着”の「線状視点」に関する検証—動詞との共起関係からの分析—」,『言語の普遍性と個別性』(新潟大学大学院現代社会文化研究科)第 11 号, 33-62 頁。
- 鄭 瓊花(2020b)「中国語のアスペクトマーカー“着”の本質について」,『言語研究』(新潟大学大学院現代社会文化研究科)第 5 号, 11-26 頁。
- 平山 久雄(1959)「北京語の“着”とその接尾する動詞について」,『中国語学』(日本中国語学会)7 月, 88 号, 4-6 頁。

- 北京大学中国語言文学系現代漢語教研室(2004)『現代中国語総説』(松岡榮志、古川裕(監訳)), 東京:三省堂。
- 町田 健(2004)『ソーシャルと言語学—コトバはなぜ通じるのか』, 東京:講談社。
- 村尾 治彦(2013)「構文」, 『認知言語学 基礎から最前線へ』(森雄一・高橋英光(編)), 205-230 頁。
- 山梨 正明(2000)『認知言語学原理』, 東京:くろしお出版。
- 楊 凱栄(2001)「中国語の“了”について」, 『「た」の言語学』(つくば言語文化フォーラム(編)), 112-127 頁。
- 楊 明(2009)「中国語の結果構文における動補構造に関する研究」, 博士学位論文, 千葉大学大学院。
- 劉 綺紋(2006)『中国語のアスペクトとモダリティ』, 大阪:大阪大学出版会。
- 劉 琛琛(2007)「動詞の後につく“了”と“着”—存在文に生じる“了”と“着”の意味的相違を中心に—」, 『日本中国語学会第 57 回全国大会予稿集』(日本中国語学会), 124-128 頁。

## 中国語の参考文献(ピンイン順)

- 陈 刚(1980)<试论“着”的用法极其与英语进行式的比较>, 《中国语文》(中国社会科学院语言研究所主办)1 期, 21-27 页。
- 陈 平(1988)<论现代汉语时间系统的三元结构>, 《中国语文》(中国社会科学院语言研究所主办)6 期, 401-402 页。
- 陈月明(1999)<时间副词“在”与“着”>, 《面临新世纪挑战的现代汉语语法研究》(陆俭明主编)4 期, 10-14 页。
- 陈 忠(2009)<“着”与“正”、“在”的替换条件及其理据>, 《语言教学与研究》(北京语言大学主办)3 期, 81-88 页。
- 戴耀晶(1991)<现代汉语表示持续体的“着”的语义分析>, 《语言教学与研究》(北京语言大学主办)2 期, 92-106 页。
- 邓宇阳(2019)<重新探讨行域层面的句末助词“了”的语义及其生成机制>, 『言語研究』第 4 号, 新潟大学大学院現代社会文化研究科, 42-54 页。

- 范方莲(1963)〈存在句〉,《中国语文》(中国社会科学院语言研究所主办)2期,总126期,396-395页。
- 房玉清(1992)《实用汉语语法》,北京:北京语言学院出版社。
- 范晓(2010)《现代汉语存在句研究》,北京:中国社会科学出版社。
- 费春元(1992)〈说“着”〉,《语文研究》(山西省社会科学院主办)2期,18-28页。
- 龚千炎(1995)《汉语的时相 时制 时态》,北京:商务印书馆。
- 郭锐(1993)〈汉语动词的过程结构〉,《中国语文》(中国社会科学院语言研究所主办)6期,410-419页。
- 郭锐(2015)〈汉语谓词性成分的时间参照及其句法后果〉,《世界汉语教学》(北京语言大学主办)4期,435-449页。
- 郭彦成·洪淼(2000)〈现代汉语完句成分研究〉,《常德师范学院学报(现更名为湖南文理学院学报)》(湖南文理学院主办),4期,97-99页。
- 顾阳(2007)〈时态、时制理论与汉语时间参照〉,《语言科学》(江苏师范大学语言研究所主办)4期,22-38页。
- 贺阳(1994)〈汉语完句成分试探〉,《语言教学与研究》(北京语言大学主办)4期,26-38页。
- 胡明杨·劲松(1989)〈流水句初探〉,《语言教学与研究》(北京语言大学主办)4期,42-54页。
- 金奉民(1991)〈助词“着”的基本语法意义〉,《汉语学习》(延边大学主办)4期,23-28页。
- 金延恩(1999)〈汉语完句成分说略〉,《汉语学习》(延边大学主办)6期,8-13页。
- 竞成(1996)〈汉语的成句过程和时间概念的表述〉,《语文研究》(山西省社会科学院主办)1期,1-5页。
- 李杰(2003)〈试析“挂”类动词静态化的条件〉,《语言研究》(华中科技大学中国语言研究所主办)3期23卷,33-36页。
- 李临定(1985)〈动词的动态功能和静态功能〉,《汉语学习》(延边大学主办)1期,6-10页。
- 李临定(1990)〈动词分类研究说略〉,《中国语文》(中国社会科学院语言研究所主办)4期,248-257页。

- 李 玲(2014)<韩国学生汉语表主观认识词语的习得研究>, 南京师范大学, 硕士学位论文。
- 刘月华(1983)《实用现代汉语语法》, 北京: 外语教学与研究出版社。
- 刘月华(2001)《实用现代汉语语法》(增订本), 北京: 商务印书馆。
- 陆俭明(1999)<“着(·zhe)”字补议>, 《中国语文》(中国社会科学院语言研究所主办)5 期, 331-336 页。
- 吕叔湘(1980)《现代汉语八百词》, 北京: 商务印书馆。
- 吕叔湘(1999)《现代汉语八百词》(增订本), 北京: 商务印书馆。
- 马庆株(1981)<时量宾语和动词的类>, 《中国语文》(中国社会科学院语言研究所主办)第 2 期, 86-90 页。
- 梅祖麟(1988)<汉语方言里虚词“著”字三种用法来源>, 《中国语言学报》(中国语言学会)3 期, 193-216 页。
- 木村英树(1983)<关于补语性词尾“着/Zhe/”和“了/Le/”>, 《语文研究》(山西省社会科学院主办)2 期, 22-30 页。
- 钱乃荣(2000)<体助词“着”不表示“进行”意义>, 《汉语学习》(延边大学主办)4 期, 1-6 页。
- 任 鹰(2000)<静态存在句中“V 了”等于“V 着”现象解析>, 《世界汉语教学》(北京语言大学主办)第 1 期, 28-34 页。
- 任 鹰(2007)<动词词义在结构中的游移与实现>, 《中国语文》(中国社会科学院语言研究所主办)5 期, 419-430 页。
- 尚 新(2009)<汉语系统内部的概念空间化配置对立—以“在”和“着”为例>, 《语言科学》(江苏师范大学语言研究所主办)2 期, 165-171 页。
- 沈家煊(1995)<“有界”与“无界”>, 《中国语文》(中国社会科学院语言研究所主办)5 期, 367-380 页。
- 税昌锡(2014)<事件过程结构及其动态特征—以“摆”类动词构成的附着事件为例—>, 《语言学论丛》(北京大学中国语言文学系汉语语言学研究中心主办)第 49 辑, 1 期, 109-136 页。
- 宋玉柱(1988)<存在句中动词后边的“着”和“了”>, 《语法论稿》(宋玉柱编), 68-77 页。
- 宋玉柱(1995)<论存在句系列>, 《语法研究与搜索》(中国语文杂志社编), 200-211 页。

- 孙英杰(2006)〈现代汉语体系统研究〉, 博士学位论文, 北京语言大学。
- 孙瑞·李丽虹(2010)〈副词“在”与助词“着”话语自足功能差异比较〉, 《语文知识》(郑州大学主办)1期, 74-78页。
- 陶振伟(2005)〈现代汉语“到”的语义认知考察〉, 《邢台学院学报》(邢台学院主办)第20卷, 第4期, 90-92页。
- 王 力(1980)《汉语史稿》, 北京: 中华书局。
- 王 力(1943)《中国现代语法》, 北京: 商务印书馆。
- 王 力(1944)《中国语法理论》, 济南: 山东教育出版社。
- 王勇·徐杰(2010)〈汉语存在句的构式语法研究〉, 《语言研究》(华中科技大学中国语言研究所主办)3期 30卷, 62-70页。
- 王玉华(2004)〈完句成分与“有界”、“无界”〉, 《语文学刊》(内蒙古师范大学主办)3期, 70-73页。
- 吴春相·余瑞雪(2008)〈不/没+VP”的时间意义〉, 《长春师范学院学报》(长春师范学院主办)4期, 83-88页。
- 张 黎(1996)〈“着”的语义分布及其语法意义〉, 《语文研究》(山西省社会科学院主办)1期, 6-12页。
- 朱德熙(1982)《语法讲义》, 北京: 商务印书馆。
- 朱德熙(1990)〈“在黑板上写字”及其相关句式〉, 《语法从稿》(朱德熙编), 4-18页。
- 左思民(2004)〈动词重叠与时量〉, 《汉语时体系统国际研讨会论文集》(竞成主编), 236-251页。
- 左思民(2009)〈动词的动相分类〉, 《华东师范大学学报(哲学社会科学版)》(华东师范大学主办)第1期, 74-82页。
- 赵元任(1979)《汉语口语语法》(吕叔湘译), 北京: 商务印书馆。
- 章 婧(2007)〈动态助词“着”的成句条件研究〉, 《山东行政学院山东省经济管理干部学院学报》(山东行政学院山东省经济管理干部学院主办)第2期, 123-126页。

## 英語の参考文献(アルファベット順)

Fillmore, Charles J. (1982) “Frame Semantics.” In: The Linguistic Society of Korea (ed.) *Linguistics in the Morning Calm*. Hanshin. 111-138.

Tang, Sze-Wing and Thomas Hun-Tak Lee (2000) Focus as Anchoring Condition. Paper presented at the International Symposium on Topic and Focus in Chinese. Polytechnic University of Hong Kong.

Vendler, Zeno (1967) *Linguistics in Philosophy*. Cornell University Press.

## 謝辞

本論文を執筆するにあたり、多くの方々から励ましとご指導をいただいた。  
心より感謝の意を表したい。

本論文の主査である朱継征先生、副査である大竹芳夫先生、山田陽子先生、江畑冬生先生、土屋太佑先生からは厳しくも温かな指導をいただいた。朱継征先生からは、主指導教員として論文の構成から表現の細部にわたりご助言をいただいた。また、学会発表の際には貴重なアドバイスをいただき、研究者への道を導いてくださった。学問と生活を両立できるよう、生活面においても多くの助言をいただいた。大竹芳夫先生からは、本論文の基盤となる学術論文や口頭発表原稿の細部にわたりご指導をいただいた。山田陽子先生からは論文の細部にわたりご指導をいただき、貴重なご指導を頂いた。江畑冬生先生も丁寧に細かくご指導くださり、貴重なご助言をくださった。土屋太佑先生は、資格審査の際に中国語教育の立場から貴重なアドバイスを頂いた。本論文は、先生がたのご助言と熱心なご指導なくしては完成していない。ここに記して深甚の謝意を表したい。

また、論文の日本語をチェックしてくださった経済学部原萌花氏、論文の内容についてアドバイスしてくれたアジアユーロ言語研究所の鈴木武生先生と愛知県立大学の楊明先生、本研究中の作例の容認可能性の判断に協力してくれた中国留学生、特に、研究を支えてくれた先輩の尹美蓮さん、楊麗榮さん、後輩の鄧宇陽さんにお礼を申し上げたい。

なお、経済の面と精神の面から支えてくれた公益財団法人ロータリー米山記念奨学会と公益財団法人平和中島財団にもお礼を申し上げたい。

最後に、新潟大学大学院現代社会文化研究助教の石田純子先生、川西裕也先生、増田瑞穂先生および現代社会文化研究科学務係の滝沢真琴先生は、研究環境を整えてくださり、現代社会文化研究科の紀要投稿の審査、論文提出の手続きなどの事務手続きから生活面に至るまでお世話になった。ここに記して心より感謝の意を表したい。

